松尾勇四郎編

研究參考書調全

東京　敬文社藏版

明治
37 9 19
内交

序言

近時我が國出版界の興隆と共に、漸次外國書の輸入旺盛となり、着々各方面に研究の便整備すと雖ども、爲めに又玉石混淆の弊敢て尠なしとせず、若し適當の指針なからんには、徒らに貴重の時と資金を失ふのみならず、其の研究途上幾多の徒勞を反復するの愚を試みざるを得ず、されば世既に是に資するの書を待つと爰に久しく、而して今に猶ほ一書を見る能はざるなり、予や素より斗屑のオを以て研究の日未だ太だ淺く、萬卷を咀嚼し、眞價を總鑑し、以て愚信の指導を世に致すの識なきは勿論、亦敢て斯の如き擧に出てんは僭上妄誕の事に屬すと雖ども、自己の經驗に常に必要を感じ來たれる情念の益、切

なるに至りて、遂に修養の膚淺を顧みるに遑なく、僅かに短年の知己として從事せる經濟學の研究に關し、其の一般研究者の爲めに內外各專門大家の指擧する所を考量取捨して、可及的恰當なる研究乃至參考書の採擇を計り、以て聊か世の宿望に充てんとの盲蛇を敢てするに至れり、其の攝收の往々法に適せず、取捨撰擇の多く宜に當らざるものあるは言を俟たず、殊に予が深く本書讀閱の諸氏に陳謝し、並びに本書掲載各書の著者に厚謝せざるべからざるものは、(一)外國語書の英米二國に狹限せられ、(二)本邦語書の殆んど取捨を顧みざるの觀あり、(三)更に全體に於て撰擇の精撰を缺けるの傾向あり、(四)各書の紹介が多く漫評に止まり、其の長短眞價の存する處を詳細に辯明せざると是なり、這は予が豫め不備缺漏の太甚しきものとして自識せざるに非ざりしも、亦其の事情の已を得ざるに因るものなくんばあらず、請ふ簡單に之を辯釋せんか、即ち第一者に於て、若し外國語書を萬國に覓むるの方針に據らんか、各國孰れも學理の研究殷盛なる今日に於て、其の攝收の著書は積んで數千卷に達すべく、之れ到底小册子の能く收容し得る處に非ず、然らば其の粹英をのみ萬國に採擇するの方針に據らんか、之に因りて益せらるゝものは遍く萬國々語に通曉するものならざるべからず、而して斯の如きと到底亦我が國一般研究者の實力に望むべきに非ず、即ち普及語を撰定して之を一國語に狹限するは、其の實際の效驗上却て有益なるを思へばなり、第二者に至りては、今や我が國經濟學の研究は最も隆盛を極めたりと雖ども、實績の上より之を觀れば漸く

今其の緒に就き、未だ以て成效の階段に到達せりと言ふべからず、されば經濟學の著述に關しても、系統を異にするものゝ外、內容多く大同小異にして特に峻別大書するの價値あるものの數種あるを見ず、其の些少の軒輊に依りて之を取捨せんよりも、比較參考の資料として寧ろ多數を擧ぐるの利なるを思ふが故なり、第三者に於ては、世に一卷にして萬全の眞を盡せるものは一も之れあるなし、されば實質上よりするも數書參考の資を供するの必要あると同時に、初學者に對しては又內容の秩序、文章の難易如何をも稽査せざる可からず、更に又研究者諸氏の讀書力の最高程度に關しても考量する處なかる可からず、斯の如くして自然撰擇の裕濶に流るゝは、實際に於て勢の已を得ざるに出づるものなり、第四者各書の紹介に關しては、初め皆內容の要槩を掲げ、之に簡單なる評論を加ふるの豫定なりしも、斯ては一書に就き渺なくも三頁以上の紙數を要し、之を全卷に累積すれば、尨大なる紙數となり、到底本書の目的とする程度の需用に應ずるを得ざるが故に、未だ多く世に聞こえざるものゝ外は漫評の咎を敢てするの已なきに至れり。

以上の理由に基き、內容の不悉に對して庶幾くば予は幾分僧上の罪を免るゝを得べしと雖ども、其の全體に於て蒐聚排列の跡を顧みれば、取捨權衡を失し、統一整齊を缺き、各書掲載の順序に於て、先後を疎怠せるもの亦渺なからず、到底本書を以て世の衆望を充たすに適するを得ずと雖ども、唯幸ひに識者の先驅となり、以て自から郭隗を任ずるを得ば、予が滿足之に

過ぐるものなきなり。

明治三十七年八月二十五日　　編者識

凡例

一書中英米原書の譯書は總て之を原書と並掲せり、之れ國語の差別に依り兩部に是を載錄するときは、內容の紹介に二重の手數を要すればなり、故に縱令原書に要なき人と雖ども、譯書の如何を知らんが爲め一應原書の部をも讀閲するの要あるべし。

一本書掲載の著書には總て定價を附せり、這は一般薄資なる諸氏の購買力の參考に資せんが爲めにて、若し夫れ斯る人々にして便覽の便りを得る能はざるか、書籍の代價は著書の眞價に比例し尤も痛切の關係を有するものなればなり、然るに本邦著書の定價には區々の割引、郵稅の差等あり、又

外國書には時價の變動、運賃の不同ありて、何れも實際購入の代價を指示するを得ず、之を以て諸氏若し實際に其の購入を望まるゝ場合には、一應其の出版內至發賣書肆に就き實際の賣價郵稅を問ひ合すの要あるべし、但し原書は各自其の出版會社の名を附記すれども、個人にて直接注文を發送せんより、專ら原書の取次販賣を業とせる東京市日本橋區通三丁目、丸善株式書籍會社に就て購入を計らるゝ方便利にして手數尠なかるべし。

一書中定價とせしは各書の奥附に據り、實價とせしは實際市場の賣價を意味し、凡そ幾何と記せしは定價實價共に不明なるが爲め、知者或は編者の鑑定に依るものにして、這は時に實際と多くの齟齬を有するとあるべし。

一原書の代價は總て之を日本貨幣に換算し、米の一弗を二圓、英の一シリングを四十八錢六厘となし、更に之に五十錢內外の運賃を加算したるものにして、何れも精價を記すを目的とせず、諸氏の參考迄に其の概價を示すを以て目的とせるものなり。

一講義錄は正式の單行本に非ざるが故に、一定の代價を記すを得ず、然れども普通二十錢以上七十錢以下の範圍に於て分冊販賣せられ、專ら東京市神田區一、橋通有斐閣書房、同神田區今川小路二丁目清水書店、萬屋書房等取次賣捌せり。

目次

緒言……一
第一章　研究參考書揭載順序……六
第二章　經濟學原論……三一
第三章　經濟學史……一〇四
第四章　經濟各論……一一五
第一節　貨幣論……一一五
第二節　銀行論……一三八
第三節　交通論……一五四
第四節　貿易論……一五八
第五章　經濟史……一六九

歐洲經濟史……一七一
日本經濟史……一八七
第六章　應用經濟學……一九七
第一節　財政學……一九九
第二節　農工商經濟に關する學科……二三七
一　農業經濟學に關する著書……二三八
二　商工業經濟學に關する著書……二四二
第三節　應用經濟理法に關する著書雜書……二四六
第七章　補助學科
一　民法商法……二五八
二　統計學……二六四
三　社會學……二六七

四　雜誌辭書類……二七五
第八章　經濟學研究法に關する著書……二七八

經濟學財政學研究參考書調

松尾勇四郎編著

緒言

經濟學の宏汎錯雜にして、多方面に觀察の立脚地を有し、又研究の地盤、多く實社會の勢力中に直接の關係深きが爲めに、學者の論說容易に斯學の本義を統括する能はず、少しく周密なる研究を遂げんと欲せば、勢ひ古今の學說を涉獵し、偏く內外の著述に討究する處なかるべからず、而して、斯くの如き研究の目的に資せんとする研究書及參考書を編纂せんは、世界的學問界の今日に於て、實に一大事業のとたる

べく、寡聞斗屑の庸輩が、到底能く成すべき瑣業に非ざるや論なし、されば、本書の解說列擧する處は、其の尤も一般的研究の目的の下に收錄せらるべきものなると、既に之を序言に述べたるが如し、然るに一般的研究とは、一見所言の範域を示すが如くにして、其の實甚だ漠然たる提言なりと雖ども、這は一般てふ意味の必然より來たる理數にして、其の實甚だ漠然たる提言なりと雖ども、這は一般てふ意味が、特殊、或は部門、或は專攻等謂へる意味に相對し、一主題の全部を網羅して、其の細綱に涉らざるの意味に解せらるゝは、普通一般てふ意味の說明を要せざる範域として首肯する處なれども、元來、之れ相對的關係の大綜の區別を看取して律するものなれば、少しく進んで其の區分の界限を明らかに劃定せんと欲せば、忽ち複雜なる關係の錯綜に惑惑し、明確なる判別の標準を立すると太だ難し、例令、今既に他の社會諸科學と專門の部門を別ちたる經濟學研究の場合に於て、貨幣論、或は銀行論、或は貿易論等、所謂經濟學各論の特殊的主題を標準となし、之等各個の主題を網羅せる初等經濟原論の講讀を以て、其の一般的研究の名を區劃命名するとを得べしと雖ども、既に原論中、夫等特殊的主題の概括せらるゝありて、少しく之に詳細の討究を濺がんか、後ち當面立設したる標準の地位は、更に之を以上の研究範域、例令歷史的、乃至考證的、又は比較的經濟學研究等の分野に移し、貨幣論、銀行論、貿易論等の特殊的部門の名目は、勢ひ之を一般的研究の名目に包容せざるを得ず、然らば、今悠くの如く新たに移し來たりたる標準の地位、即ち歷史的、考證的、或は比較的研究なるものゝ內容は、果して其の標準となるべき定確の區分を有するや否や更に之を鑑察し來たれば、之れ又本來研究狀態の手段の上より命名し、必ずしも周匝詳密なる討究をのみ意味するに非ず、其の內容には、幾多精粗の階段を包含し、而かも其の階段の關聯は、一、連の長鎖に依りて順次大小の輪環を聯繫せるにも等しく、縱令最も初等の一般的研究と雖ども、必然ある程度の史的、內至考證的、又比較的研究の手段を免かれざる自然の性質に對し、又以て其の區分を劃するの明確なる標準となすを得ず、夫れ斯くの如く一般てふ意味は、元來相對的關係に由りて其の大綱を統括するの名目に過ぎざるが故に、予が爰に一般的研究と謂へる意味も、素より劃然と區分の界限を亮定すること能はざるや論なしと雖ども、唯其の大體に於て可成統一を計り、相對的區分の大要を網羅し、以て概括的範圍を指定せるに外ならざるなり、例

言せば彼の學校生活の履修を終へ、之を土臺として部門的專攻の討究を任ずる狀態に相對し、專門校乃至各大學の規定課目に準じ、其の日課的討究を任ずる研究の狀態を意味するものなり。

然るに、今一般的研究の範圍を指定すると斯くの如しと雖ども、更に顧つて、其範圍内の實際、即ち各學校の日課的研究の狀態を顧れば、全體の上より之を一般的研究として目するを得れども、其の一般てふ中に概括せられたる部門の各部に於て、既に原論の素養を履修したるものは、時に專攻を以て名付くるも敢て不可なき精密の研鑽を以て討究せられ、縱し、特にしか專攻的態度を以てせざるものに於ても、研究の進歩より來たる自然の結果として、ある程度迄は部門的討究の必要を免かれざるに至る、されば本書の題言する處、一般的研究の名目にありと雖ども、單に一般をのみ示擧し、何等部門的研究の裨益に顧みる所なくんば、未だ以て本書の意味する程度に於ける一般的研究の實を擧ぐるものと謂ふべからず、之れ本書の一般的研究を以て任ずるに拘はらず、更に一般原理に關する原論以外に、尚ほ部門的研究の各科を分かち、其の恰當の程度を計りて各科の研究乃至參考書を選取せる所以にして、其の全體の上より、攝理搭結の時に題意に背くものあるは、多く以上の如き一般てふ意味の性質上已を得ざるに出づるものなることを諒せよ。

第一章　研究參考書掲載順序

本書の目的は一般的研究及參考書の列擧にありと雖ども、先づ之れを始むる前に當り、一言經濟學研究の順序に就て言及する處なかるべからず、之れ何等書卷列擧の標準を覓めず、只た雜然と數百の著書を收錄するのみにては、一面に研鑽の發揮を企圖する本書の目的として、決して其の任務を盡せるものと云ふべからざれば なり、然るに、本篇の性質上、之れを最も簡便に、而かも又た最も明白に果さんには、各公私大學の課程科目を、其の教授期間の年級に隨ふて考證審査するに如くものなし、何者、本篇の目的は、經濟學財政學の一般研究に資せんとする著書を選擇列擧するにありて、而して、此等一般研究に對する教授は、即ち各公私大學の施設する處、其の教授期間の年級は、取りも直さず高見博達なる識者の研鑽協議を經たる該學科研究の順序に外ならざればなり、されば、予は愛に各大學の課程科目に鑑み、予が研究及參考書列擧の順序を論定せんとす。

東京帝國大學

政治學科

第一年

憲法、國法學、比較法制史、經濟學(總論)、民法、刑法總論、

第二年

經濟學(各論)、經濟史、統計學、行政法、國際公法、政治學、政治史、法制史、民法、

第三年

經濟學(各論)、財政學、行政學、國際公法、經濟學史、民法、商法、

第四年

法理學、國際私法、商法、經濟學(各論)、財政學、

京都帝國大學

政治學科

第一年

憲法、國法學、比較法制史、經濟學(總論)、刑法(總論)、民法、政治學、

第二年

民法、刑法(總論)、經濟學(各論)、經濟史、統計學、政治學、政治史、法制史、行政法、財政學、商法、

第三年

民法、商法、經濟學(各論)、經濟學史、政治史、行政法、國際公法、國際私法、法理學、

早稻田大學

政治經濟學科

第一年

國家學原理、國法學、經濟原理、經濟學史、近代史、哲學概論、法學通論、和漢文、美辭學、論文演習、語學、

第二年

日本憲法、比較憲法、行政法、政治學史、貨幣論、銀行論、外國貿易論、財政學、經濟史、近代史、憲法史、社會學、民法要論、刑法、語學、

第三年

行政法、國法學、經濟及財政學、應用經濟、近時外交史、最近政治史、政治哲學、商法要論、國際公法、統計學、語學、

專修學校

稅務科

第一年

經濟大意、日本經濟史、經濟學各論(貨幣論)、帝國憲法、民法總則、民法物權、社會學、萬國歷史、統計學、簿記學、經濟地理、

第二年

銀行論、行政學、經濟學各論(農業政策工業政策商業政策)、民法債權、商法總則、商行爲、純正經濟學、刑法總論、簿記學論策、

第三年

財政學(汎論及經常歲入論)、金融及財政、社會政策、豫算會計論、經濟學各論(交通政策)、民法(親族及相續)、商法(會社及手形)、海商、國際公法、國際私

法、政治學、刑法各論、保險政策、

慶應義塾大學

理財科

第一年

經濟史、貨幣銀行論、運輸交通論、民法、語學、

第二年

經濟學史、貨幣銀行論、財政學、農工經濟學、民法、商法、英契約法、語學、

第三年

商業政策、社會問題、統計學、商法、破產法、英會社手形法、國際私法、

商工事情(隨意科)、純正經濟論(隨意科)、

各公私大學に於て、其の年數に據り、順序を立て、經濟學科を教授すること以上の如し、先づ之を東西兩帝國大學に就て見んか、兩大學共に、政治學科なる名目の下に、經濟學科を教授せると相均し、只年限に於て、東大學は四年、西大學は三年、其の間一年の差異を有すれども、這は、研究年限の長短緩急に止まり、研究學科の上に大差あるなし、然るに、兩大學共に、經濟學教授の課程を示すに、唯統括名目を指示するのみにして、經濟各論に於ては、如何なる學科より之を先にすべきや、毫も示す處なし、されば、是を以て直ちに經濟學研究の順序を窺觀するの用を爲さゝるが如しと雖も、少し、其の大體に就て推考せば、先づ經濟學研究の基礎とし、經濟學總論、即ち經濟學の一般原理を講究し、而して後、漸次各論に進み入ると同時に、他面に史的研究の歩武を、經濟史より經濟學史に進めたるとは顯著なり。

此に比すれば、其の學科の名目を、政治經濟の二學科を以て名命したる丈けに、早稻田大學に於て指定する經濟學科は、其の各論の細目を示すと稍詳細なり、即ち同大學の教授順序を通覽するに、先づ初年に、經濟原理、即ち經濟學の一般概念を攻究し、第二年に至りて、各論に屬する各學科、即ち貨幣論、銀行論、貿易論を修め、第二年に至りて、應用經濟部門に入れり、而して、史的研究に於ては、前兩大學と反對の方針を取り、經濟學史より經濟史を講究するの順序となれり、此の點に就ては、聊か推考論究すべきものあらんも、そは後に讓り更に之を殘餘二學校に付て考證せんか、學科の

名目上、純然たる經濟學專攻の態度を標榜せるものは、專修學校と慶應義塾大學の二者之なり、然るに、專修學校に於ては、現財科、即ち經濟專攻の名目を有するに係はらず、其の內容を見れば、毫も政治經濟科なる名目を以てするに異ならず、即ち、經濟に關するもの以外に、政治學あり、刑法あり、國際法ありて、之れ毫顏直接に經濟學と相關するなし、然れども、何れの學校に於ても、財政學は、經濟學の一部となりて經濟學課中に挿入せられ、而して財政學を修めんには直接或は間接に政治學科攷修の必要あり、之が爲に、各經濟學科、自然政治學科と相混淆するの勢を免かれざるに至るなり、然るに、之等の傾向あるに係はらず、最も專門的態度を取れるものは、慶應義塾大學の理財科是なり、同大學に於ては、殆ど純然たる經濟專攻の方針を確取し、其の專攻上補助科として必須免かれざる學科の外は、一科も之を課程に加附せざるが如し、而して、以上二者の其の課程教授の順序を通覽するに、專修學校に於ては、先づ第一年に經濟大意、即ち經濟學の一般概念を與ふると共に、經濟學各論中より、貨幣論の一科を選び講じ、第二年に至りて、專ら各論の方面に意を注ぎ、傍ら純正經濟學の一科を教授せり、第三年に於ては、主として財政學の研究に力を用ゐ應用經濟の一部交通政策、保險政策の如きものを適宜に講述せり、而して史的研究に於ては初年に日本經濟史の一科を置き、別に經濟學史の講座は設けず、他諸學校に比して實務に應ずべき補助科の講習に、特に心を用ゐたるが如し、獨り、慶應義塾大學に於ては、他と著しく其の面目を異にするものあり、今其の指定する處を以てすれば經濟學の一般原理は、之を專科にて講習し、第一年より直ちに經濟學各論に進み入り初年に貨幣銀行論、運輸交通論を講じ、二年に至りて、猶ほ貨幣銀行論を繼續して、別に農工經濟の一科を教授し、第三年に於ては、僅に經濟に直接屬するものは、商業政策の一科を置くのみ、商工事情と純正經濟學は各自の隨意選修に任かせ、他は皆經濟學科の補助科に過ぎず、蓋は之れ慶應義塾大學が、專ら實務的智識の開發を主義とし、實用の人材を養成せんが爲め採りたる學課狹限主義の結果たると明らかにして、而かも尙ほ史的研究は之を重要視し經濟史經濟學史共に施設學科となし、其の教授前後は、事實史を先にして學史を後にせり。

今上來顧べ來たりし、各大學の課程學科を更に總覽すれば、或は學理の方面に專ら力を盡し、或は專實補助科に大學即ち然り、或は學理と實際とに其の調和を計らんとし、(單

稲田大學專修學校即ち之れ)、或は主として實用に重を置き(慶應義塾大學之が適例をなす)、各自其の教授の方針を異にし、從て學課の招集、廣狹、增減に差異を有すれども、這は各學校の各自の主義に基くものにして、世に實用の必要あり、又學理の尊重すべき要ある限りは、單に主義の上より之を觀て是非論難の餘地はなからん、唯夫等各自の實施成績の結果に徴し、其の選定せる學課の招集、果して主義の貫徹に好當せりや否や、之を實際に討究せば、或は長短得失の論詮すべきものあらんも、這は本書の現下の目的上、左迄に論及し行くの必要を見ず、されば、予は如上各大學の規定課目を當面最も好當なるものとなし、之を考證として其の相違點を推校勘量し、以て更に予が參考書列擧の順序を定めんとす。

先づ以上列擧したる各大學に就き、經濟學研究の緒歩として、如何なる學課を簡撮せるやを比見すれば、何れも皆經濟原論を以て其の入門の學科となせり(但し慶應義塾大學は之を大學豫備科に於て教授す)、之れ何人も豫期する自然の數にして元來研究主題の何たるに關せず、其の研究の地歩を進むるに當り、研究主題の一般概念、即ち、主題の範圍、組織、部門、條貫等に關する、系統的智識を修得するは、擴張發展の自性に基く研究設定の普通の順序なればなり、之を以て、經濟學研究の冒頭に其の原論を先づ掲げ載せんと、雖しも異論なかるべし。

經濟原論を修めて、直ちに各論に移り行くは言わずも自然の順序なれど、各論中、其の何れの學課より之を始むべきかに就ては、更に各大學の課程に其先後を驗照する處なかるべからず、而して、東西兩帝國大學は、唯統括名稱のみを擧ぐるを以て之を知るに由なしと雖も、他諸大學に就て其の規定する處を比見すれば、或は貨幣論を先にして銀行論其の他農工商に關する政策學を後にするあり(專修學校に於て之を見る)、或は貨幣論、銀行論、貿易論、各論中の主なるものを同年間に併せ講ずるもあり(早稲田大學然り)、或は貨幣論を銀行論中に包括して運輸交通論と同年内に講じ、農工經濟學を次年に讓れるもあり(慶應義塾大學即ち是れ)、必ずしも規定先後の按を一にせずと雖も、諸學校に於ける課程の設置は、年限の制約あるが爲に、緩し、其の間多少先後の順序を認むるも、緩漫なる研究の餘裕を許さず、不得已、先後を投して、別時其各科を講究するの勢を免かれざるに至る、されば、一見各論の教授に規定先後の別あるが如しと雖も、少しく推敲考量すれば、何れの大學に於ても、各論

の初頭に貨幣論を講じ、次いで銀行論、貿易論、或は、交通論、最後に農工經濟、或は、政策學、即ち應用經濟に移り行くの傾向あるは、顯著として之を窺ふを得べし、之れ他なし、貨幣は經濟現象の最も重要なる職責を占め、殊に近世に於ては、貨幣は一切の經濟運行の弛張流轉の尺度にして又以て經濟活動の動力たり、常に萬種の貨物を代表し、圓滑なる交換の媒介を司り、有力に經濟行動の基礎をなすものなるが故に、經濟現象の各方面を研究するに當り、先づ貨幣の性質、効用、職分等を知悉するは、研究の順序として至當のことなるべく、各大學の之を以て各論の第一科となす、元より其數たり、而して、之等貨幣の集散增減を關理し、樞要なる金融機關として職を經濟場裡に把取せるは銀行なり、然るに之が組織、行動、職分等に付、其理法結構を攷究するは銀行論の任ずる處、されば銀行論は貨幣論に次いで來たるべき課目たるは聞ふを須たざれど、貿易論交通論の各論と、其先後を決定すべき關係ありや否や、之を各大學に就て驗照すれば、或は貿易論を先にして銀行論を後にし、或は銀行論を先にして交通論を後にし、深く其先後の關係を問はざるものゝ如し、然り、金融機關の完不完は、貿易交通の伸張發展に關すること甚だ尠なからずと雖も、貿易交通の場合、却て又銀行の完備を催進すること尠なしとせず、之等の關係は、共に經濟現象の範內に其の歸趨を有する自然の關聯より生ずる現象のみに止まり、直接先後を決定すべき因果的關係の連鎖にはあらず、されば此の兩者の間には、別に研究順序の先後を定むるの必要を見ざるが如し、唯交通論と貿易論の關係に於ては、兼ぬ其の研究先後の順序を定め置くの、甚だ利便にして又至當なるを覺ゆ、貿易は、土地的區分の上に行われる物品の交換にして、交通の媒介に依りて始めて成立す、交通の媒介なくして隔絕せる地域に物品の交換せらるゝの理なく、交通の開始は即ち貿易の端緒、交通機關の整備發達は、即ち貿易の殷盛發展たり、されば、單に交通と貿易との關係に於ては、交通論を先にし、貿易論を後にする方至當の順序なるべし、

以上經濟各論の主要部分を終へ、更に各大學が如何なる學課に移り行けるやは、前に述べたるが如く、多く區々たる規定を以てせり、されど何れも皆應用的方面に歩を進めたる傾向あるは同一にして、這は應用に屬する研究が、性質の自然として、理論に繼いで來たらざるべからざるが故なり、學理に對する應用とは、學理の原理原則を人事或は自然の實際に適用し、其の理論の驗照に因りて、實際の企圖する目的

の實効を發揮するの謂に外ならず、是を以て、原論の智識なくして應用の研究を云々するの理なく、應用的研究は、須らく先づ原論の修養を俟つて而して後討究せらるべきものたると、敢て多く喋々を要せじ、最も、人事社會に關する實用的性質を有する學問は、應用と學理と偏重なく並び進み、兩者相俟つて初めて研究の目的を遂達す、されば自然此の範内に地位を有する經濟學に於ても、理實相修補して並び進まざるべからざるは言ふを俟たず、即ち、應用經濟は、常に可成多くの經濟的事實及び活動を蒐集觀察し、之に原則の適用を試み、廣く實際の應用を確的ならしめ、以て純理經濟學の眞理の實用を發揮するを宗とし、又純理經濟學に於ては、紛錯せる經濟的思想及實情を可成明確に精査討究し、妄斷せる原則の誤謬を質し、埋沒せる眞理の發見に力め、以て應用經濟の基礎を鞏固ならしむるの實を擧げざるべからず、是を以て、當面應用と純理は、經濟學の兩翼をなし、其の間何等先後の決すべきものなきが如しと雖も、斯くの如き研究態度は、既に一般或は各部門の原理原則を攷究し、更に學理の該博と正鵠を期せんが爲め、既往の修養を以て未來の發展に歩武を進むる士人の取るべき態度にして、當初入門の士の最りに爲すべき態度に非ず、複雜なる事象の研究に處し、夫等事象に對する觀察と經驗とは、既に正確なる應用の歷史を有する原則の存するあらば、先づ當初其の原則を研修し、後漸次直接の應用に移り行かんと、是れ又今日に於ける研究順序の自然の教たるなり。

以上經濟理法の研究に就き、各大學の擧示せる課程を參酌し、畧ぼ研究順序の先後を述べ來たりしが、猶ほ一言すべきは、經濟理法の研究に資する史的研鑽の一事是なり、夫れ過去の事實は現在の智識の地盤にして、吾人が現在乃至未來に向上發達せんとする推考の驗照を展示せるものなり、即ち其の事實の觀察、經驗、應用の結果は、吾人啓發の有力なる根礎たるなり、之を以て、何れの研究に於ても、其の主題に關する過去の研究は、最も緊要なる一部門として重視せられ、現在の研究或は學理に對し、特に歷史派或は歷史學派の名目さへ有せり、されば、殊に事實の研究を以て重要視せざるべからざる約束を有せる經濟學に於ては、其の史的研究の必要なるは言を俟たず、唯事實史と學史と、兩者其の何れを先にするの研究順序上至當なるや否やは、聊か考察する處なかるべからず。

經濟學上に於ける史的研究には、過去の經濟事象に關し、其の事實の變遷進化せる

前迹を單に事實として調査討究するを以て直接の目的とせる經濟史と、古來經濟に關する學者の理觀が如何なる經濟の理法を纒成せしや、其の思想の變遷發達を敘述せる經濟學史との二者あり、然れども、吾人智識の開發を目的するの點より之を言へば、前者の任務は、可成多くの過去の經濟的事實を調査討究し、正確なる判斷と明晰なる辨別とを以て、現在に於ける經濟理法の根礎を確的堅固ならしむるにあり、後者の職責は、可成周匝精確なる推考に依り、經濟思想の變遷、因果の關係、誤謬不悉の曲說を辨明擺撥し、以て現在に於ける經濟原理の起原、由來、基礎を解說徹體するにあり、是を以て、一般經濟學研究の目的を以てしては、經濟史の研究は、原論の修養ありて初めて討究の効驗を示すべく、未だ毫も原論の修養なくして、漠然經濟史の閲讀に心を注がんには、唯徒らに片碎なる過去の經濟事象を把撮するのみに過ぎずして、秩序を立し、組織を有する研究に於ては多く益する處なかるべし、されば經濟史の研究は、尠なくも原論を終へて後討究せらるべきものたるを覺ゆ、然るに、經濟學史は、思想發達の關連を論駁すれば、過去より現在に渉れる經濟の原理を蒐羅せるにも等しく、夫等各時代の原理を討究せんに、據め必ず現代の原理を修養するあるの必要を見ず、否普通思想上の研究に於ては、粗より精、膚淺より高遠に究し來たるを自然の順序となすが故に、或は經濟學史にして、各時代の思想變遷の因果の關連をのみ示すに精しく、思想自體の內容を解說するに粗ならざるものなりせば、却て該學史を原理に先立ちて講究するの利ならざるやを覺ゆ、之を以て、予は事實史と學史との研究先後を判定せば、學史を先にし事實史を後にするの至當にして又甚だ便益なるを信ぜんとす、即ち、經濟學史は、原論に先立ち、或は之と同時に、或は之に引繼ぎて直ちに研究せるらべく、事實史は、事乃各論を終へて研究するの猶ほ遲からざるを確言して可なるべけんか。

以上予は各大學の規定課目に驗照し、粗著なから參考書列舉の順序を論定するを得たり、然れども、更に茲に一言すべきものは、經濟學研究に要する補助科の選定之なり。

夫れ一切の學問に於て、全然一科單獨に研究せられ得べきもの殆んど一も之あるなし、吾人々類が日夜營々たる宇宙の研究は、人文開發の唯一の目的を遂行せんが爲めにして、此の約束に背ける智識の追求は、未だ以て研究の名を附すべからず、さ

れば外界に於ける研究主題が、各自特殊の差別相を有すると雖も之等に對する研究の思念は、心内に於て唯一の動念に投合し、唯便宜上夫等主題の差別に應ずる吾人研究智識の區分を立て、強て心内の努力を之に傾注する外、其の努力の弛緩に於ては、常に動念一根の制約に還元し、截然たる彼我の分離を有するなし、是を以て吾人一題目の研究に身を委ね、人文開發の唯一の目的に向上し、其の主題の極微を追ふて討究の徹底に達せんと欲すれば、科學一切を通じ、遼遠なる形而上學の究竟に迄歩を進めざるべからず、されば今經濟學の研究に於ても、吾人若し其の致究の臻極を追求し、理義の徹底を微密に盡さんと欲せば、經濟動念の心理の羈絆に屬し、生産の自然力或は人爲の策設に關し、社會に對する經濟行爲の强力なる影響の如何を鑑み、人生の意義に於ける經濟原理の奥義を推覈する等、其の他百般の現象理義に關する點より、其の關聯の因て以て經濟の補助科たる所以に由りて、或は心理學研究の必要必須となり、或は物理學、化學、地質學、風土學、天文學等、自然科學研究の要旨起り、或は政治學、法律學、社會學等、又討究の必要を免かれざるに至り、顧いては、倫理學の追修も緊要缺くべからざるものとして生じ來たり、哲學の研鑽も必須疎外すべからざるものとなり、斯の如くして、更に因を究め、緣を探り、極底の奥微を追ふて研究の眼を關聯の主題に進め行かんには、宇宙萬物の研究大畧必須の科目となり、補助科は却て本科を沒し、本科は唯補助科の一部たるに過ぎざるに至るべし、然れども、如上は是れ吾人宇宙研究の目的を、一人の力に付度せる理の上のことにして其實際を越ふるものにあらざるや論を俟たず、吾人々類は、人文開發を以て宇宙研究の唯一目的となせども、其の遂行は之を個人一個の力に待つに非らず、人類全體に依りて其の完成を期す、吾人一個の智識は、既に天禀の裁抑あり、又歳月の制限あり、妄りに汎を究めて量を揺らざるは、徒らに主力を失して皮相を捜る痴愚に止まり、吾人宇宙研究の目的上却て阻碍阻障のとたるのみ、されば吾人各自の研究は、宜しく長を量り能に鑑み、おのづから差別の事相をなせる研究主題の區分に應じ、其の最も直接の關聯を有せる學科の外は、夫等區分の範内に專ら努力を集中し、以て十分精確微密の効果を收めんことを任とすべきなり、是を以て、經濟學の研究に於ても、實際其の補助科の必要を感ずるものは、自然必要の程度と適當なる範圍を設くるの敢て難きに非ざるべく、即ち純理經濟學を重んじては、心理學、哲學、社會學（主

として純理に立てる)等の理論的方面に關する二三學科の追修必要となり、應用を主としては、民法、商法、統計學、簿記學、經濟地理、算數、社會學(主として社會政策を論ずる)等の實用的學科必要の範内に入り來たらん、然らば純理と應用との兩面に渉りて、著書の選擇を揭げんとする本書に於ては、隨つて總ての學科を補助學科として採揭すべきか、本書の目的は、既に之れを序言に述べたるが如く、他諸科學に對しては專攻なりと雖も、經濟學自體より之を謂へば一般的研究に外ならず、然るに、今補助學科として、純理の方面に於ては、心理、哲學の部門に踏み入り、應用の方面に於ては、簿記、算數、經濟地理迄に筆を染めんは、眞面目なる研究の態度を以てしては、是れ既に一般的研究の範域を脫し、一面には經濟自體の專攻に論を進め、他面には商的日常の事務方策に迄言及する處なかるべからず、何者經濟學の純理に於て、心理、哲學と接觸するは、其の最も高遠なる奥底の原理に因由し、而して斯の如く深奥なる原理の研究は、到底一般的研究の能くなすべきに非ざればなり、更に又其の應用に於て簿記算數を採提するが如きは、既に經濟學理の研究を軌脫し、日常事務の商業實習に携ふるものに外ならず、唯經濟地理に於ては、其實際の方面より、應用經濟學の地盤として責するものなきにあらずと雖も其の地理書たるの點に於ては、大畧普通の地理書と揆を一にし、唯經濟の名目を有するが爲に、特に商業地、交通狀態、各地特產物等に關し稍詳細なる記事說明を加えたるのみ、而して斯の如き地理上の調査は、多く實際上の智識に屬し、主として理論の應用を論ぜんとする經濟學に於ては、直接の關係左迄深からず、且つ一般地理の智識は、經濟學を研究せん程の諸氏は、既に相當の修養を有するなるべく、今改めて補助科の科程に之を採提するの必要もなかるべけん、之を以て、予は從前擧げ來れる經濟學研究の補助科としては、最も狹限主義を採れる慶應義塾大學に考證し、一定の學科としては、民法、商法、社會學、統計學の四者を採らんとす。

夫れ吾人が經濟學の研究に身を委ね、未だ初等の原理を致究するに當りては、現行法規の規定を追修するの必要を見ずと雖も、一朝應用の方面に步武を轉ぜんか、直接一部の法規を研究するの必要倏ち生じ來たるべし、一國の法律は、自然力が社會に與ふる必然の權力と恰も同一の權力を有し、社會一切の行動は、全然其規定の下に支配せらる、されば、實際に於ける社會的行動は、總て法權の範圍に於て云爲せざ

るべからず、即ち法律の規定は、一面理論を以て之を動かすことを得べしと雖ども、一面實際に於ける理論の保障たり、要素たり、條件たるを得べき第二の自然力たるものなり、之を以て、經濟學研究に際しても、其應用の方面に於ては、社會に於ける經濟行爲の準則を規定せる商法の研究自然必要を感ぜざるを得ざるに至る、殊に商法の規定する處、曾に經濟行爲の準則に止まらず、經濟的現象の出生、消滅、移轉、繼續、範圍等に及び、商法上の智識なくんば、實際問題の解決到底不可能なる場合尠しとせず、更に又斯の如く至大の權力を經濟場裡に及ぼす商法の規定は、常に精核なる批判を以て其の齊整を儲進せざるべからず、而して、此の任を果たすは即ち經濟學者の務なり、されば商法は一般的研究の場合に於ても、尚ほ尠くも其の大體に渉りて之を究明し置くの必要あり、然るに、商法は民法に對する特別法にして、民法の解釋と相俟つて始めて釋義の目的を達す、故に商法を知らんと欲せば、勢ひ先づ民法を知らざるべからず、即ち民法は商法の解釋上、又應用經濟の補助科として必須免かれざるに至る。

偖て民法商法は、斯の如くして經濟學研究の補助科として直接先づ必要なるものとなりしが、他の二科、即ち、統計學社會學に於ては、如何なる點より之を必要として認むべきか、統計學の司どる處は、社會に表現せる事實を一定の標準の下に蒐集統括し、其の結果に據りて、夫等事實中に現はれたる或は潛在せる勢力、傾向、狀況等を觀察せしむるにあり、然るに、事實(有形無形に關せず)は實際に於ける一大勢力にして、眞理の保障となり、原理の根礎をなし、以て實際行動に於ける否判の考證たるのみならず、又以て理論の徵證をなすものなり、されば、類種の事實を統集し、其の事實中に包含せる實狀を觀察するは、實際を重んずる研究に於ては甚だ肝要なるとして、從つて統計學の經濟學研究に大切なる補助科として重視せらるべきは、多く言を要せざるとたるなり、更に又社會學に於ては、社會學の論ずる處、社會の成立、組織、目的等、吾人々類が自然的、或は人爲的共同生存の狀態、及進化の理に存するが故に、社會共同生存の上に有力なる關係を有する經濟學の研究に於ては、其の經濟政策を論ぜんとするに當り、或は理想の方面に、或は應用の方面に至、大の考證を有するものなると、是又多言を要せざるなり、之を以てか予は以上民法、商法、統計學、社會學の四者を選採し、以て經濟學研究の必要なる補助學科たらんことを定めんとす。

然るに、予は更に之に加ふるに、科外補助科として掲載すべきもの一あり何ぞや、經濟問題に關し、或は經濟上の論說に關し、學者の評論述說せる經濟雜誌、或は雜書の類之なり、規定の學校に籍を有せる諸氏は、時事問題に、學說に、評論に、直接教師の講述を聽くことを得べしと雖も、獨習を自ら任ずる諸氏に於ては、毫も之等の利便を有せず、而して斯の如き評論述說は、經濟學研究の上に洪大なる裨益を有し、殊に應用の實を習はんと欲せば、之等の雜誌雜書に就て學ぶの有効なるに苟ものなし、何者應用の理は、唯二三假說の問題に依つて直ちに推論の實を擧げ、解釋の道程を辿り得べきものに非ず、幾多幾種の事實問題を捕へ來たり、究明論駁、解剖疏釋の効を積んで後始めて圓に之を領す、而して之に實する者は、即ち以上の雜誌雜書に如くものなければなり、されば、予は特に獨學者の爲めに、之等雜誌雜書の良好なるものを選び揭げ、以て諸氏の應用的方面に於ける研究の實を發揮せんことを期す。

以上を以て、予は經濟學研究參考書の掲載順序を概言するがらも暴略確定することを得たるが故に、以下此の方針を以て、順次內外の著書譯書、雜誌等の調査し得たるものを掲ぐることとせん、更に一覽の便宜を計り、以上の順序を敍述すれば、即ち左の如し。

一、經濟原論
二、經濟學史
三、經濟各論
　イ、貨幣論
　ロ、銀行論
　ハ、交通論
　ニ、貿易論
四、經濟史
五、應用經濟學
　甲、財政學
　乙、農工商經濟に關する學科
　丙、應用經濟理法に關する著書雜著
六、補助學科

イ、民法
ロ、商法
ハ、統計學
ニ、社會學
ホ、雜誌群書類

第二章　經濟學原論

經濟學原論は、經濟學の原理を、一貫の組織に因りて論說するものを謂ふ、されば經濟學の、多方面に觀察の立脚地を有せず、主題單一にして一直線的形態のものなりせば、線上の程度に著述の良否巧拙を鑑み、數零の經濟學原論を以て、或は其の一般的研究の目的に資するとも得べけん、然れども、經濟學の主題たる、種々の方面に觀察の基礎を有し、而して夫等觀察の基礎は、正當に幾多の主義主張推理推論を許すが故に、縱令研究の目的、一般に出でずと雖ども、到底數冊の著書を以て之を果さんと難し、されば經濟學原理の研究は、勢ひ之を內外史上の學說に照し、諸種の著述に據りて、研修せざるを得ず、されど今一回一理の學說を追ひ、之を古今に譯ね、之を內外に覓め來たらんか宏遠なる範圍と、森然たる數量とは、數十年の歲月を以てするも尙ほ如何ともなす能はざる尨大のものとなり終るべければ、其古今內外の學說著書を討究せんとするに當りても、先づ學說の統括を計り、可成代表的著述の撰擇を稽査すると尤も必要のことに屬す、然るに、既に前に述べたるが知く、著書を言語狹

限の必要上日英米に限りたる著述の制限あり、更に又其の制限内に於て、學者の研究及參考書として摂取するもの意見區々として揆一せざるが爲めに、其の著述の精粗を量り、學說の良否を取捨せんとするも、素之れ最も困難のとに屬し到底十全の結果を期する能はざるや論を俟たざるなり、之を以て、要は本書の掲ぐる處、唯及ぶ丈け好當の取捨を計り、一般世の定說たる學系學派の類別を憑據として、内外各專門家の收採する處を審査綜攝し、以て幾分比較的良好に近き結果を得んとするに勉むのみ。

但し學派は、現時之を英國派、(或は舊學派、演繹派、又時に其の一面を見て、「マンチエスター」派、空想派等とも呼ぶ)獨逸派、(或は新學派、歸納派、歴史派、探賾學派、比較研究派、又時に生理的研究派、統計的研究派等とも稱す)最新學派、(新舊兩派の折衷主義に出づるものを假稱す)の三種に分かつの例を見れども、最新學派とは、其の學說の形態新舊兩派の長所を折衷せんとするにありて、未だ特に嚴然たる學派を組織するものと謂ふべからず、其の内容は、之を新舊兩派に比較すれば、各系統の上に於ける程度の發達にして、明確なる判別の下に、其の兩派の學說に對照せしめんと甚だ難し、故に予は學派より寧ろ學系を憑據とし、一面に英派の系統に屬するもの、他面に獨派の系統に屬するものを列擧し來たり、折衷派は、其の根礎の重きを置ける系統に屬せしむるとど爲すべく、最も此の點に於ても、之を正確に類別せんと欲せば、折衷派の基礎を劃然兩系統の中に類屬せしめんと到底難し、例令、「ゼボンス」の如き、「シヂヴキック」の如き、「ハドレー」の如き、「ウオーカー」の如き、學者各自の見解の如何に依り、或は之を新派となし、或は之を舊派に屬せしむ、之を以て、愛に全部の掲載書を新舊兩系統に二大別すと雖ども、猶は多く便宜上の措置に出て、嚴正なる意義の類別に非ざると嫌め之を諒せよ。

今一目瞭覽の便を計り、其の大要を表を以て示せば、即ち左の如し、(但し便宜上、原書は著者の姓名を用ひ、本邦著書譯書は書名に依りて之を示す、又表は唯大要を示すに止まるが故に、詳細の弁別は、著書を紹介せる各條々の下に就て見るべし)

原書の部

英國派

ゼームス、ミル（スミスマルサスリカードの學說を簡明に疏釋す、）

スミス（經濟學に科學の基礎を與へ、）——マルサス（スミスの缺點を補修し、其の學說の眞價を一面に發揮す。）——リカード（マルサスに並びて、他の一面を發揮す、）

ゼヨン、スチユワート、ミル（スミスの學說を改良補修し、英國學派の基礎を定む、）——ローリン（ゼヨン、スチユワート、ミル、の學說を簡明に書述す、）

ケヤネス（セ、エス、ミル、を眞述す、）
フオーセット（ミルを基礎とし、其の缺を補修す、）
ピヤーソン（前　同、）
ニコルソン（英國派を基礎とす、）
ゼボンス（前　同、但シ獨見區々）
マーシヤル（前　同、）
シヂウキック（前　同、）
ハドレー（前　同、）
ウオーカー（後　同、）
ヂード（後　同、）
イリー（後　同、）

ロッセル（スミス派に對抗して起こりし歷史派の導斗、）——レスリー（英國に於ける歷史派の鼓吹者、）

コッサー（後　同、）
クラーク（後　同、）
バッチン（後　同、）
ラブレー（新派を基礎とす、）

獨逸派

前掲の表は、系統上に於ける經濟學研究の著書を、特に學生用として出來得べく統括を計りて一覽に供せしもの、其の未だ不備不悉を免かれざるや論なしと雖ども、而かも尙ほ表中の著書を蒐集せば、數量尤大一氣の講讀に適應すべきものに非ずされば、實際の講讀に適應せしめんが爲めには、更に之を撰擇し、其の研究順序の先後を考定せざるべからず、而して今之れを大體に於て撰定せば、即ち大略左の如き順序に依りて研究せらるべきなり。

Walker, F. A.—Political Economy. First Lesson.

Jevons, W. S.—Primer of Political Economy.

以上二書は初步經濟學書として尤も適當なり、

Mill, J. S.—Principles of Political Economy.

Pierson, N. G.—Principles of Economics. Trans from the Dutch by A. A. Watzel.

Gide, C.—Principles of Political Economy.

Ely, R. T.—Introduction to Political Economy.

„ —Outline of Economics.

Luigi Cossa,—Introduction to the Study of Political Economy.

Laveleye, Emilede.—Elements of Political Economy. Trans by A. W. Pollard.

以上米佛千葉川佛蘭西の經濟學者にして米國佛蘭西の學者にして

Cairness, J. E.—Some Leading principles of Political Economy.

Fawcett, H.—Manual of Political Economy.

Nicholson, J. S.—Principles of Political Economy.

Marshall, A.—Elements of Economics of Industry.

Sidgwick, H.—The principles of Political Economy.

Hadley, A. T.—Economics.

Clark, J. B.—The Phylosophy of Wealth.

Patten, S. N.—The Theory of Dynamic Economy.

„ —Comsuption of Wealth.

以上諸書は何れも新進經濟學の系統上事新學派に於て大なる必要なる研究書乃至參考書たるべし

更にこの學派經濟學の系統に照れば

Ricardo, D.—Principles of Political Economy and Taxation.

Malthus, T. R.—An Essay on the Principle of Population.

Smith, A.—Wealth of Nation.

Leslie, T. E. C.—Essays in Political and Moral Philosophy.

„ —Land Systems of Great Britain and Ireland.

Roscher, W.—Principles of Political Economy. Trans by J. J. Lalor.

以上の諸書は新進經濟學の原素たるものの學の系統上其の學の原理を紀

めんと欲するものは、尠くも一讀を以上の數書に拂はざるべからず。

尙ほ以上の著書以外に、特に邦語の飜譯を有し、更に一面に學說の追修するに足るべきもの、或は新刊に屬し紹介するに足るべきものを擧ぐれば、

Macleod, H. D.—Principles of Economical Philosoply.

Carey, H. C.—Principles of Social Science.

Blackmar, F. W.—Economics.

Devas, C. S.—Political Economy.

Achille Lolia—The Economic Foundations of Society. Trans the second French Edition by Lindley M. Keasbey.

Nicholson. J. S.—Elements of Political Economy.

以上各書の價値內容は、其の紹介の各條々下に就て之を見るべし。

邦語書の部

邦語書を以て系統上に挙げる研究著書を纏めんこと到底不可能に屬すれども、在來の著書內至譯書の內容或は述說の良否を指き、强て原書の表と相對照せしむれば、

英國派

富國論（アダム、スミス）の譯書）——高等經濟原論（セ、エス、ミル）の譯書）——

實氏經濟學（フォーセット）の譯書、）

經濟學綱要（英國派に屬す、天野爲之著、）

經濟原論（同　同、）

日本經濟論（英國派に屬す、田口卯吉著、）

經濟原論（マーシナルの譯書）

歐氏經濟原論（ウォーカーの譯書、）

經濟學粹（ラフレイ）の譯書、）

最近經濟論（新派に屬す、田島錦治著、）

最近經濟論（同　島林學三郎著、）

經濟大意（ロッセルを直譯す、田尻稻次郎著）＝經濟考徵（同上、駒井重格著）＝最近經濟學（前同、山本條太郎著）＝最近經濟學（前同、小林丑三郎著）＝純正經濟學（前同、金井延著）＝社會經濟原論（前同、）＝社會經濟原論（コッサーの原書、）

獨逸派

即ち以上の如し、されど、以上は單に名目を整へ、形式を作製したる迄に過ぎず、表中譯文拙劣或は晦澁にして直に原書講讀の裨補に過ぎざるもの、或は既に廢刊に屬して手に入り難きもの、或は單獨には全然講讀の價値なきものも存すべし、之等の關係は、一々之を著書紹介の各條目の下に就て見らるべく、唯大體に於て原書の部と伴しく、更に之を取捨選擇し、其の研究順序の便を計れば、

經濟學綱要　天野爲之著
經濟大意　田尻稻次郎著

以上二書は、初步經濟學書として尤も適當なり、然るに本邦著書の稍大巻に屬する者は、未だ一として完全に目的を達したる者なし、之を以て本邦語書に依て經濟學原論の少しく詳密なる科學的研究を致達せんと欲せば、勢ひ內容述說の良否を究づ措き、讀むに堪ゆべき者は博く之を蒐收して參考讀破するの外なく、而して今之等の著書及譯書を收錄すれば、略ぼ左の如き數書其好當なるものに屬すべけんか

經濟原論　天野爲之著
歐氏經濟學　山本淳吉譯
高等經濟原論　天野爲之譯
最近經濟原論　田島錦治著
純正經濟學　小林丑三郎著
社會經濟原論　永井直好譯
經濟學粹　牧山耕平譯
最近濟濟學　島村孝三郎著
社會經濟原論　金井延著
經濟原論　氣賀勘重解說

國民經濟學

福田德三著(但未完)

最も以上の著書に就ても、左迄重きを置くに足らぬものあるは言ふを俟たず、唯勞を願みず、其の幾分の參考に資せんとを思ひて爰に至るのみ、要は著書紹介の各條目に就て見らるべく、以下予は以上掲げ來たれる著書の紹介に移るべし。

英語書の部

アダム、スミス、富國論(セームス、ミル、參照)

A.Smith; The Wealth of Nation. (London George Bell & Sons.)全二卷、第一卷、六百五百〇頁、第二卷、四百五百頁、定價金貳弗七圓半、

紛々たる人類日常の經濟的事項に關し、古來の論說主張を考覈し、更に該博なる識見に照らして、經濟學に科學的不朽の基礎を與へたるは、實にアダム、スミスの功績に歸す、氏の學說が、今日の智識に驅驅し、種々の缺點を有するや論なしと雖ども、元來經濟の理法なる、現實の活動に接觸すべき尤も直接の運命を有し、時代を離れ、社會を問はず、萬代不易に萬全の眞理なる理法を構成せんと到底不能のことに屬す、之を以て、富國論の論說も、時代の推移、社會の變遷に排斥せられ、自然、眞理の破綻に陷りたる箇所敢て尠なからず、其の今日と現實を相違ずる方面に於ける論說の主張は、不動の鐵槌として容易に永久動かすべからざるものありて存す、即ち、今日英派の獨派と並び立ちて、互に形態を變ずるも其の根蔕に於て毫も遜色なく、相拮抗磨すべからざる風格を有するは、全く之あるが爲めなり、されば、英派の根蔕を仔細に研究せんと欲するものは、尠なくも富國論の實、勞力、資本、價格、利潤、給料に關する論述は、進んで一度講讀するの要あるべし、本書の世に公にせられたるは、實に千七百七十六年にして、自來幾多の學者に依りて指導刊行せられ、前掲の書冊の如き、一昨々年更に新たに版を起して刊行せられたるものなり、されど、本書は、「ベルフォート、バックス」の緒言を有する外、單に本論の全部を編刪せるのみに止まるが故に、講讀の便宜より謂へば、舊判に屬すれども、「マッカロック」氏の「スミス」の小傳、緒論、註釋、補遺を有せる「アダム、アンド、チャーレス、ブラック」より出版せしもの最も良しとす、書名定價は即ち左の如し。

A.Smith; The Wealth of Nation. (Adame & Charles Black. 出版)全一卷、大判六百參拾四頁、

佛國人國五郎譯(但し語字は我が六號活字活版の書字)

本書の邦語譯は、石川暎作氏に依りて譯述せられたるものあり、即ち左に掲ぐるもの是なり。

富國論、石川暎作譯、明治二十年出版、

全四冊、各、七百數十頁、定價壹冊七拾五錢、東京市京橋區彌左衛門町七番地經濟學講習會發行

本書は、同會の雜誌へ載錄せしものを、完結の上合本せしもの、譯文直譯的冗漫のものなりと雖ども、氏の學說の一般は、尙ほ之に依りて研究するとを得。

富國論の解說書は、"エマートン"氏に依りて述說せられたるものあり、書名定價即ち左の如し。

W.P.Emerton; An Abridgment of Adam Smith Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nation. (London. Simpkin Marshall & Co 發賣)全一冊小倉參百五拾錢廣參圓也

富國論の要用なる編事を、簡明平易の文を以て解說す、其の一般を知らんが爲めには、解說書の體をなせるもの、中にて良好の書なり。

テイ、アール、マルサス、人口論"(セーム、スミル、參照)

T.R.Malthus; An essay on the Principle of Population. (London.Reeves and Turner. 發賣)全一冊、木製五圓五拾錢七圓、六圓入拾錢、

氏は、純然たる經濟學者に非らずと雖ども、本書の一度社會に出づるや、世評喧々、一躍して英國有數の經濟學者として名を斯界に列するに至れり、氏の經濟上の著述は、此の他、經濟論、經濟學解釋等二三種刊行せられたるものあれど、何れも今日より觀れば、平凡或は謬想に落ち、特に一顧を拂ふの價値なし、唯本書人口論に於ては、經濟上不朽の功績を垂示せるものと謂ふべく、學祖"アダム、スミス"に對しては、氏が尤も閑却したる學理の一面を啓發し、後世學者に向ては、人口論の確乎たる基礎を與へたり、素より氏の論たる、今日の研究を以てして白眉完璧のものと言ふべからざるや論なしと雖ども、這は氏も又一面に於ては、其の原理として妥當ならざるものあるを認知せざるなきに非ず、即ち本書は、氏が當時の狀勢に感慨し、聊か社會の反省を促さんと欲する實望をも含有し、而して、此の如き實望を效驗あらしめんが爲めには、手段として誇張的揚言の要あるを辨明せしが如き之なり、蓮英氏が人類窮

貧の現象を以て、單に人口の蕃殖に歸し、他に之を妨ぐるものあるを輕々に看過したるが如き、或は時處を問はず、人爲を以て人口の增加を刺衝すべからずと斷論せしが如き、正しく氏の缺點と謂つべきものなれども、其の大體の原理に於ては、經濟上決して誤れるものにあらず、本書文章平易にして事理又明らかなり、人口論の有力なる基礎を翫味せんと欲するものは、須らく先づ本書に就て討究する所あるべきなり。

ダビッド、リカード、經濟原論（セームス、ミル、參照）

D.Ricardo; Principles of Political Economy and Taxation. (London. George Bell and Sons 發兌)

全一冊、ナ倉四百參拾八頁、定價五圓也

氏は經濟學者たると同時に、又熟練なる實際家なりし、氏の學說は、大體に於て「スミス」の學說を典型とすれども、又種々の創見を以て有力に其の不備誤謬の點を改說補修せり、氏が經濟學を述說するに、常に假定的作例を引證し、全然演繹の理法に據りて抽象的議論を把持せし結果、往々空想の推測に源せしものありと雖ども、其の價格及利潤の法則、租稅の屈伸等の論說は、就て聽くべきもの尠なからず、殊に、氏の地代論は、今日に於て尙ほ磨すべからざる卓拔の議論に屬し、思想深奧、論理明截、優に吾人の一顧を値ひすべきものなり、即ち本書は之等の理法を論說せる氏の著書中尤も完全なる典籍にして、卷頭生產に關する學說を簡單に說明し、全般に渡りては、主として力を分配及融通の理論に用ひたり、書中往々文意險難に走り、素養未だ充分ならざる讀者に取りては、稍難解を感ずるの箇所なきにあらずと雖ども、前揭の出版書には、「イー、シー、ケー、ゴンナー」氏の增補註脚を加へ、聊か其の閱讀を裨補したれば、讀者之に依りて自然便益せらるゝと尠なからざるべし。

ゼームスミル經濟原論

J. Mill; Elements of Economics. (London. macmillan & Co. 發兌)全一冊、大型四百五十頁

同、定價六圓二十錢也、

以上「スミス」の富國論「マルサス」の人口論「リカード」の經濟及租稅論は、英國學派の基礎をなすものなりと雖ども、三書の頁數を合集すれば、積量敢て浩翰ならずとせず、一般的研究の目的を以てして、各自其の論說の理趣に就て翫味討究せんと欲するは、却て研究の權衡を失し、迂遠抽策の嫌なきにあらず、故に其の要案を論ずるに秀

拔なる好當の著當ありとせば、當初該書に就て研究するの方針を取るは至當の順序たりとす、而して適をなすもの、前掲ミル氏の書に如くものなし、本書は、氏が以上三氏の學說を、正確なる解釋に依りて簡單明瞭に說明し、文章平淡、甚だ一般の講讀に適す、然るに、英國學派の不動の基礎を眞に確立せしは、氏が子「ゼヨン、スチユアート、ミル」氏の著述とす、されば、同學派の學問上の基礎を研究せんには、直ちに右「ゼヨン、エス、ミル」氏の書に就て研究するも、毫も根蔕を棄てゝ枝葉に涉るものには非ず、否研究書としては、當書ゼヨン、エス、ミル氏の著書に就くを至當とし、前掲の諸書は、事ろ其の參考書に止まるものたり。

ゼ、エス、ミル、經濟學原論

J. S. Mill; Principles of Political Economy. 1872. (New York, Appleton & Co. 第七版)

[illegible]氏は、英國經濟學者中、第一位を占むるものにして、スミス、マルサス、リカード諸氏の學說を基礎とし、一面には廣く當代諸學者の說を參酌し、一面には自己の研究に依りて在來の學說を增補修正し、以て英國經濟學の基礎を完備せり。本書の價値は、予が敢て爰に贅辯を弄するの要なく、苟も經濟學を學ばんと欲する者の、必ず先づ手にせざる可からざる斯學の典型とす、今參考迄に其の目次のみを略擧すれば、

第一卷緒論、第一篇生產論、生產の要件、要素の種類、變化、性質、作用等を論ず、第二篇分配論、生產と分配の關係、分配上に起こる諸現象、即ち競爭、奴僕、習慣、借地、賃銀、利潤、地代等の關係、性質、救治法等を論ず、第三篇交換論、價格の意義、其の需用、供給、生產費、地代等との關係、理義を論ず、第二卷交換論の續き、貨幣の意義、其の需用供給、生產費等との關係、複本位と補助貨の關係、信用上國際貿易上に起る種々の現象、關係、變化等を論じ、第四篇社會の進步の生產と分配に及ぼす影響、產業と人口の增加が、地代、利潤、賃銀に及ぼす影響、勞働社會に對する未來の豫測等を論じ、第五篇、政治と產業との關係、一般に對する政府の職分、租稅の一般法則、直稅、商品稅、其の他の租稅に就て、直稅と間稅の比較、公債、政府の經濟的一般職分、干涉主義の基礎及範圍利害等を論ず。

本書は、種々の書肆に依りて翻刻出版せられたるが、其の最も低廉なるものは、即ち左の會社の出版なり。

J.S.Mill. Principiples of Political Economy. (London. New York. 又 Bombay にも出張店あり Longmans, Green & Co. 出版)全一冊凡そ貳圓也(但し文字は六號活字當時の書字)

同會社の出版にて、二卷になりたるものは、全部にて定價凡そ拾五圓内外なり。

然るに「ミル」の著書や、初學者に取り決して安潔ならずとせず、之を尤も平易明亮に省述せるもの、彼の「ローリン」氏の著書に如くものなし、即ち左に掲ぐるもの是なり。

J. L. Laughlin, Principles of Political Economy. by J.S.Mill.(New York. D.Appleton & Co. 出版)

全一冊、大型六百頁餘、定價七圓五拾錢也、

本書は、亞米利加大學生の爲めに、特に「ミル」の原論を氏が省說せしもの、體樣教科書的體裁をなし、文章平易流暢、能く簡明に其の意を述ぶ、只本書の目的、當大學生の研究に資せんが爲めなりし故、自然亞米利加學生に直接關係の尠なき、例へば、英國貨幣問題の如き、或は英國政府の經濟場裡に及ぼせる影響に關する論說の如き、或は英國の地租問題の如きものは、蓋だ簡單に敍說せるの缺點ありと雖ども、主要なる原理に關しては、明瞭に其の理原を解說し、又穩切に評論を加へたり。

而して更に「ミル」の著述即ち「ローリン」氏の解說書を本邦語に飜譯したるものは、即ち左に掲ぐるもの是なり

高等經濟原論、天野爲之譯

全一冊菊判九百餘頁定價壹圓八十錢　東京市神田區裏神保町富山房發行

譯文平易にして原意を失わず、原語を解せざる讀者は、宜しく本書に就て討究すべきなり。

ゼー、イー、ケヤネッス經濟學原論。

J. E. Cairness; Some Leading Principles of Political Economy. 1883 (London. Macmillan & Co.)

全一冊、大型五百〇六頁、本國七圓五十錢 14s.

氏は、「ゼー、スチュアート、ミル」の學說を詳明精釋せし點に於て有名なる經濟學者にして、氏の需用供給、生產費、職工組合等に關する論說は、汎く斯界の參考する處、殊に氏の貨幣に關する學說は、遺憾なく「ミル」の貨幣說を增補疏釋せるものと云ふべく、審派學說の研究を志す人々は、必ず一讀すべき要あるの書たるを信ず、氏の文章は稍難澁解の箇所なきにあらずと雖ども、熟讀して困難を感ずるが如き佶屈たるも

のに非ず、今參考迄に本書の內容を畧述すれば。

第一編、第一章、價値の意義、條件、變動等の關係に就て、論說し。第二章、需用供給、第三章に、價値の平率。第四、市場價値。第五、價値の派生的法則を有する場合を說論し。第二編に移りて、第一、賃銀の割合。第二、物品の需用に就て、其の起生、變轉、消滅の關係を種々の方面より論證し。第三、第四に、商業の連合が、賃銀勢力に及ぼす關係を第五、從來の社會主義に對する批評、及社會改良に於ける賃銀勢力の方面に及べる持論。第三編、第一章は、費用に就て、其の費用の比較的關係に於ける狀態を、事實と理論に照らして論及し。第二に、賃銀平率に關する國際貿易。第三に、國際價格。第四自由貿易、保護貿易の規制、及利害。第五に、金(ゴールド)の世界を通じて同格なる所以等の二三事實問題を論ず。

エッチ、フォーセット經濟原論。

H. Fawcett; Manual of Political Economy. (London. Macmillan & Co. 發賣)參一、海、進金六百五十頁、定價六圓、12s.

氏は一八六三年、ケムブリッヂ大學の教授となり、經濟學の講座を擔當し、嚴正なる給料元本論者、又自由貿易論者として世に知られたり、本書は、氏が未だ同校の教授たりし間に著述せしもの、至極簡易なる文字を以て、平明流暢に經濟の原理を論說す、氏の論據は、ヂョン、スチュアート、ミルの學說を多く根礎とすれど、一面に自己の研究の結果に因りて發揮せしもの尠なからず、英國學派の系統に屬する著書中、又以て良好の參考書たらずんばあらず、今書中內容の順序を畧述せば。

先づ緒論に經濟學の部門を定め、夫より生產論に入りて、生產の要素、勞力、及資本の性質、生產三要件の生產的勢力、大生產小生產の利害得失、生產の漸減增殖の關係、資本增加の結果等を論說し、次は分配論にして、私有財產と社會主義の關係に於ける評論、富の分配に預かる階級に付て、競爭と地代の關係、賃銀論、利潤論、農家の資產に付て、低廉賃銀の救治策、組合、同盟罷工、共產等を論究し、次は交換論に移り、價格と代價の關係、性質、作用を論じ、夫より漸次貨幣論より貿易論に論及し、最後に租稅に就て評說せり。

フォーセットの經濟學は、本邦に於て最も早く歡迎せられたる經濟書の一にして、隨つて邦語の飜譯書夙に出版せられたれど、今や甚だ舊刊に屬し、古書肆を探索す

る外手に入るゝと難かるべし。

實氏經濟學　永田健介譯　明治十年出版

唐本數冊より成る、譯述は術語近體と異なりて稍拙劣を免かれざるも、文章平易にして意を傳ふると杜選ならず、手に入るゝを得ば、原語を解せざる人は本書に就て一讀すべし、但し本書は、氏の著述を省約せし實氏夫人の手になれる經濟學初歩を譯述せるものにして、右原書は即ち左の如し。

Mrs. H. Fawcett; Political Economy. for Beginners. (London: Macmillon & Co.) 全一冊ナリ

馬氏　時價十圓定價壹圓五錢　2s. 6d

本書は甚だ簡明平易に氏の學說の要綮を畧述し、初學者の研究書としては、寧ろ本書に就くを便益とし、且其の効果を收ひるとも多かるべし。

エス、デー、ピヤーソン、經濟學原論

N. G. Pierson, Principles of Economics. Translated from the Dutch by A. A. Wotzel, (London. Macmillan & Co. 發兌) 全二卷(但し上卷のみ譯譯既成)上卷總數五百九十八頁、定價五圓二十五錢、　10s.

氏の學理に精通し、又實際家としての經驗に該博なる、夙に名聲世に喧々たり、本書は、氏の蘊蓄を遺憾なく述說し、英國學派の系統に基礎せる學說を尤も健全に論說せるものゝ一なり、著述の體裁は教科書の方針に成り、全體の秩序整然として理論毫も倚屈せず、而して、飜譯又甚だ忠實にして文意明瞭なるが故に、未だ全部完結に至らずと雖ども、在來の著書中有數の參考書として愛に掲ぐ、其の內容の目次を畧述すれば、

緒論、經濟學、經濟政策、社會政策の意義、區別、經濟學と交換との關係、經濟理法、及其の追究の進着する困難、經濟學の研究法、本書の企圖を論じ、第一篇は之を七章に分かち、交換に於ける價値の起原、種類、決定、及び其の收入の分配との關係、經濟的貨物と非經濟的貨物、地代の起原、性質、作用の一般原理、リカードの批評、農業の小作と租稅の關係、耕作法の關係、運搬料の減價、人口增殖の原理、結果、影響、家賃と家屋の需用、其の他現象との關係、資本上の利益、財產の種類、性質、作用、資本の性質、職分、作用、冒險事業の性質、勞働等の研究、價格の性質、意義、種類、變化の理原等を論じ、第二篇は之を四章に分かち、貨幣の制度の、諸國に於ける實際

の觀察、銀行業の調査、爲換手形と外國貿易、爲換手形の目的、種類、等、外國貿易の價格高低の範圍、支拂決算に於ける變動の原由、通貨條例、單本位と複本位、三本位貨幣と私鑄貨幣、通貨の過超或は缺乏の不利益等を論ず、

ゼ、エス、ニコルソン經濟原論、

J. S. Nicholson, Principles of Political Economy. (London. Adam Charles Black 發兌)全三卷、第一卷、第壹四百弗參頁、定價七圓五拾錢、第二卷、第壹百弗參拾八頁、定價六圓五拾錢、第三卷、第壹百弗五拾五頁、定價六圓弗五、

氏は「エディンブルク」大學の教授にして、時に「ケムブリッヂ」大學の試驗官たり、當時斯界の大家として其の名内外に聞ゆ、氏は系統より之を謂へば、將に英國派の學系に屬するものなれども、學識該博にして毫も舊派の末論に意を介せず、理論を揣りて事實を重んじ、廣く歷史的考索に依りて學說の健全を期す、本書は、即ち氏の圓熟なる著述にして、基礎を「アダムスミス」の富國論に究明し、考證を主として近世斯界の大家「マーシャル」「シヂヴキック」氏の經濟原理に覓め、文章簡潔にして明快、亦以て有數の參考書たるべきなり、其の内容の目次を略擧すれば、

第一卷は緒論、生產論、分配論の三部に分かち、緒論に經濟學の定義、部門、地位、其の富に對する通俗的概念との區別等を講述し、生產論には、生產、消費、効用の意義、作用、勞力、資本の解釋、分力的勞働の効用得失、大小生產、大小農、報酬漸減と增加の原理、人口論、有形資本の增殖の結果、作用等に論及し、分配論に於ては富の分配、私有財產制、世襲財產、不動產、競爭と習慣、習慣と村有共產、封建制度、賃銀利潤等に關する論說より、最後に、經濟思想の變遷、經濟上に於ける夢幻想、近世社會主義の解說批評等を論じ、第二卷は交換論の一部門にして、生產分配に對する交換の關係、價値なる語の眞意義、交換上に生ずべき眞利益、交換價値、代價、市場、需用供給の理、價値に關する生產費用、需用供給の變動が普通價値に及ぼす關係、獨占に起生する價値に就ての評論、生產費用に於ける賃銀、利潤價値より見たる地代、過超生產の批評、貨幣の定義、職分、形體、規制、種類等に關する論述、銀行論、外國貿易の發達、變遷、内外貿易の關係、國際間に生ずる價値の眞意義等を詳論し、第三卷は經濟の發展進歩の原理を論說し、即ち經濟の進歩と貨幣、價格、地代、利潤、賃銀との關係作用より、政府の經濟的職分、租稅の準度、種類、其の種類の性質、歲費、地方財政の原理、公債、

殖民地及附屬地の關係より起こる經濟現象を論じ、最後に、經濟學の道德及基督教との關係を論說す。

更に氏は、近時以上の著述を省約し、經濟學原理として世に公にす、初學者に取りては、氏の學說を窺ふに本書を得て太だ便宜を得たりと謂ふべく、即ち左に掲ぐるものの之なり。

J. S. Nicholson; Elements of Political Economy (A&C. Black. 發行)全一冊大倉四百參四頁

圓四圓八十五錢　8s.

本書は氏がプリンシプルの綱領を約說し、以て初學者の研究に便せしもの、內容の要旨に至りては、敢て前者と變るなし。

ダヴル、エス、ゼボンス經濟學。

W. S. Jevons, Theory of Political Economy. (Lodon, Macmillan & Co. 發兌)全一冊,大倉四百六十四頁,定價五圓　10s.6d

氏は英國有數の經濟學者にして、本邦には夙より最も親しく紹介せられたり、氏が獨逸學派を信じたるや疑ひなく、殊に後年に至りて著しく其の傾向を認むと雖ども、尙ほ英國學派の系統を軌脫するものと言ふを得ず、本書は氏が年來の主張を實現し、經濟學の純理は、數學法を以て討究すべきものとなし、種々の數學式を用ひて說明を試み、殊に氏の貨幣論と價格論に至りては、尤も斯界の貴ぶ所、今日に於て依然として經濟學者の常に先づ參考精讀する處たり、文章平明にして簡易、初學者必讀の書たるに背かざるべし、其內容を略述せば、第一章、科學の數理的性質、經濟學の論理上の法則を論じ、第二章、快樂と苦痛の起因、關係、第三章、効用の原理、第四章、交換の原理、第五章、勞力の原理、第六章、地代の性質及其の意義、本分、第七章、資本、第八章、人口論、賃銀と利潤の關係等を論じ、最後に教授「ハーン」氏の意見に對し評論を加へたり。

氏は更に本書を約節し、初學者の爲めに經濟學の初步を論述す、小冊子なりと雖ども、便概明瞭、氏の學說の一般は尙ほ之に依りて窺ふを得、書名定價即ち左の如し。

W. J. Primer of Political Economy. (London. Macmillas & Co. 發兌)全一冊英國五拾錢也

リーマーシャル經濟原論。

A. Marshall, Elements of Economics of Industry. (London. Macmillan & Co. 發兌)全一冊,六圓

國富論 上卷 第一篇 第四章 価値論　3s.6d

氏は英國、ケムブリッヂ大學教授にして、氏の經濟學者としての名望は、優に當代英國經濟學者の泰斗として尊稱せらるゝの地位を有す、本書は即ち氏が多年の蘊蓄を攄瀉し、秀拔なる批評と、該博なる學識を以て在來の學說を補修論說せるもの、其特に異彩を放つものは、氏が本書に論ずる處、理論の奇矯を衒はず、舊來の陳套を追はず穩當周密に萬態の事實を考査し、而して夫等諸般の事實を悉く連續的に論詮し來たるにあり、殊に、需用供給を骨子として生產消費を論じたるが如き、尤も熟讀翫味の價を有するものなり、但し氏の思想、稍高遠に傾き、而して事實の驗照複雜なるが爲めに文章自然繚糾し、更に又氏特有の新術語處々に散見し、爲めに文意冥漠暗澁の箇所尠なからず、讀下直ちに意を了すること甚だ難し、然るに本書は先年、早稻田大學講師井上辰九郎氏に依りて飜譯せられ、同大學出版部より譯書發行せられあるを以て、初學者は之に手便らば、其の裨補する處蓋し尠少ならざるべし、本書の內容の目次を略畧すれば、

第一篇、緒論、經濟學の定義を論じ、自第二章至第七章、自由產業及企業の發達、經濟學の發達及範圍、經濟法則の性質及研究法、最後に要論及結論を三節に述べ、第二篇、根本の觀念、富、生產、消費、勞力、必要品、資本、收入等の原理、意義、性質、作用等を論じ、第三篇、欲望と人類活動力との關係、需用の法則及其の彈力、使用の種類、性質、富の實利の計量法等を論じ、第四篇、生產及供給、地味、勞力の供給、富の增殖、產業組織、報酬漸減の法則と報酬漸增の法則との關係を論じ、第五篇、市場の定義及其の種類、性質、形態、需用供給平均の狀況、理原、營業資本、共同及合成需用、需供の變動等を論じ、第六篇、分配及交換の序說、勞力に關する需用供給、營業力及產業組織に關する資本の關係、資本及營業力に關する需用供給、土地に關する需用供給、分配の概論、價格に及ぼす進步の影響、職工組合等を論ず、

氏は後年更に本書を敷衍精釋し、左の如き書名に依りて之を刊行すれども、唯著述の體裁洪瀚に至りし迄にして、特に前書に比して稱賛すべきものなし、但し本書は氏が大著述を期し、其の第一卷としての先驅なるべし、されば續卷に至りて始めて大に見るべきものあらんも、這は未だ世に刊行せられし由を聞かず、本書の書名頁數定價は即ち左の如し、

A. Marshall, Principles of Economics. (London. Macmillan & Co. 發行)第一卷、全一冊、大判七百八拾八頁、定價七圓五拾錢也。12s.6d

氏の本邦語譯書は即ち左に掲ぐるものこなり。

經濟原論　井上辰九郎譯

全一冊、菊判七百貳拾四頁、定價壹圓貳拾錢、早稻田大學出版部發兌、

本書は、氏が尤も忠實なる忍苦を以て、殆んど逐語譯的に飜譯す、氏の忍苦は、讀者の以て多とせざるべからざる處なれども、忠實なる忍苦の結果は、却て直譯の弊に陷り、晦澁佶屈、甚だ解し難き箇所尠なからず、されば、本書の初學者に取りての價値は單獨に講讀せらるゝよりも、原書の手便としての裨補に存すべけん、但し飜譯の原書は、「エレメンツ、ヲフ、エコノミックス、ヲフ、インダストリー」の最新刊に據る。

エッチ、シヂヴィック　經濟原論

H. Sidgwick, The Principles of Political Economy. (London. Macmillan & Co. 發兌)全一冊、大判五百九拾頁、定價壹圓、16s.

氏は純然たる經濟學者にあらずと雖ども、其の經濟學に就て論ずる處、敢て又見るべきもの尠なしとせず、氏が舊來の學說に批判的見解を以て補修を加へ、新派學說の長を拔いて、之に健全なる學理の基礎を與へんとしたる、純正經濟學の原理の咀嚼に、吾人の智識を啓發するもの太だ多く、彼の「マーシャル」氏の著述に比すれば、思想簡明にして文章平易、而して學說淘汰の點に於て兩者相通ずるもの尠なからざるが故に、氏の著述と相徵證駁究せば、蓋し發明する處鮮少ならざるべし、內容の目次を略擧すれば、

緒言、一、英國の現代に於ける經濟學說の論爭、及著者本書述說の特殊目的、二、經濟學の範圍、三、經濟學の研究法、第一篇生產論、一、生產の原理、二、價値の意義、三、富、四、生產の不同なる原由、五、資本、六、生產の法則、第二篇分配及交換、一、緒論、二、物質的生產物の交換、價格の原理、三、國際價格の原理、四、貨幣の定義、五、貨幣の價格、六、利潤、七、地代、八、勞力の報酬、九、特殊的勞銀及利得、十、獨占と連合、十一、分配に於ける時代上の差異、及其の地方上に於ける不同、十二、習慣、第三篇一、經濟學上の技術、二、生產上に於ける自然的自由の法則、三、產業と政府の關係、四、生產增殖に關する切要なる政府の地位、五、自由貿易と保護貿易、六、分配正義の原理、七、經濟的分配、八、財政、九、經濟

學と個人道德、

エー、ティー、ハドレー　經濟原論。

A. T. Hadley; Economics (New York, G. P. Putnam's Sons. 發兌)全一冊、大型四百八拾四頁、定價五圓五拾錢也、

氏の學說の根蔕は、其の多くの方面に於て、英國派に默契するものありと雖ども、由來米國經濟學者の學說は、米國特殊の經濟現象に接觸するが爲めに、自然學說の上に別殊の主張を有し、顯然として其の系統を指示すると難し、そは兎も角も、氏が本書に論說する處、專ら實際的考察を旨とすと稱せらるゝも、學說の方面に關する氏が獨創力の傑出せるもの又尠なからず、殊に社會の幸福を以て一切の經濟的設備及制度の標準となし、此の信憑に據りて、吾人々類の物質的生存行爲を尤も眞摯に講論せるが如き、實に本書の主腦、學說上の端嚴なる主張と謂ふべく、更に氏が自然淘汰の原則を應用して、以て倫理學と經濟學との二科を連結せしは、確かに其の主腦觀念の自信より出て來たれる本書の特點たり、文章遒勁にして稍釋讀の難きを覺ゆるものありと雖ども、勵めて一讀玩味すべき好著述たるを偕ず、今內容の目次を略擧すれば、

一、公私の富、二、經濟學の責任、三、競爭、四、投機、五、投資、六、資本の結合、七、貨幣、八、信用、九、利潤、十、賃銀、十一、機械と勞働、十二、合働、十三、保護制度、十四、政府の歲入、

エフ、エー、ウォーカー　經濟學。

F. A. Wolker; Manual of Political Economy. (London. Macmillan & Co. 發兌)全一冊、大型四百拾頁、定價六圓五拾錢也、

氏は米國、エール、大學の敎授たりし人、氏の學說は、新派の系統に屬すと謂ひ、或は舊派に出づるものなりと稱し、學者各々其の見を異にす、要するに道は、氏が新舊兩派の學說を審査究覈するに當りて、毫も系統學派の觀念なく、全然自己の理性を以て討究の基礎とし、公平に兩派の長を練擇取取せし證左たらずんばあらず、實に氏の所論は、思想明確、引證健全なりと謂ふべく、其の複本位論及貨銀論に於て、特に氏が秀拔の伎倆を發揮せりと謂ふべし、本書は、即ち之等の所說を披瀝せる氏の一貫の著書にして、敘述敎科書的秩序に據り、章々本題を設けて理路を追ひ、文章簡潔明確、要旨を指示する太だ親切なり、殊に讀者の倚りて以て參考書乃至敎科書と爲すべ

き本書の價値は、理論井然として思想散漫せざるの點にあり、今其の內容の部門を略示せば、經濟學の生質及研究法を論ぜし第一篇と、生產論交換論分配論消費論を述說せる四篇と、經濟學原理應用一斑を論じたる一篇とより成る、一篇より五篇は、特に目次を示すの要を認めざれど、最後の一篇は、原理應用の論題なるを以て、參考の爲め改めて其の目次を示すべし。

經濟學原理應用一斑一、利息制限法を論ず、二、實業上の協働組織を、三、政治的貨幣を、四、窮民救助法を、五、賃銀基金說を、六、物價標準表を、七、工業組合及同盟罷工を、八、中央勞働協會を、九、地代說に對する駁擊を辨ず、十、土地國有を論ず、十一、銀行業務を、十二、合衆國現時の國立銀行制度を、十三、外國爲換を、十四、複本位制度を、十五、國家歲入を、十六、租稅の原理を、十七、保護生產に對する自由生產を、十八、社會主義を、

以上十八種の論說を揭ぐ。

本書の邦語譯は山本淳吉氏栗田宗次氏に依りて共譯せらる、即ち左に揭ぐるものの之なり。

歐氏經濟論。

全一冊、六百八拾六頁、東京市日本橋區通三丁目丸善株式會社發賣

譯文直譯の臭味を離れ、平明通俗にして又杜撰ならず、英語を解せざる人は、本書に就て討究すべし。

更に「ウォーカー」氏は前書を特に學生の爲めに約述せるものを世に公にす、初學者は本書に就て學ぶも、簡單にして、而かも研究上多く失ふ所あらざるべし、書卷定價は即ち左の如し。

F. A. Walker; First Lesson of Political Economy. (London. Macmillan. & Co. 發兌)全一冊、小倉壹百拾貳頁、定價貳圓五拾錢也、

更に又氏の著書は「ヘンリーホルト」會社よりも印刷發行す、左に揭ぐるもの之なり

F. A. Walker. Political Economy. advanced Course. (New York. Henry Holt & Co.)全一冊、大倉五百壹拾七頁、定價四圓七拾五錢也、

〃　Political Economy. briefer Course. 同會社發兌、全一冊、小倉四百拾五頁、定價壹圓也、

更に又本邦に於て「ヘンリーホルト」會社の「アドバンスド、コース」の方を飜刻せるも

のあり、左に掲ぐるものの之なり。

F. A. Walker; Political Economy. advanced Course.

全一冊、實價貳圓也、東京市神田區佐久間町一丁目西東書房發行

シー、ヂード、經濟原論。

C. Gide; Principles of Political Economy. Translated by F. P. Jacobsen (Boston. D. C. Heath & Co. 發兌)全一冊、大判五百八拾頁、四圓五拾錢也、

本書は東京市神田區佐久間町西東書房より發行せる飜刻書あり

字體鮮明誤植稀有實價貳圓也。

氏は佛蘭西、モントペル、大學の教授にして、經濟學者としての名望夙に世に高し、氏の經濟論の廣く世に好愛せらるゝ所以のものは、學説の高遠秀拔なるに非ずして、理論の明快、批判の遲利なるにあり、本書は一面自然法の基礎より立論し、乗て又社會改良の方面に關し、分配に重きを置きて立論せり、其の大膽鋭利に論破せし處、偶々極端に馳るの嫌なきにあらずと雖ども、全體に於て論旨井然として通徹す、近代の著書中、又以て良好の參考書たらずんばあらざるなり、而して、譯文平明簡潔、能く原著の意を傳へ、讀者をして暗澁厭倦の情を生ぜしめずと雖も、本書の性質として、解讀上兼め多少經濟學の智識を要すべし、左に其の目次を示せば、

緒論一、經濟學の目的、二、經濟學研究法、三、經濟學には自然法存するや、四、經濟學の四學派、第一篇富と價値、一、富、二、價値、三、物價、第二篇生産論、一、個人的生産の條件、イ、自然、ロ、勞力、ハ、資本ニ、生産の社會的條件、イ、社會の組織、結社、分業、交換、正貨、ロ、單貨制と複本位問題、紙幣、國際貿易、ハ、自由貿易保護貿易の問題、信用、ニ、獨占問題と銀行業の自由、三、生産と消費との平均、イ、生産上の不充分、ロ、生産過超、ハ、生産上の進歩、第三篇消費論、富の使用法、イ、使用、ロ、貯蓄、ハ、投資、第四篇一、分配の諸原理、イ、社會問題、ロ、社會主義の説明、ハ、財産權、二、分配の諸種の階級、イ、自治的生産者、ロ、主人、ハ、賃銀利得者、ニ、自己の收入に生活する人々、ホ、貧窮問題、附錄、佛蘭西の財政に就て。

本書の邦語譯は河津遥氏に依りて解説せらる、然れども、解説簡に過ぎて要緊を盡さゝるの憾尠なからず、「ヂード」氏の學説を玩味せんと欲するものは、須らく其の原書に就て討究する處あるべし、右解説書は、即ち左に掲ぐるものの之なり。

ヂード氏濟經學解説。　河津　遥述

但し、本書は早稲田大學出版の雜誌名著綱要に連載せしものなるが故に、合本せしものを古書肆に求むる外、單本としては手に入れ難し紙數百六十七頁の小冊子なり(凡例參照)

ゼ、ビー、クラーク經濟哲理。

J. B. Clark; The Phylosophy of Wealth. (Boston. Ginn & Co. 發兌)全一冊、小型百餘頁

正價、金壹戰圓八拾錢也、

氏は先年米國「スミスコレッヂ」に歷史政治學の講座を擔當し、當時コロンビヤ大學の教授にして、純然たる經濟專攻學者に非ずと雖も、經濟學上、論說秀拔にして、就て聽くべきもの尠なからず、本書は、人類社會に對する完全なる經濟の基礎を論詮し、一面に自然法の立脚地に論據を置き、一面に現在の社會經濟的秩序を、人心發動の合理道念に叶へりと是認し、更に經濟的基礎の十全を期せんが爲めには、人類競爭上の諸種の障礙を掃蕩すると極めて肝要なりと主張す、要するに、本書は富の社會人類に關する根原理法を論述せしものにして、僅々二百餘頁の小冊子なりと雖ども、文章平明にして意義を闡明する甚だ要緊を得たり、此の間の研究に宿志を有するものは、必ず一間を裂いて熟讀を寄するの價値あり、目次を略擧すれば、

一、富の概念、二、勞力と富の關係、三、經濟法則の基礎、四、社會的職役の要素、五、價値の原理、六、需用供給の法則、七、分配の法則、八、合同の結果より生ずる賃銀上の影響、九、商業道德、十、組合の原理、十一、排競爭主義の經濟學、十二、教會の經濟的職分、

然れども氏の學說は分配論に於て尤も見るべく、氏は分配論を以て經濟研究の焦點とし、其の研究の結果は、今や甚だ世に聞こゆ、即ち左に掲ぐる著書之なり、

J. B. Clark; The Distribution of Wealth. (London. Macmillan & Co. 發兌)全一冊、大型四百餘頁、金壹圓、

本書の內容を略述せば、分配には自然的人爲的の兩面あり、前者は必然の現象にして、後者は必しも之を必然と謂ふべからず、然るに、吾人の眞の目的に合すべき分配の標準は之を如何にして覓む可きや、即ち彼の勞力と資本との關係より來たる賃銀の正當なる標準は如何、更に又、勞力と資本に對する利潤の正當なる標準は如何と、分配の性質、職分、其の社會との關係、及社會の進運が分配に及ぼす結果より、更に之を勞力、資本、利潤に細論し、其の本質、本分、正當なる價値、及他に對する關係、影響等

を、或は純理に照らし、或は事實に徴し、尤も眞率切實に該論す、但し、文章は前書に比すれば稍難澁なり。

アール、テイ、イリー　經濟論。

R. T. Ely Introduction to Political. Economy. (New York Eaton and mains 發行)全一冊、小型參百五拾頁、定價參圓五拾錢、

氏は、ウヰスコンシン、大學の教授にして、米國有數の經濟學者なり、氏の學說は、獨逸派の系統に屬し、正當に舊派の長を疏釋收攬す、氏は經濟學を以て、人類智識の尤も興味深く、又最も切要なる一科とし、あらゆる著書に其抱負を實現せんと勗めたり、殊に氏が讀者の興味を誘致し、好奇心を刺激し、其胸奥を開發して以て初學者の經濟學研究心を耐久持續せしめんとを期し、常に文章の流暢、理義の平明ならんとを把持せしは、初學者の太だ喜ぶ所にして、人若し最新學派の一派を窺はんと欲せば、須らく先づ氏の著に就て學ぶ所あるべし、本書は、氏が「バルテキモア」の「ジョン、ホプキンス」大學に經濟を講じ、學生の爲め特に教科書の目的を以て著作せしもの、文の平淡、理義の簡明、少しく英語を解するものは、章々讀過左迄其の困難を感ぜざるべし、今本書內容の部門を示せば、經濟の性質、產業の發達、特質等を述說せる部門と、生產、交換、分配、消費を論述せる四部門と、財政、經濟思想の沿革、讀者に對する所感とを叙說せる三部門とより成る。

氏は著述頗る多く、經濟史、經濟學史、事實問題に關する著書等、就て見るべきもの多々あり、之等は其部門に就て紹介すべく、更に氏は近時、學生指導の目的を以て書中各部に研究題目の要覽參考書等を附記し、四百頁內外の著書を世に公にす、內容は前掲の「インツロダシヨン」と異なるなし、故に讀者は其研究上何れの書に就くも氏の學說を翫味するに選ぶ所なかるべし、書名定價は即ち左の如し。

R. T. Ely; Outline of Economics. (New York. Ma cmillan & Co. 發兌)全一冊、小型四百〇貳頁、定價參圓五拾錢、　$1.25

ルイギーコッサー　初等經濟學

Luigi Cossa; Introduction to the Study of Political Economy, trans by Louis Dyer. (London: Macmillan & Co.)全一冊大型四百參拾頁、定價四圓貳拾五錢、　8s.

氏は伊太利探讃學派の錚々たる經濟學者にして、氏の著述は夙に歐洲諸國の邦語

に飜譯せられ、大に世人の愛重を博せり、氏の學說は、其の論據を以てすれば當然探蹟學派に歸屬すと雖ども、敢て氏は之を崇拜するの陋に出てず、穩切に舊派學說の長短を咀嚼し、一般に能く公平の見解を把持せり、されば、若し當時新舊學派の長を折衷し、以て最新學派の名稱を標榜するものを果して最新學派と稱するとを得ば、氏も又當然此の一派に屬するものなり、而して本書は氏が社會經濟學の初步として述作せしものなるが故に、論說詳密に亘るを得ずと雖ども、宏汎なる意義を的確に其の要綮を簡明にせるの點は、學生の研究書として特に紹介するの價値あり、譯文秀拔なるを得ずと雖ども、原意を傳ふるの點に於ては左迄誤譯を見ず、本書は本邦永井直好氏に依りて獨逸譯書より本邦語に重譯せらる、相對照せば發明する處少なからざるなり、內容の目次を略擧すれば、

第一篇、況論、第一經濟學の意義及其の範圍、第二、經濟學の研究區分及必要、第三、經濟行爲の要件、第二篇、簡單なる目次的經濟學史、第三篇、財の生產、一、生產の本質、二、經濟的行爲、三、生產力、四、生產に關する經濟上の原則、五、生產に關する制限、六、生產の機關、第四篇、財の流通、貨幣、價格、銀行、信用等の論究、第五篇、財の分配、賃銀、利子、企業、地代等の研究、第六篇、財の消費、其の意義、生產との關係、第七篇、經濟的團體、諸組合の說明、

エス、エヌ、パッテン　經濟原論。

S. N. Patten; The Theory. of Dynamic Economy. (University of Pensylvania より出版す)

全一冊、百五拾參頁、(個人經濟學的研究法)定價貳圓五拾錢、

氏は「ペンシルバニヤ」の大學、財政經濟學の專門校たる「ホートンスクール」の敎授にして、論理的方面に、思想豐富なる經濟學者として望名高し、氏は自然を以て、社會進達の禪益上人類の使用すべき勢力の爲めに存在すと主張し、社會は、自己の運命を支配すべき義務と、自然の賦與する機會の利用に對する責任とを有すと論稱し、經濟的活動を以て、此點に關する人類の最も緊要なる行動となせり、氏は、經濟學上の問題に於ては、消費の立脚地より主として接觸し、消費說は實に氏が根本の敎說、氏の經濟學の全系は、自然に之より發生せり、本書は即ち此の全系の根原理義を論ずるものにして、文章稍簡勁、多少咀嚼力の素養を要すと雖ども、又以て苦讀研究の價値あるべし、今內容の目次を示せば。

自一章至五章、緒論として唯物論者「アダム、スミス」「ダビッド、リカード」「ゼヨン、スチワード、ミル」の經濟學說を評論し、以下章に據りて、六、生產費に關する古代原理の發達、七、動的經濟、八、財貨消費の感化、九、費用の法則、十、費用と價格に關する昧蒙の敎說、十一、動的社會に於ける消費の性質、十二、主觀價値より起る分配、十三、客觀價値より起る分配、十四、分配に於ける最小限度、十五、制限價格、十六、自由租稅、十七、動的社會に於ける生產の範圍、十八、被傭者の階級、十九、効用の意義、二十、生活の基礎、二十一、生產の原理、二十二、生產漸減の法則、二十三、剩餘の處分、

氏が經濟學の基礎とせる消費經濟論は、即ち左の著書に依りて之を學ぶを得、進んで氏の學說を叩かんと欲するものは、須らく本書に就て攻究する處あるべし。

S. Potten; Comsuption of Wealth. (NewYark: G. P. Putnam's Sons.)全一冊、小倉參百餘頁、定價五圓五拾錢、

エミール、ド、ラブレイ經濟原理。

Emile de. Laveleye; Elements of Political Economy. Translated by A. W. Pollard. (NewYork. G. P. Putnam's Sons. 發行)全一冊、小倉二百八十八頁、定價凡そ三圓五十錢、

氏は白耳義「ヱーヂ」大學に敎鞭を取りし人、氏の學說は、淵穩にして明快、犀利にして程切なり、即ち氏が本書に論ずる處、總て之れ趣味律々たる好文字にして、簡潔に要緊を捕へ來たるの妙味は、讀者不知不識誘導啓發せらるゝの感あり、著者が經濟の原理を說くに、道德を緯とし、政治を經とし、經濟的活動の正當なる判斷を常に明らかにせんと勗めたるは、尤も本書の特色と謂ふべし、素此の書は、初學者啓發の目的を以て平易に經濟學の大綱を論述し、辭文又簡明平淡、初學者に取りては尤も有益なる著書と謂つべし、今其の目次を略擧すれば、

卷一、總論、一、經濟學の釋義、目的、及其の釋義の不妥當を駁す、二、經濟學と法律哲學倫理歷史地理等の關係、三、富、豐、缺乏の意義、四、價格論、五、原理考究の方法を論ず、六、經濟學の部門、卷二、一、生產の釋義、二、自然、三、勞働、四、總產、純產、及生產費、五、資本、六、生產と消費との權衡、七、有用なる職業の分類、八、人的關係に立てる職業、九、物的關係に立てる職業、十、殖民地、十一、資本結合の會社等を論ず、卷三、一、分配の區別、二、分配の始末、三、分配の定まる原由、四、自然力の報酬、五、賃銀、六、勞働者の情態を進捗せしむる方策、七、人口蕃殖、八、利益、九、資本の報酬を論じ、更に富の循環の餘下に、交易、賣

貿、貨幣、信用、貨幣の恐慌、及商業、實業社會の恐慌、自由貿易、保護貿易等を論じ、第四、一、富の消費、二、蓄積、保險、三、公共の消費、四、收稅等を論究す、

本書の邦語譯(但しボーラード氏の英譯書より重譯す)は、牧山耕平氏に依りて譯述せらる、譯文簡明能く原書の意を傳へたりと謂ふべし、英語に通ぜざる諸氏は須らく、本書に就て學ぶべく、書名定價は即ち左に掲ぐる如し、

經濟學粹　牧山耕平氏譯

全一冊、四六判五百頁、定價八十錢、東京市京橋區彌左衛門町七番地

經濟雜誌社發行

チー、イー、グリッフレスリー　政治及道德哲理論集

T. E. C. Leslie; Essays in Political and Moral Philosophy. London. 全一卷、大倉四百餘十頁、

定價五圓六拾五錢、10s6d.

〃　Land Systems of Great Britain and Ireland. London. 全一卷、大倉五百餘頁、

定價六圓參拾五錢、12s.

氏は儼然として經濟學研究の歴史法に據るべきを主張し、洽博なる識見を以て有益なる數多の論文を著はし、偏重せる英國學派の缺點と誤謬に痛切なる批評を加へたり、氏が英國學派の抽象的方法及其の方法より來たる演繹の結果を論破するや、尤も出色の好文字をなせりと雖ども、自から研究の基礎を確立し、經濟學の本義を述說するものに於ては、特に掌握するに足るものなし、隨つて氏の著述は、一貫せる經濟原理の體裁をなせるもの世に存するなく、其の種々の論文中より有益なるものを撰擇すれば、前掲の二著は以て氏の學說の一般を窺ふに尤も力ある述作たり、前者は氏が經濟事象を以て、智識上、道德上、法律上、政治上の事項と相關連して之を分つと能はずとの意見を論說せるものにして、氏の經濟研究に關する見解の根本は之に依りて聽くを得べく、後者は、大「プッテン」、及「アイルランド」の土地制度を評論述說し、氏が農業經濟、貨幣、利潤等に關する主張は、之に依りて追修することを得。

ウキルヘルム、ロッセル、經濟原論、

W. Roscher, Principles of Political Economy. translated by J. J. Lolor. (New York. Henry Holt & Co. 發賣)全二卷、第一卷、大形四百六十四頁、定價八圓五十錢也、第二卷同四百

四十五圓、定價七圓五十錢、

氏は英國學派に對抗して興りし歴史學派の泰斗にして、該學派の特質は、氏に依りて最も能く代表せらる、本書は、氏の大著述、農業經濟論、商工業經濟論、財政學の初頭に冠せし經濟學全書の第一卷にして、英派の抽象的一理法の下に、度外に經濟の原理を推論せる偏頗を看取し、經濟學上の原則は、之を其の種々の段階に於て經過し來たりたる歴史的進歩の蹤蹟に考證し、理論の應用は時處の差別に汎く驗照考察せざるべからざる主張を以て學説の論規となす、氏の一派が歴史を貴び、事實を重んずるの結果、經濟の通理を排斥し、經濟に關しては天然の理法存在せずと信じたるが如きに至りては、英派に對する此一派の通弊を釀成せしものなりと雖ども、經濟の研究に更に著大なる一新基礎を置きしは、蔽ふべからざる該派の功績にして、這を代表せる氏の著述は、稍詳細に經濟學を討究せんと欲する人士の必ず先づ一讀すべき斯學の典型とす、前掲の譯書「レロデー」氏の飜譯は、解釋の盡さゞるもの多く、文章拙にして意義散漫せりと雖も、別に英米或は本邦語に據りて譯述せられたるものあるを見ざるが故に、已むなく本書に就て其の一般を窺ふの外なし、今本書の內容の目次を畧擧すれば、

第一卷、緒論、歴史的研究に就て、第一章、經濟學の基礎觀念、貨物、價格、富等の性質、內容、社會の他現象に關する關係、第二、經濟學の諸科學中に於ける地位、第三、經濟學研究法に就て、第一篇、貨物の生產、第一章、生產要素、第二、生產要素の生產上の共働、第三、自由と奴隸の起源、性質、結果等、第四、貨物と私有財產との結合、第五、信用、第二篇、貨物の循環、第一章、一般に於ける循環、第二、價値、第三、一般に於ける貨幣、第四、價値の因て來たる由來、附錄、紙幣の研究、第二卷、第三篇、貨幣の分配、第一章、一般に於ける收入の意義、種類、性質等、第二、地代、第三、賃銀、第四、利潤、第五、企業者の利益に就て、第六、收入の三種の特徴、第七、國民收入の分配、第四篇、一、一般に於ける貨物の消費、二、浪費の由來、結果、三、一般に於ける保險、第五篇、人口論、第一、人口增殖の原理、第二、人口增殖の歴史、第三、人口增殖に對する政策、附錄、國際的商業及產業保護制度に就て、

エッチ、デー、マクレヲッド經濟哲學、

H. D. Macleod; Principles of Economical Philosphy. London. 全二冊、大判各五百餘頁、定價

王國也、

氏の學說は、新舊何れの學派に屬すべきや、論據奇變橫逸にして明確に之を判じ難し、氏は識見該博にして、議論又鋭利なれども、推究一面に偏し太だ妥當を失するもの尠なからず、亦諸種の觀察に於て、啓發的有益のもの多しと雖ども、唯形裝を新規にせる陳腐の邪說、實際を閑却せる危險の謬說混在し、教科書的目的を以て採用すべき著述にあらざるや言ふを俟たざれど、既に幾何かの識見を修得せし人々は、氏の犀利なる評論觀察に對し、特に一開を裂いて討究を試みるの敢て贅事にあらざるを信ず、本書は田口卯吉氏に依りて翻譯せられ、東京市日本橋區通三丁目丸善株式會社より出版す、原語を解せざる人々は、本書に就て其の一般を窺ふべし、

經濟哲學、　田口卯吉譯

上卷七百頁中卷千〇二十餘頁下卷缺本明治十八年元老院藏版

定價上中二冊凡そ一圓六十錢

譯文は術語の翻譯幼稚なれど、全體に於て文章明快にして譯述又周密なり、

更に氏の論說の大要を窺わんには、其の梗概を約述せる氏の初等經濟論に就て見るべく、書名定價は即ち左の如し、

H. D. Macleod; The Elements of Economics. London 全一冊、大約四百餘頁、定價八圓四十錢也、

エッチ、チャーレス、ケリー經濟學、

H. C. Carey; Principles of Social Science, (Phyladelphia. Henry Carey Baird & Co. 出版)全三冊、大形何れも四百餘十頁、定價全部二十一圓五十錢也、

氏は其の出立せる原則の一面より之を觀れば、英國學派の系統に屬するが如しと雖ども、氏獨特の創見に出づるもの種々の方面に關して頗る多く、見解全くスミス、マルサス、リカード等の學說と趣を異にすれば、全體の特質に於て自ら一種の學派を標榜するものと謂ふべし、而して、氏の學說は一般に評論鋭利劃切にして、彼の奇矯を以て優れるマクレヲッドの學說に比すれば、就て聽くべきもの極めて多し、唯氏の著述の宏濶にして、文章又平易を缺けるは、聊か初學者に取り好當の參考書たるを得ず、然るに、本書はケート、マッキーン氏に依りて文章平明に解說せられ、其の大體の要案は遺漏なく約說せられたるを以て、少しく語學の素養を有するものは

本書に就て其の一般を研究するの便あり、書名定價は即ち左の如し。

H. C. Carey; Principles of Social Science. Abridged by Kate Mcken. (Phyladelphia. Henry Carey Baird & Co. 發兌)全一冊、小形五百三十頁、定價五圓五拾錢也。

更に又、右解說書は、犬養毅氏に依りて本邦語に飜譯せられあるを以て、原語の素養なき人々は、本書に就て其の一般を窺ふの便をも有す、但し飜譯の年代は甚だ舊し。

ケリー經濟學。犬養毅譯　明治十七年印行

本書は譯者自から譯述出版したるものにして、恐らく古書肆を探索する外手に入り難かるべし、譯文は平易明快にして意味又正確なり。

エフ、ダブリ、ウ、ブラックマー經濟學

F. W. Blackmar; Economics. (Crane & Company. 發兌)全一冊、小判五百〇三頁、定價四圓。

本書は尤も通俗平易に經濟學の全般を講述し、英語を解する人の初期の讀書として良好の一書たり、吾人は、本書に依り敢て獨創の學理を聽くを得ずと雖ども、其の平明に原理の說明を整へ、着實に理論の實用を考究せる點に於て、初學者の適當なる講讀者として紹介するに足るべきを信ず。

シー、エス、デバス經濟學

C. S. Devas; Political Economy. (London: Longmans & Co. 發行)全一冊、小型六百六十二頁、定價四圓二十五錢。

本書はブラックマー氏の著書に比すれば、稍專門的即ち學理的述說に屬し、初學者の讀書としては前書に比して難解の箇處多かるべし、氏は原理の正鵠を得んが爲めに、引證の徵證に專ら依據し、著書の過半は引照文の爲めに沒領せられたり、讀者にして若し幾分の素要を有せば、原理の追究に參考するもの尠なからずと雖ども、何等の準備をも有せざらんには、恐らく本文と引照の比較研究の煩に堪えざるべけん。

アチールロリア、社會の經濟基礎

Achille Loria; The Economic Foundations of Society. Trans from the second French Edition by Lindley M. Keasbey. (New York: Swan Sannenschein & Co. 發行)全一冊、小判三百八十五頁、五圓五十錢。

本書は、經濟動念の性質作用本分を、重要なる社會現象、即ち倫理法律政治等の本義に照らし、以て其の經濟の正當なる基礎を論覈せるものにして、炯眼奇拔の論說敢て尠からず、殊に氏の政治の權勢に伏在せる經濟の基礎に關する議論は、最も聽くに足るべく、更に又其の一國政治の職分は、將に之れ不生產の職業に止まるものたりとの論說に至りては、實に天空一閃の奔電とも謂つべきものなり、譯文流暢能く原書の旨趣を傳へたれば、經濟學の素養を有する諸氏は、宜しく閑を裂いて一讀玩味すべきなり、

本邦語書の部

法學博士天野爲之著

經濟學綱要、東京市牛込區五軒町東洋經濟新報社發行

全一冊、菊判二百〇六頁、定價九十錢、

本書は、經濟學、經濟政策、財務政策の三原理を、最も簡潔明快に解說し、其の價値の存する處、世既に定論あり、敢て予の凡見短識を改め加ふるの必要なからんも、予は右綱要の一著を揭ぐるに當り、特に本邦語の綱要的著書の價値に就き聊か論ずべきものあり、近來、一般讀書界の傾向、讀書力の薄弱無根氣なる爲めか、將た又俄かに研學の氣運旺盛となり、入門的著書の需用一時に增加し來たりたる爲めか、著書に於ては綱要的のもの、譯書に於ては抄譯的のもの盛んに斯界の歡迎を享け、隨つて出版界の之等需用に應ずる體裁の發免、頻々として刊事行の有樣なり、然るに、予は便概的著書の、複雜なる學說の手引として甚だ必要なるを信ずると同時に、一切の學說が夫等綱要的著述に適するや否や甚だ又疑なきを得ず、予を以て之を觀れば、學說の內容比較的狹義に、又全體に於て具體的性質を帶ぶるものは、一般に綱要的著述に適するが如しと雖も、其の說く處比較的廣汎にして、又遠く抽象的理論に立脚するものは、一般綱要的述說に適せざるが如し、されば經濟學に於ても、其の學說の如何に依り、或は綱要に適し、或は綱要に適せざる徑庭の存するあるを信ぜんとす、而して適切ならざるものを服ひて抄說するが如き、學問上より之を謂へば其の無用の擧たるは言ふを俟たず、方便上より之を謂ふも、又決して策の得たるものに非ざるなり、予は今此の顯證の最も好適例を、本書と法學博士松崎藏之助氏の著述

せられたる經濟學要義との對照に見る、松崎博士の學說は、要義に述べたる處を以て揣摩すれば、新舊兩學派の折衷を企圖するものゝ如く、而かも猶ほ宏汎の意義事ろ其の多きを占め、即ち氏の定義に曰く、「經濟學とは、吾人の缺乏、及び、經濟的活動より出づる出來事、關係、及び、之を支配する諸則を研究する學なり」と、氏の出來事と稱し、關係と謂ひ、之を支配する諸則と言へるもの、之れ最も廣汎又抽象的意義を包含せる辭句ならずして何ぞや、之を彼の天野博士の經濟學とは、財の生產、分配交換、消費を論ずる學科にして、財とは價格ある物件を謂ひ、物件とは、觸覺し得べきものを意味し、價格とは、一の物件が他の物件と代り得る力を謂ひ、此の力ある物件を即ち財と言ふと定義せられたるものに比すれば、其の廣狹具抽の程度、曾に外延の上に一大溝渠を劃するのみならず、其の梗概的述說としての効果、經濟學綱要は、綱要として理義毫も晦澁せず、全卷明確に著者の旨意を一貫すれども、要義の述說する處は、例令富の定義を、「富とは、其の所有する財物の利用を發揮して、自己の慾望を滿足せしむるとの大なるとを謂ふ」と謂ひて、而して富の生產なる辭句、即ち、自己の慾望を滿足せしむるとの大なるとを生產すてふ、到底要義的論說を以てしては、漠として其の意義解すべからざる章句を所々卷中に遺して述說せざるべからざるに終れり、之れ即ち、學說の內容の如何に因り、或は綱要に適し、或は綱要に適せざる自然の理數より來れる結果にして、比較的廣汎なる學說は遂に綱要的述說のものたらざる顯著の表證たり、之を以て、吾人研究途上の者にありては、綱要的述作の著書は周密なる考査を經て購讀するに非ずんば多く何等の裨益をも享くることなく、徒らに時と勞とを空費するの愚を見るに終るべけん。

然るに、以上天野氏の經濟學綱要は、元來狹義の學說に立脚し、全然具體的性質に出づるものなるを以て、述說甚だ綱要に適し、殊に氏の年來の經驗と識見に校練せられ、簡潔なる健筆を以て學說の眞髓を解說したれば、一句一章冗贅の文字なく、恰も狹義經濟學說の公理を披瀝したるに等しく、經濟學研究の初學者に取りては、實に得難き良好の一書たるべきなり、今其の內容の目次を畧擧すれば、

經濟學、總論、經濟學の定義、財、生產、分配、交換、消費、の意義、第一篇、財の生產、生產の必要件及其の多少を來たす原因、第二篇、財の分配、第三篇、財の交換、第四篇、財の消費、經濟政策、總論、經濟政策の意義、主義、原則、等、干涉の場合及方法、獨占業、土地所有、遺

產相續、度量衡及貨幣の場合、貨幣に對する政策、單複本位の可否、金銀の辨償作用發明、著譯、新規の事業、定期航海、軍器軍艦、教育、勞働保護、銀行、保險會社、幼稚時代の產業、貿易等に關する論說、財政、第一章、租稅、第二章、公債及豫算、

法學博士天野爲之著

經濟原論、　全一冊、四六判五百四十餘頁、定價一圓三十錢、

是なり、本書は右綱要の原理を敷衍詳論したるもの、著し綱要を以て氏の學說を咀嚼する能はざる諸氏は、進んで本書に就て討究すべなり、但し年代より謂へば、綱要は新著にして、原論は氏の舊著なり、

田口卯吉著

日本經濟論、　京橋區彈正衞門町七番地經濟雜誌社發賣、全一冊、四六判百八十四頁、定價二十錢、

本書は、英國學派の貿易論を解說したるに過ぎず、題號に示すが如く、一貫の學說にあらずして、一場の論說なり、然れども、自由貿易の長所を知らんと欲するものは、簡易輕便に其の一般を本書に就て學ぶことを得べけん、

法學博士田島錦治著

最近經濟論　東京市神田區一ッ橋通　有斐閣發賣

全一冊菊判五百二十七頁定價壹圓五十錢

本書は歷史派經濟學の長所を基礎とし、之に著者の穩切なる見解を加はへ、最も通俗平明に廣義の學說を論述す、其の所謂通俗平明なる處、或は世の讀者に卑近平凡の讀りを買ふとあらんも、初學者に取りては、却て愛に其の重んずべき本書の價値存在し、彼の天野博士の綱要を以て、狹義に於ける經濟學說の綱要の眞髓を得たるものとせば、本書は廣義に於ける學說の好當なる綱要書とも謂ふべく、在來の著書中又以て眞好の一書たるべきなり、左に內容の目次を略擧すれば、緒論第一章に、經濟學の基礎觀念を論じ、第二章に、經濟學の定義、地位、及部門を說き、第三章に、經濟學の歷史、第四章に其の研究法を述說し、更に以下經濟學の主要部門を三篇に分かち第一篇に生產論、第二篇に交易論、第三篇に分配論を說き、最後に附錄として經濟學と法律の關係、現今の社會問題、奢侈の性質、カール、マークス氏社會主義の要領を論

じたり。

法學士島村孝三郎著

最近經濟學　東京市麹町區有樂町三丁目一番地實業の日本社發行全一冊菊判四百八十七頁上製壹圓拾錢並九十錢

本書は形體、內容、文章、槪ね田島氏の經濟原論と大差なく、只新著なるの故を以て、田島氏の簡敘せる方面に、稍詳細の論說を加へし箇所なきに非ずと雖ども、學說の內容より之を謂へば、毫も前者に優れるの點を見ず、前者の以て負ふべき運命は、後者も又全く免かるゝを得ず、一を平凡なりとせば他も又同じく平凡たるべく、從つて、彼平易通俗の採るべき長所ありとせば、這も又其の長所に於て背く處なかるべし、這說中、前書に比し特に筆を加へたりと思はるゝ題目は、交通論、恐慌論、トラスト、人口論、勞働者の地位、現狀、等なり。

法學士夏秋龜太郎著

最近經濟論　東京市神田區表神保町同文館發行全一冊五百十二頁壹圓五十錢

本書は新舊兩學派の折衷に立脚し、最新の原理を發揮せんとの抱負に依りて著述せられたるものなり、著者卷頭に曰く、本書は多忙の際に執筆し、候濃矛盾の點なきを保せじと、蓋し、這は恐らく著者の謙辭ならん、然れども、實際校線の日淺くして、訂正十分に迨ばざりしもの在りし爲めか、著者の意宏汎にして言葉足らず、文辭又生硬にして旨意貫徹せざる箇所尠なからず、未だ以て新舊派の長を洗練し、最新の原理を敷述せりと謂ふを得ず、其の全體より之を言へば、自己の抱負の輪廓を標榜するに止まり、布置設色の論說に筆を加へざるの感あり、參考の價値は、以上二者の上に更に特書すべきものあるを見ざるなり。

法學士山本象太郎著　明治廿七年發行

最新學派經濟學　東京市本郷區六丁目哲學書院全一冊四六判定價四十五錢

本書は、綱逸派、即ち新派經濟學の梗概を簡單に述說せるものにして、文章簡明にして理論整備し、書著に屬すれども、却つて梗概の要素を得たるの點に於ては近著に優り、斯學說の初步とし、初學者に取りて良好の一書たるを信ず、內容述說の綱目は

以上三氏の著書と毫も異なる所なし、故に若し田島氏の原論乃至島村氏の著書を一讀せし諸氏は、更に本書を講讀するの要なかるべし。

法學士小林丑三郎著

純正經濟學　東京市神田區今川小路二丁目八番地專修學校發行全一冊

菊判四百〇八頁定價壹圓參拾錢

本書は新舊兩派の系統に當然屬するものゝ研究を各々其の一方に偏するものとなし、兩派の折衷に依りて圓滿なる學理を發揮せんとの抱負を把持せるは、前掲最新學派を標榜せるものと相等し、但し本書は經濟學を以て價値の成立變動及解消に關する理法を論ずるの學問なりとし、價値てふ現象の發現を經濟學上最も較著なる討究の對境として、爰に斯學の研究基礎を設定せしは、聊か其の形態を他と異にする觀ありと雖ども、所謂其の價値の成立變動解消に關する理法の研究は、啻觀察の立脚地を轉換せし出立點の差異に止まり、學說の內容論旨に至りては他と敢て異なる所なし、要するに本書は簡潔に能く一切の理法を網羅せし點に於て、讀者の參考に資すべきもの多かるべし、內容の順序を摘擧すれば、第一卷、第一章緒論、第二、經濟說の發達、第二卷、第一篇、經濟學の定義、第二篇、價値の成立、第一章、人欲、第二、物能、第三篇、價値の變動、第一章、價値の種類、第二、價格の高低、第四篇、價値の解消、第一章、價値の分解、第二、價値の消長之卷り。

法學博士金井延著

社會經濟學　東京日本橋區本町三丁目金港堂發行全一冊菊判八百六拾九頁定價貳圓參拾錢

本書も、著者の標榜する最新舊兩派の折衷に立脚し、氏の該博なる引證と、遠大なる推究とは、在來の著書中尤も活潑にして又測量なるものに屬すれども、而かも讀者に對する本書の價値は、其の純正經濟學を述說せる下卷にあらずして、寧ろ經濟學上の思想觀念の意義、特質を論證せる上卷に存す、即ち上卷數章に涉り、經濟學の根本概念より、經濟學の定義及其の分科を論し、經濟學と之れに密接せる諸科學との區別及關係を述說するに、周密に諸學者の學說を分類し、以て著者の評論解釋を明らかにせる、吾人初學者に取りて最新學派の企圖する處を窺ふに尤も力ありと言ふべし、下卷純正經濟學の述說に於ても、等しく諸學者の學說を解剖疏釋し、論說

の徹底に引證を勗め推究の正確ならんことを重んじられたりと雖ども、元來最新學派の企圖する處は、學說の內容高遠深大にして、多く道樞の緊點に到りて意散漫するの通弊あり、本書又た此の通弊を免かるゝに由なく、詳論を期して而かも隔靴搔痒の說明を遺せるもの尠なからず、未だ玩讀の素養なき人々にとりては、氏の學說に就いて渾然たる思想を得んこと太はだ難かるべし、今內容の題目を畧擧すれば、

上卷總論第一篇經濟上の根本概念第二篇經濟學の定義及其の分科第三篇經濟學と之に密接せる諸學科との區別及關係第四篇經濟學の研究法第五篇經濟學に對する批難第六篇經濟學の沿革下卷純正經濟學緒論第一篇財貨の生產第二篇財貨の循環第三篇財貨の分配第四篇財貨の消費結論

永井直好譯

社會經濟學　東京市牛込區早稻田大學出版部發行全一冊菊判貳百八十七頁定價壹圓

本書は、伊太利の大家ルイギー、コッサー氏の著述を、獨逸の譯書より重譯す、原書の價値は英譯書の部に於て陳べたるが故に再び贅せず、譯文稍散漫に失せし箇所あるも、多く良好に譯述せらる、英譯書と併せ讀まんには、原意を領するに甚しく誤る處なかるべし。

法學博士田尻稻次郎著

經濟大意　東京市今川小路專修學校出版全一冊菊判二百參拾四頁定價五十錢

本書は「ロッセル」氏の學說を祖述し、題して大意と謂ふ、其梗概を述ぶるものたるとも敢て言ふを俟たざれど、論說專ら平易を旨とし、理を說くに多く通俗の事例を示し、毫も高遠なる理論に言を迫ぼさゞるが故に、初學者の一般研究の栞として、在來の書中又良好の一書たるべきなり、其の內容の順序を略擧せば、

第一章總論に經濟學の意義、目的、本分、其の研究の困難、他學との關係、交換、富の意義を論じ、第二章に、生產の三要件、勞力、資本、土地の性質、作用、區域等を述べ、第三章、分配の意義、要點、所得の種類、性質、作用、世運進達の結果、勞銀の性質、他諸現象と相關する關係、共同法、同盟法、小作料、及其の方法、信用及價格の意義、性質、本分、貿易論

等を論究し第四章に消費の釋義、並に其の生產分配との關係、消費の分類、及其の生產及貯蓄との關係を述ぶ。

氏と同じく「ロッセル」氏の學說を祖述し、通俗平明に其の大要を論述せるは、駒井重格氏の經濟考徵なり、田尻氏の著述は、尤も初等の說明に屬し、駒井氏の著述は稍其の詳細に涉れり、二著併せ讀まんには、歷史派の一般は略ぼ通曉することを得べけん

駒井重格著
經濟考徵　東京市本鄕區本鄕六丁目哲學書院全一冊四六判四百頁定價凡そ六十錢

氣賀勘重解說
フイリッホウヰッチ經濟原論　東京市神田區表神保町同文館發兌全二冊上卷菊判三百二十五頁定價八十錢下卷同三百七十四頁定價八十錢

原著者フイリッホウヰッチ氏は、墺都維也納大學の敎授にして、夙に小壯有爲の學者として其の名學界に高し、氏は新舊兩派の長を攝收し、明快精透なる頭腦を以て之に脈絡井然たる組織を與へ、以て從來紛綜し來たれる學說の根蔕を質し、所謂最新學派の企圖する現狀を明らかにせんとす、右原書經濟學原理は即ち此の間の綱領を初學者に知らしむるの目的を以て述作せられ、抽象的理論と、歷史的研究の中庸を守ると尤も正鵠を得たり、唯氏の學說は、其の高遠汎大に涉れる性質の自然として、概括的用語に富み文章又綿密、而かも乾燥にして趣味甚だ乏しく、爲めに往々學生をして了解難の嘆を發せしむ、然るに右邦語解說書は、之等の困難あるに拘はらず、譯者能く其の全體の主旨を咀嚼して理論の精粗を整齊し、文章又尤も平易通俗に專ら解說の明確ならんことを勉めたるが故に、一貫の思想渾然として統一を失はず、初學者の參考書としては在來解說書中尤も良好なるものゝ一書たるべし、書中解說の目次を略擧すれば、

上卷、總論、一、國民經濟の眞相、二、國民經濟、三、國民經濟學の意義、性質、第二篇、國民經濟發達の條件、其の一、自然的條件、其の二、社會的條件、其の三、個人的條件、第三篇、生產及營利、一部生產と其の要素、二部生產及營利の組織、三部生產及營利を支配す

る原則等を論じ、下卷、第四篇、交易の組織、及機關、性質、作用等を說き、第五篇、收入と消費、第六篇、經濟政策上の思潮を解說す、

福田德三著

國民經濟原論　東京市本郷區本郷六丁目五番地哲學書院發行概論第一編

第一卷總論上冊菊判參百八拾九頁定價壹圓五拾錢

本書は、著者の經濟學概論の第一編として刊行せられ、而かも未だ總論の第一卷をも完結するに至らず、僅かに其の一部の上冊たるに過ぎざるを以て、今之に對し著述の眞價を評論せんが如きは、素より大早計のそたるは言ふを俟たず、又敢て予が淺識の凡評を加へ、此の有爲の大作を瀆さんとするの僭上に出づるには非ざれども、本書上冊に於て氏が企圖する處を揣摩すれば、著者の抱負は甚だ偉大なるものにして、尨大複雜なる經濟學の本體を、其動念の奥底より尋繹究覈し、精嚴の批評と、闡微の述說を以て尤も詳密に論詮し來たらんとす、氏の完成は實に從來紛爭の裡に昧茫せる新舊兩派の迷霧を披拂し、折衷新派の標榜する處を健確明瞭なしむるものたるべく、之れ吾人の本書に熱心なる望を囑し、又完成の日を翹首して待つ所以なるが、氏は斯くの如く詳密なる論說を企圖する用意として、其の述說の方法を尤も通俗平易而かも說明の精微に至るを得べき言文一致を採用せり、這も又專ら思想の述說を任ずる科學上の著述の手段として吾人の太だ喜ぶ所なれども、元來言文一致の文體たる、之を巧妙に措辭すれば、正確なる意味を釋述し、漢文乃至國文調の遂に至る能はざる精密の說明に到達するを得べしと雖ども、少しく其洗練簡潔の技能を失はんか、忽ち文辭冗漫、意義重複、全體の旨趣錯綜するの流弊を有し、却て思想述說の好方便たるに背くの缺點あり、本書に於ける氏の文致は、果して此の間の長短に關するものなきか、吾人を以て之を觀れば、氏の文致は自著としては甚だ諢文的臭味多く、即ち言文一致の流弊を追ふて聊か重複廻旋せるの嫌なきかを覺ゆ、這は或は氏の論說の性質の自然より來る已を得ざるものも多々之あるべく、單に普通の述作の常規を以て、其の外形の平等を說き、內容の差別を無視せんとするは、洵に妄評失當の沙汰なりと雖ども、同じく言文一致を以て其の理法を述說するに、少しく章句の簡單を計り、辭語の洗練を念ずれば、文章上の冗漫と重複は容易に之を除拂するを得べく、而して、斯くの如くして始めて述說闡微の效も完ふする

に至るものなれば、若し著書の論旨の內容にして、之等述說の方式に校訂斧鑿の餘裕を許すとせば、今一段文章の簡ならんとを敢て深く切望して止まざる所なり。

更に今一件、著者に感謝を表すると同時に尤も切望の念に堪えざるは、氏が引照の該博丁重にして、而かも往々其の釋義の原文の儘に放置せられたるの一事なり、諸種の引證が、吾人の智識を啓發精確ならしむるの點に於て有益なるは今喋々を要せざるも、引證の國語諸邦に涉り、而して之に對する標準語の譯註なきときは、夫等一切の諸國語に通達するものゝ外には折角の引證何等の要をなさず、縱し又數國語中自己の通ずるものゝみを取りても滿足するを得べきが如く引證せられたりとするも、數種の引證を收錄する所以のものは、數種各自の特質の採るべきものあるが故なるべければ。今他を措き、其の一を以てのみ、滿足せんとするは、太だ遺憾のことに屬す著者幸ひに此等該博なる諸國語の引證文に、更に本邦語の譯註をも併せ載せらるゝの勞を惜むなくんば、之に依りて吾人が益せらるゝもの其の幾何なるやを知らず、若し著者の事情にして其の累を許すあらば、願くば之に一考を賜へかし。

更に參考迄に本書の內容を畧述せば、一卷を國民經濟の根本概念と經濟組織の發展の二編に分かち、第一編、第一章、分觀の概念に、經濟、經濟行爲、其の主體、單位組織等、即ち、經濟學の根本概念に關する心象、物象、又其關係より來たる夫等の意義、性質、狀態等を論說し、第二章、集觀の概念に、經濟の根本觀念を綜合して、國民經濟の意義を論究す、第二編には、經濟組織の發展を、生產の形態、(即ち生產の手段方法)、交換の形態、生產と消費との關係、生產の主義と此の四方面を觀察の標準として古來發展の階級を分類し、第一者は、グロッセの分類法を土臺とし、第二者は、ブルノー、ヒルデブランドの分類を、第三者は、カール、ブユッヘルの分類を、第四者は、ゾムバルドの分類を其の述說の土臺とし、之に批評論難を加へて其の發展の狀態を敍說せり

第三章　經濟學史

經濟學史は、古來より今日に至る經濟上の論說內至學說を、或は時代に伴ひ、或は、學說の種類に從ひ、其の關係系統を明らかに講述するを任とす、然るに經濟學の科學的基礎を確定するに至りしは、實に十八世紀の後半の初頭、アダム、スミスの著述、富國論の世に刊行せられたるにあり、而して、爾來五十有餘年、氏の學說は斯界の金科玉條として尊崇する處なりしが、一朝佛のコムト歷史學派の先驅をなし、次いで獨逸にヒルデブランド、クニース、ロッセル等盛んにスミス派の缺點を披撥し、以て歷史的又比較的研究の正當を稱導せし以來、玆に全く經濟學の科學上の基礎は二派に分かれ、其の二派の分立發展は、相對抗して二流の系統を後年に傳へ、今や治く世界各國の經濟學研究の基礎をなすに至れり、されば經濟學の科學としての發達は太だ近代の事に屬し、其の學史上の地位は、歷史てふ意義の年代の上に非ずして、寧ろ系統上に於ける學說の種類を論說するにあり、之を以て、前章予が擧げ來れる原論の各學說に通曉せば、經濟學史の重要なる部分は既に之に因りて研究を遂げたりと謂ふも不可なく、殊に、一貫の著書として述作せられたる原論の多くには、上古プラトー、アリストートル、よりアダム、スミスに至る迄の簡單なる經濟學說の發達、即ち、經濟學史の上代に屬するものをも述說するが故に、原論の研究を少しく仔細に遂行せば、殆ど經濟學史追修の必要なきが如し、然り、經濟學の發達斯の如く近代に屬し、其の學說の性質未だ多く過去の現象たらずして寧ろ現在の對境に地位し、更に又、經濟學出生以前の經濟に關する斷篇零說は、簡單ながらも原論中に述說せらるゝが故に、自然經濟學史獨立研究の必要は大に減殺せられ、從つて經濟學史の著書として世に存するものは、多く辭書的價値に止まり、眞に科學的述說に富めるものは殆んど皆無と謂ふも過言に非ざるなり、之を以て、予が爰に採擧せんと欲するものも、決して白眉良善のものとして紹介するに足るべきものに非ずと雖ども、在來の著書中比較的良好なるものを取つて、諸君の研究上、尠なくも其の一般的研究程度の上に、左迄不悉を感ずるとなからざらんを期するに過ぎざるなり、

而して今之等の諸書を研究上便宜の順序に依りて統括すれば、即ち左に擧ぐるが如し、

ブランキー氏經濟學史
コッサー氏經濟學史

以上二書は在來の學史中最も健全良善なりとす、前者は學說の內容を示すに精しく、後者は學派の系統を示すに正確なり、

ツウォッス氏歐洲經濟學史

右は經濟學說發達の因果的關係を示すと巧妙なり、

イングラム氏經濟學史
バヂヲット氏經濟學研究

以上二書は簡單に學史の系統を叙し、以上三書の參考として一讀するの價値あり、

バルグレーブ氏經濟學辭典

右は經濟學に要する術語熟語の辭典なりと雖ども、其の學說學派の內容を簡潔平明に說明す、其の經濟學史の研鑽に貢献する處太だ鮮少ならざるなり、

本邦語書に於ては、其の良善を選擇せんとは先づ措きて、其の見るに足るべきものは左の三著を有するのみ、

哲理經濟學史。　阿部虎之助譯
經濟學史。　和田垣謙三講
經濟學史。　井下辰九郎講

以上各自紹介の條々に就て更に其の詳細のことは見らるべし

英語書の部

ゼー、ケー、イングラム經濟學史

J. K. Ingrame; History of Political Economy. (Edinburgh: Adam and Charles Black. L. 發行)

全一冊、四六判二百四十六頁、定價三圓也、

本書は、氏が其の序言に述ぶるが如く、エンサイクロペデヤ、ブリタニカの第十九卷に掲載せる經濟に關する論說の一項を土臺とし、之に據りて經濟學史の一般を叙說す、素より詳密を盡せりと謂ふべからざれど、此の小冊子を以て、古代より最近時に涉る各時代の經濟思想を、吾人々類の思想發展の聯絡に依りて簡明平易に叙說せしは、全く沒すべからざる氏の伎倆と云ふべく、殊に第四章に、歷史上に顯はれ

たる經濟上の學派、即ち伊太利派、獨逸派、西班牙派、英吉利派と、各學派の系統性質を說明したるが如き、初學者に取り其の好當なる講讀書たるべきなり、序の文中には、獨逸、佛蘭西、伊太利、西班牙の經濟學史研究に適切なる參考書を列擧せり。

ルイギー、コッサー、經濟學史

L. Cossa; Guide to the Study of Political Economy. translated by S. Jovon. (London. Macmillan and Co. 倫敦)全一冊、四六倍二百二十五頁、定價

本書は、氏が初學者の爲に、經濟なる題目の意義の說明と、經濟思想の變遷進化とを簡說せしもの、僅々二百二十頁の小冊子なりと雖も、平易明快、經濟學史の梗として、尤も適當なるものたるを信ず、內容を畧述せば、前編に經濟の意義、種類、其の諸科學に對する關係、經濟學研究法、經濟學の重んずべき所以、經濟に關する二三實地問題を論じ、後編に經濟學史の概念、區分、研究法、及其の起原に就て論じ、而して古代、中世、近世に涉りて經濟思想の發展を敍述せり、猶ほ同氏の著書にして之に稍詳密を加へ而して各國に於ける經濟學派に就て論述せしものは即ち左の書なり。

L. Cossa; An Introduction to the Study of Political Economy. (London. Macmillan and Co: 倫敦)全一冊、四六倍五百四拾九頁、代價五圓、

本書の內容を擧ぐれば、

經濟學の定義、經濟學を組成する種々の成分、經濟學と諸科學との關係、經濟學の特質、經濟なる名詞の意義出生、經濟學研究法、經濟學の重んずべき理由、經濟學研究の批難に對する論駁、以上理論的方面、經濟學史、斷片的經濟時代、經濟問題上の一記錄、實驗主義、折衷派、經濟學の先驅、重農主義「アダム、スミス」と其の直繼者、經濟學說上の英國派、佛蘭西派、獨逸派、墺太利派「ニザーランド」派西班牙派「ホルチュガル」派、「スカンデナビヤ」派、「スラボニック」派、「ハンガリー」派、亞米利加合衆國派、伊太利派、

社會主義の一時的理論たると、以上史的方面、

右二方面に就き、例の程切明確なる思索を以て論述せり、譯文又た平明簡易、初學者の「イングラム」氏の經濟學史と匹引對照し、其の一般研究に最も好適なるものならん。

ブランキー經濟學史

Jérome—adolphe. Blanqui, History of Political Economy in Europe. Translated from the Fou-

rth French Edition by E. J. Leonard. (London. George Bell & Sons. 發行)全一冊、大判五百六拾貳頁、定價七圓八拾錢、

本書は、希臘羅馬の上代より、近世に至る經濟思想、及學說を評論述說せる稍宏濟なる經濟學史にして、敍述平易、論說明快、又各學說の內容を說明する比較的詳細に涉り、在來の學史中最も良好なるものゝ一に屬す、唯惜むらくは、往々其の緊要なる箇所に年代月日を遺脫せるの一事なり、譯文平明、初學者と雖ども講讀に難を感ずるとなかるべし、目次を示せば、

自一章至四章、希臘に於ける上代の經濟思想及其の經濟的狀況を論說し、自五章至十三章、羅馬の經濟思想、及經濟的現象の顯現、轉減の跡を說き、十四章以下に、希臘羅馬の感化より來たる歐洲經濟思想の發展、夫等思想の他の社會現象との關係、又其の發展に伴ふ事實的現象の分類、綜合、亞米利加發見、殖民地新興以來歐洲に起りし經濟思想の新主義、以下更に章を改め、スミス以來歐洲に延蔓せし經濟學說の種類を講述す、

ウオーターバヂヲット經濟學研究

W. Bagehot; Economic Studies. (London: Longmans Green & Co. 發行)全一冊、大判二百拾五頁、定價壹圓七拾五錢、

本書は眞の經濟學史に非ず、然れども、舊派學說の主腦、即ちスミス、マルサス、リカードの學說を明確なる判斷に照らして評論せり、文章平明にして箇潔、經濟學史の一部として參考するの價値あるべし、

テイ、ツウキッス歐洲經濟學史

T. Twiss; Progress of Political Economy in Europe. London. 全一冊、大判四百餘頁、定價五圓七拾錢、

本書は、歐洲經濟學說の發達を、時代及社會の經濟的現象に其の發達の原因由來を質し、更に各學派の論據を明確に評論述說す、文章平易にして明快、經濟學史中又以て要案を得たるものゝ一と謂つべし、唯本書舊著に屬し、論述最近時に迨ばざるは遺憾ながら是非もなし、

先に述べたるが如く、經濟學史は多く辭書的述說に止まるものなるが、道は學說の網領要案を、或は類種に從ひ、或は時代に據りて述說するを任とする客觀的學史の

性質の自然に職由するものもありて、偏に其の辭書的なるの故を以て學史の品價を難詰する能はず、寧ろ此の點に於て純然たる經濟學辭書の、經濟學史の研究に取り甚だ緊要なるとありて、資力ある諸氏は恐らく良善なる一書を座右に備ふるの要あるべし、而して在來の辭書中、尤も良好にして更に經濟學史の研究に資するの價値を有するものは、左のバルグレーブ氏の編著にしくものなし、殊に本書の說明は平易周到なるを以て、初學者の牽閲にも毫も難澁を感ずるとなし、卷數定價は左の如し、

R. H. Inglis Palgrave; Dictionary of Political Economy. 全三卷、第一卷、自A至E第二卷、自F至M第三卷、自N至Z定價各壹拾五圓也、

本邦語書の部

本邦著書にして經濟學史の著述は世に紹介するに足るべきもの一もなく、只イングラム氏の譯書稍本邦語の經濟學史として採擧するに足るべけんか。

イングラム著

哲理經濟學史。阿部虎之助譯

全一冊、大判三百五十四頁、定價九十錢、東京市京橋區彌左衛門町七番地經濟雜誌社發行

イングラム氏の經濟學史は既に英書の部に於て其の內容の一般は之を示せり、本書は譯文懇切にして平明、初學者の講讀に其の要旨を傳ふる多く背く所なかるべし。

著述に於て邦語書を得る能はざるは予の甚だ遺憾とする處なり、不得已之を講義錄に覓めんか、紹介するに足るべきものは左の二書ならん、

和田垣謙三講述

經濟學史。早稻田大學講義錄乃至經濟學叢書所載(凡例參照)

井上辰九郎講述

經濟學史。早稻田大學講義錄(凡例參照)

兩書共に上古より近代各學派に至る經濟學說、乃至論說を述說評論し、後者は純然たる普通の講義錄體にして、文飾整備に敢て意を介せんとせず、前者は稍著述體に

心を用ひ、殊更學史の述說を興味深からしめんが爲め、文學的雅句等使用せり。

此の他金井延氏著經濟原論中の經濟學史部、島林孝三郎氏著最近經濟學中の同部多く參考の價値あるべし。

第四章　經濟各論

經濟各論は、原論中に各々部門を分かちて述說せられ、原論の素養を有する人々は畧ぼ其の一般の原理には通曉すべし、然れども、原論中に論述せらるゝ各論の說明は、多く原理の概略に止まり、未だ斯くの如き修養を以て應用經濟の境域に入らんと到底難し、されば經濟學研究の範圍縱令一般を出てずと雖ども、ある程度迄は各論の追修も特殊研究として必須たるべし、然るに各論の特殊的研究は、既に一歩を專致の門關に着くるものなるを以て、少しく程度を高むれば倏ち純然たる專致の範に入り、隨つて其の程度を一般の階程に止めんとすれば、自然不備不悉を敢てするの虞生じ、一般てふ程度を定むると太だ難事に屬す、されど今專門大家の、特に學生用として採擇するものを取捨收攝すれば、即ち以下掲ぐるが如き著述は、其の適當なる程度の研究書乃至參考書として良好なるものに屬す。

第一節　貨幣論

英語書の部

ダブル、エス、ジエボンス貨幣論

W. S. Jevons; Woney and the Mechanism of Exchange. (London Macmillan & Co.) 全一冊、

小型三百四拾二頁、定價壱圓五拾錢、

ジェボンス氏は、英國有數の經濟學者にして、特に氏の貨幣論は、實に學理深遠にして識見秀拔なるのみなら〻ず、其の實驗上より來たる智識周密該博にして、今尚ほ貨幣論に關する一大憑徴たるべく、中にも、氏が貨幣政策に關する議論は、吾人の尤も聽くに堪へたるものなり、本書學理の深遠なるに拘はらず、文章平易流暢にして理義明確、苟も貨幣の理を討究せんと欲するものゝ、必ず先づ手にせざるべからざる良好の研究書たり、今其の内容を略述せば、總論に交換の種類變遷を述べ、以下章を分かちて、貨幣の物質的性質及種類、貨幣の鑄造及形體、貨幣流通の原論、金屬貨幣の法式、英國の正貨制度、補助貨幣、貨幣本位論、鑄造に關する特權の事、國際間に於ける貨幣運行の實勢、交換の機械的に行はるゝ理由、代表貨幣、約束手形の性質と種類、紙

幣の整理、方法、信用證書、帳面上の貸借と銀行制度、手形交換所組織の制度、小切手銀行、外國爲換手形、英蘭銀行と金融市場、國民の要すべき貨幣の分量等を論ず、

本書の本邦語譯書は、田尻稻次郎氏に依りて譯述せらるゝものを以て尤もよしとす、原語の素養なき諸氏は同書に就て研究すべし、

貨幣論　田尻稻次郎譯　專修學校講義錄　（凡例參照）

エフ、エー、ウオーカー貨幣論

F. A. Walker; Money. (New york: Henry Holt & Co. 發行)全一冊、小型五百五拾頁、定價

四圓五十錢、　※2.

氏も又學理識見秀拔なる近代の經濟學者にして、氏の貨幣論は各國の實例に偏く徴證推覈せる尤も確實なる實驗的基礎に立ち、其の複雜なる問題を解釋するや、明確なる判斷を以て紛爭の疑點を解き、殊に貨幣の法則に關する議論は、優に近代斯學の憑徴たるべき價値を有す、本書は、氏が多く學理上の見地より貨幣の原理を論述したるものなるが、更に氏が當代の實際問題に關する論說は、他の一著、即ち商業及產業に關する貨幣論に於て之を聽くことを得、本書は前書に比すれば一層通俗的

性質に富み、而して其の問題に關する評論述說は、社會の進捗に對する積極的議論の見るべきもの太だ多く、本書に依りて前者を裨補せば、氏の貨幣に關する論述は殆んど遺憾なく讀習研覈するとを得べし、書名定價は即ち左の如し、

F. A. Walker; Money in its Relations to Trade and Industry. (New york: Henry Holt & Co. 發行)全一冊、小型三百三拾九頁、定價貳圓五拾錢、　$1.25

ニッコルソン貨幣論

J. S. Nicholson; Money and Monetary Problems (W. Black Wood & Co. 發兌)全一冊、小型三百七拾五頁、定價參圓七拾五錢、

氏の論說は、最も學理に富み、觀察又該博なりと雖ども、本書に論ずる所、原理の述說は太だ簡單にして、或は初學者に取り難解の嘆なきに非ず、其の實際問題に關する論說も、行文簡潔にして理論高遠に亘り、一讀直ちに論旨を了曉するの難き箇所なきに非ずと雖ども、諸氏若し少しく忍耐翫味せば、却て簡勁なる文章要旨を捕ふるの便となり、貨幣に關する智能を開發すること決して鮮少ならざるべし、今第二部實際問題の題名を擧ぐれば即ち左の如し、

一、ローリストン、のジョン、ロー、の制度に對する評論、二、イングランドに對するワンポンド紙幣發行の可否、三、貴金屬大發見の結果を論ず、四、便利にして又實行の可能なる複本位に就て、五、複本位の德義上の性質、六、國際間に於ける複本位の金銀比價に於て確實なるとを論ず、七、貨幣本位の價格に於ける不同の標準、八、一般物價の移動の原因之なり、

セー、エル、ローリン貨幣論

J. L. Laughlin; The Principles of Money. (New york: Charles Scribner's Sons.)全一冊、大型五百拾拾六頁、定價入圓五拾錢、

本書は貨幣論中尤も宏濶なる著書に屬し、貨幣に關する一切の原則、即ち例令貨幣の意義、職分、性質等より、其の鑄造法、本位問題、分量問題、價格高低の理法、或は、其の信用上の運行作用等に亘り、總て貨幣に關する原理乃至歷史上の變遷を講究し、近時の著書中有數の一書たるに背かず、但し、本書は引證該博、論說詳細に涉れるの結果、文章稍冗漫にして講義條の體をなし、意義又複雜なる述說を有するが故に、初學者は尠なくも、デルマー、或はゼボンス氏の簡明なる著述を研究して、而して後之に移

るを便とす。

エー、デル、マー　貨幣學

A. Del Mar; The Science of Money. (London: Effingham Wilson. 發兌) 全一冊、大判貳百頁、定價參圓五拾錢。

氏は亞米利加合衆國に於て該博なる思索家、健全なる實行者として世に知られ、本書貨幣學は、氏が其の健實なる識見に依りて校練せられ、貨幣の原理に關する論說尤も簡易明快たり、殊に、章々序を追ひて思想整備し、學理高遠に涉らずして實想を主とするが故に、初學者の研究書としては甚だ好當なるものゝ一書に屬す。

アール、ハミルトン　貨幣及價格

R. Hamilton; Money and Value. (London: Macmillan & Co.)全一冊、大判參百九十頁、定價九圓五拾錢。

本書は主として貨幣の性質と價格の關係、及び貨幣の循環作用に就て論述せるものにして、論說稍高遠に傾むき、從て文章明快を缺くもの往々にして之あり、或は初學者の參考書としては少しく難澁なる箇所あるべけんも、靜かに玩讀の步を進め行かんには、貨幣と價格の關係に關する重要なる理義に於て、其の原理の眞相を修得すると蓋し鮮少ならざるべし。

貨幣の原理に關しては以上の著書を以て足れりとす、然れども更に少しく進んで研究せざるべからざる其の歷史的方面、及原理中の特殊の題目に關する著書は、左の數書尤も切要たるものに屬す、先づ歷史的述說に於ては、

ゼー、エー、スコエンホッフ　貨幣及價格史

J. A. Schoenhof; A History of Money and Prices. (London: G. P. Putnam's Sons)全一冊

今茲參百四拾四頁、定價參圓參拾五錢。

本書は第十三世紀より現在に至る貨幣と價格の變遷異動を述說せるものにして而かも其の重要なる問題に關しては、明確なる評論解說をも加へたるが故に、單に客觀的敘述史に止まらず、一面貨幣及價格の原理に關する考證を備へ、而して文章太だ平易なるを以て、初學者の研究に尤も好當なる一書たるべきなり。

ダブル、エー、ショー　通貨史

W. A. Shaw; History of Currency (London: Wilsons & Milne.)全一冊、大判四百參拾頁、

定價五圓六拾五錢、

本書は千二百五十二年より千八百四十四年に至る、即ち歐洲に於ける金貨鑄造の創始に起り、輓近印度政廳の銀貨自由鑄造停止に筆を留む、此の間、或は時の政策を學理に究め、或は民間の休戚を實際に徵し、或は貨幣の消長に關する古來學者の謬見を道破し、說き去り、說き來たり、考證周到、統計精確、近時有數の好著述と謂ふべし、但し、通貨史と名目を有すれども、書中述說する處主として硬貨に關し、代表貨幣たる紙幣の事は多く論題外に置けり、本書は、信夫淳平氏に依りて本邦語に譯述せらるゝが故に、原語を解せざる諸氏は同書に就て研究するの便を有す。

信夫淳平譯

歐洲貨幣史　東京牛込早稻田大學出版部發行全一冊菊判四百參拾餘頁

定價壹圓也

譯文明瞭にして原意を傳ふる正確と謂ふべし、但し、原書の附錄は、歐洲諸國に於ける古來各種の貨幣に就き、其の詳密なる由來と統計とを補述せるが、譯者は譯者之を事乃考證家の參考物に過ぎざるものとして省略し、之に代ふるに、我が日本貨幣變動の事歷一般を敘述せり、譯譯の原本は、ショー氏の再版に據る。

エー、デルマー貨幣制度史

A. Del Mar; History of Monetary Systems. (London: Effingham Wilson. 發行)全一冊大型四百餘頁、定價七圓八拾錢、

同　　貨幣と文明

〃　　; Money and Civilization. (London: George Bell and Sons.)全一冊、大型四百餘頁、定價六圓八拾錢、

二著共に氏が貨幣に關する歷史上の述說にして、前者は主として上古に於ける諸國の貨幣制度を說明し、後者は歐洲暗黑時代に於ける狀態より、現代に至る貨幣と社會進化の關係を論述す、氏の說明評論は、常に平易にして要綮を陳ぶると明確なり、上揭二書の如き、又以て初學者の好參考書たるべし、今前者の內容の國別族種を示せば、印度、波斯、ヘブリユー、希臘、羅馬、英國初期時代、アングロノルマン、ヘプターキ、プランタージネット、ヂキソン、スカンヂネビヤー、ユザーランド、日耳曼、アルゼンチン王國等にして、後者の時代邦國都府を擧ぐれば、亞拉比亞、邊尼斯、ゼノア、チヤーレ

マン、ミラン、第一期文藝復興時代、亞米利加發見時代、西班牙、葡萄牙、布拉邏留、北方の文藝復興時代、佛蘭西、露西亞、墺地利亞、匈牙利、土耳古、近代の日本、第三期文藝復興時代之なり。

ゼー、エル、ローリン合衆國に於ける複本位史

J. L. Laughlin; History of Bimetallism in the United States. (New York: D. Appleton & Co.

（邦訳）全一冊、定價參圓五拾錢。

本書は、合衆國に於ける複本位制度の起原發達變遷進化を叙述せるものにして、其の政策措置の得失長短を論ずると穩切公平、唯に本書は合衆國に於ける複本位制の歴史として其の價値を有するのみならず、又以て複本位制の性質、作用等に關する研究書たり、文章稍難解の箇所ありと雖ども、豫め本題に關する小少の素養を有するあらば、決して晦澁拮屈の感を生ずるとなかるべし

エス、シャーウード貨幣の歴史及原理

S. Sherwood; The History and Theory of Money. (Philadelphia: J. B. Lippincott & Co.

（邦訳）全一冊、定價凡そ五圓也。

本書は貨幣の原理及歴史に關し、一般的説明を加ふるものにして、所説明確、要繁を捕ふると太だ秀拔なり、其の歴史發展に關する評論は、能く經濟學上の考索として明敏なる觀察を有し、全體の統一上、繁を削り要を收むる尤も其の宜に適す、更に其の文章に於ても、平明簡易にして意義を傳ふると炳焉たり、少しく原語を解する諸氏は、宜しく就て一讀すべきなり。

此の他特殊の題目に關する著書に於て、貨幣論中其の尤も緊要の問題たる本位論に關して、更に特に一讀すべきものは、

ウォーカー國際複本位

F. A. Wolker; International Bimetallism. (New York: Henry Holt and Co.) 全一冊、小型百九拾七頁、定價參圓也。

本書は、複本位と單貨制との長短得失に關する問題に尤も明確なる説明論議を與へ、全體の性質より之を謂へば、亞米利加合衆國の貨幣政策に對する論述に止まれども、其の原則理法の述説に於ては、毫も一般の研究書として背く所なし、蓋し、斯くの如き特殊的問題の研究には、豫め一般理法の素養を要すべきは、敢て予が喋々を

須ひざるなり。

イー、アトキンソン歐洲に於ける複本位

E. Atkinson; Bimetallism in Europ. London. 全一冊,參百餘頁,參圓貳拾五錢,

本書は,歐洲各國に於ける複本位制の起原,變遷,及現今の狀況を述說せる者にして,說明,精簡の權衡を失し,稍講讀の便を缺くるものありと雖ども,既に吾に釋讀の素養を有すれば,比較驗照の討究に裨益するもの敢て尠なからず,複本位制の理法に關する參考書としては,又以て一讀を拂ふべきの著書たるを信ず

而して此の他貨幣問題に關する著述に於て一讀すべきものは,

ヂー、ダブル、ボアッスバン貨幣問題

G. W. Boissevain; The Monetary question. trans by G. Townsend Warner. (London: Macmillan & Co.)全一冊,大判百五拾頁,定價壹圓貳拾五錢,

本書は,佛蘭西ボアッスバン氏の貨幣問題に關する論說を,ワーナー氏の譯述せしものにして議論穩切,實際的考察に富み,且つ其の要旨を捕捉する太だ簡明なるが故に,初學者の一讀すべき好小冊子たるべく,其の議論の主なるものは,貨幣の本位と利率に關する問題等なり。

ヒー、キッソン貨幣問題の學問上よりの解釋

A. Kitson; A Scientific Solution of the Money question. (Boston: Arena publishing Company.)全一冊,大判四百拾八頁,定價四圓五拾錢,

本書は,貨幣問題の眞相を科學の驗照に依りて詳論述說せんとを目的とし,先づ經濟學理上,貨幣の意義,性質を說明し,其の理義の確實なるを俟つて,貨幣の循環,運轉の理法を考究せり,次序稍整齊を缺き,論說錯綜するの傾向あれど,豫め一般理法に關する素養を有せば,咀嚼玩讀して啓發を享くるもの蓋し鮮少ならざるべし。

ゼョン、ゼー、クノーキス合衆國紙幣類

J. J. Knox; United State Notes. (London: Mr. T. Fisher Unywin.)全一冊大判參百餘頁,定價六圓參拾五錢,

本書は,亞米利加合衆國政府が紙幣發行の種々の方策の歷史,及夫等方策の結果より生ずる影響等を太だ詳細に說明又評論せるものにして,直接本邦學生の利益に關係せざる如しと雖も,一國政府の國庫と其の紙幣發行額との關係に於ける理法

の研究には、大に有要なる著書たり、若し此の間の理法に關し、稍詳細なる討究を望まん諸氏は、須らく先づ本書に就て參考すべきなり。

ケツレーヂ新貨幣制度

Kellage; A New Monetary System. New York. 全一冊小判貳百數十頁、定價參圓五拾錢。

本書は、要するに複本位單本位の長短得失を論詮せるものにして、敢て貨幣制度に對する獨創の見解を標榜せるには非ず、然れども、能く其の要旨を說明論述せる、初學者の講讀書として、好當の一書たるべく、現時世界各國に實施せらるゝ貨幣制度の最も進步せる方法の一斑を知らんと欲せば、宜しく本書に就て討究參考する處あるべし。

エス、デー、ホートン歐洲に於ける銀に就ての研究

S. D. Horton; Silver in Europe. (London: Macmillan & Co.) 全一冊大判參百二十四頁、定價四圓五拾錢。

古來貨幣として使用し來たりし物質は、千差萬別の變遷を經過せしが、現代に於ては世界殆んど金屬に歸一す、而して、夫等金屬中金銀の二者は、尤も重要なる貨幣物質として承認せられ、諸國皆此の兩者中に其の基礎を覓めんとす、然るに、金銀兩者の貨幣性に關する、關係は、太だ複雜なる理法と實際上の考究を含有し、俄かに其の眞相を究明すべからず、本書は即ち此の間の理法に關する有數の著述にして、從來歐洲に於ける貨幣としての銀の活動、性質、關係を論究し、種々の方面より其眞價の存する處を討覈す、其の驗證考査博く實際の問題に涉り、諸學者の論說を掬み、批評奇拔に論詮確實、既に貨幣の原理に素養を有する諸氏は、必ず一讀熟考を拂ふべきの著書たりとす、今參考迄に內容の一般を略述せんか、一千八百八十九年九月に於ける巴里貨幣會議と英國銀錢上の運動、二、排銀主義者の議論に對する批評、三、金銀鑄造料に關する疑問と答辯、四、アダム、スミス、リカード、ゼ、エス、ミルに承認せられたる貨幣の同狀類似相に就て、五、貨幣類似の同盟と科學の進步に關する論說、六、地金と鑄造貨性に就て、七、リカードの地金紙幣說と銀の關係、八、バン、アメリカンダラーと同盟政策、九、廢貨救助の政策方法に就て、更に附錄として排銀運動と其の變改反轉の關係を論述せり。

本邦語書の部

吉井一三著
貨幣及信用政策　東京市神田區一ッ橋通七番地有斐閣全一冊大判七百八拾一頁定價貳圓也

本書は、貨幣に關する本邦著書としては先づ宏濶なるものに屬し、其の大體に於て、獨逸ハイデルベルヒ大學教授、故クニース氏の著書、貨幣及信用論を以て綱紀とす、然れども、著者獨特の創見に出づるもの敢て尠なからず、全體の上より、經濟上貨幣に關する重要の問題は、殆んど遺憾なく解決し盡されたるものと謂ふべし、殊に本位論、及之に伴ふ法貨論に於ては、議論正確、說明周細、吾人初學者の就て聽くべきもの尤も多し、更に又、著者が貨幣の根本的原理を說明せんが爲めに、主として先づ何故に貨幣は貨物の價格を計るやを論究し、其の結果、貨幣及貨物の間に共有性の通ずるあるを反復細論し、而して明確適切に貨幣の最要官能を論說せるが如き、述說の用意備はり、理論の徹底を完ふせるものと謂ふべく、而して、文章平易周到なるを以て、初學者の研究書としては最も好當なる一書たり、

堀江歸一著
レ貨幣論　東京市神田區表神保町同文館發行全一冊大判參百數十頁定價壹圓

本書は、貨幣の一般原理に關する著述にして、貨幣本性の意義より、其の流通作用及理法に關し、更に又其の政策上の原則、意義上の利害、長短等、苟も貨幣に關する一切の原理は、之を網羅して、餘す處なし、本書の特色は、複雜なる理法を遺憾なく咀嚼消化し、要察を鑒識して之を簡明に整述せるにあり、其の議論の據る處、正確にして該博、述說の到る處、周達にして明瞭、而して全體の上より、貨幣に關する思想の統一を整具せる近來斯學に關する有數の好著述と謂ふべく、特に初學者に取りて太だ有益なる恰當の研究書たるべし、

尙ほ一般原理に關する、論述は、著書に之を求むるを得ずと雖ども、左の講義錄は平明にして初等の研究に適す、

貨幣論　商田　早苗講述

（凡例參照）

貨幣論　井上辰九郎講述

以上二書共に貨幣の一般原理に關し、ゼボンス其他諸大家の說を涉獵咀嚼し、尤も通俗平易に其の綱領を說明す、素講義錄なるが故に、整備到らざるの缺點は免かれざるも、初學者に取りては原論の梯として恰當なり。

而して貨幣に關する特殊問題の著書として就て見るべき書は、

高市住太郎　川上忠平纂譯

貨幣問題。東京市日本橋區本町三丁目。博文館發行　全一冊、小判二百〇八頁。定價凡そ四十錢

本書は、英國モレスウオールス氏の論著を土臺とし、其の他諸學者の論說を纂譯し、複本位制の理法を中心として、貨幣流通の弛張及其の變動の原則を述說せるものにして、金銀貨幣の地金との關係より來る種種の現象、或は金銀比價の變動より生ずる種々の關係等周密に調査纂譯す、初學者に於ては、其の平明にして詳細なる處、尠なくも一讀すべき參考書たるべきなり。

乘竹孝太郎編

貨幣論集。東京市京橋區彌左衛門町七、經濟雜誌社全一冊大判參百餘頁、定價七十五錢

本書は、諸國の貨幣制度に考徵し、歐米諸學者の貨幣單複本位に關する論說を譯述編纂せるものにして、近代に於ける重要なる學者の、同問題に關する論說は、爰に大略網羅述說せるものと謂ふべく、同問題に對する研究參考書としては、太だ有要なる編著たるを信ず、譯文平易にして明瞭なり。

松本君平著

金貨本位論。東京市日本橋區本町三丁目博文館發行、全一冊、大判百四十頁、定價貳拾五錢。

小手川豐次郎

金貨本位制。東京市神田區表神保町八尾商店發行、全一冊、大判貳百九十頁定價六拾錢。

遠山景福編輯

金貨本位論集。東京市京橋區銀座三丁目、文海堂發行、全一冊、大判百四十二頁定價貳拾五錢。

以上二書共に、本邦去る明治三十年、貨幣改革に際し世論轟々たるの時、其の幣制の利害得失に關して本位の性質を論詮したるもの、第一者松本氏の著は、世論滔然として金貨本位論に風靡するを見て、其の論據十三ヶ條、即ち金の貨幣として銀より優等なるや否や、其の品質價格の固定性、當面の貨幣流通狀態、又萬國一般の風潮等に對し、論者の主張せる論據を論詰究覈し、金貨本位の基礎を最も犀利に批評せり、第二者小手川氏の著は、同じく金貨本位論者の主張を尙早樂天的觀察となし、之に對する論駁を金貨本制及複本位制の利害長短の理法を明らかにして評論し、述說微に亘り、議論詳細を極めたり、第三者遠山氏の編輯は、貨幣制度調査會報告書中に要旨を掲げたる、當時世論を形造りし金貨本位論者、及反對者の論說を編輯せしものにして、重要なる議論は多く聚收せられたり、共に之れ本位論に關する恰好の參考書にして、何れも一讀すべき著書たりと雖ども、其の原理討究の點より之を謂へば、小手川氏の著書を以て尤も好當なりとす、之れ議論平易にして述說平明なればなり。

矢野芳弘編

日本貨幣制度論。東京市日本橋區北島町一丁目三十六番地中外商業新報社內日本經濟會發行、全一冊、大判七百頁、凡そ八九十錢。

本書は、同會の貨幣制度に關する論文の募集の選に入りたるものを編せしものにして、甲種信夫淳平氏、乙種中村千太郎氏、以上兩氏の論文を輯む、其の題目の範圍は、貨幣制度の歷史的觀察、本邦現在の制度及將來の方針に關する論說にして、前者は廣く歷史的觀察を歐洲各國の變遷史上に考究し、本邦現在の狀態を說明するに穩切なる長短得失の論評を加へ、更に旣往を推覈して將來の方針を秀拔に論定せり、後者は、論述の方式を專ら統計表に準據し、金銀價格變動の原因を主として說明し、其の變動上より生ずす一般の結果、及其の本邦經濟界に及ぼす影響、並に本邦現行制度の改正を目下必要とするや否や、若し必要なりとせば如何なる幣制に據るを可なりとすべきやを論述し、共に有要の參考書たるを失はず。

貨幣史に至りては、歐洲貨幣史はショー氏通貨史の譯書を以て唯一の研究書とな

すの外なく、本書は既に之を原書と並べ掲げたるを以て爰に示さず、本邦貨幣史に至りては、左の數書を以て恰當の著書となす。

文學士濱田健次郎著　明治二十一年
日本古代通貨考。　東京市本郷區六丁目、哲學書院、全一冊、小判九十八頁、定價參十錢。

本書は百頁に足らぬ小冊子なれども、本邦古代の貨幣に關する事項を說明すると簡にして要旨を編述せりと謂ふべく、即ち古代我が邦が通貨として稻米を用ひたりし考證より、其の金屬通貨の容易に通用するに至らざりし理由、又通貨使用以前の狀態、始め我が邦が金銀銅に對する觀念、及之を通貨に鑄造するに至りし前後の狀況等を歷史上の記事に徵證して論說す。

齋藤垣藏編　明治二十一年
德川氏貨幣志　金一冊、小判百五十八頁、發行書不明、定價凡そ參拾錢內外なりん

本書は德川氏の貨幣に對する政策措置を中心とし、德川十五代、明治四年の貨幣制度改革に至る貨幣の種類、名稱、制定、鑄造、外國貿易の關係より起れる事項等、其の變遷轉化の狀態を敘述せるものにして、簡易に要旨を明らかにし、時々變更せられたる貨幣の比價分量等をも之を表に依りて示したり、之を以て、前揭の書と本書を併せ、之に我が國中世の貨幣史を挿入せば、最も簡易に本邦貨幣の變遷を討究するを得べけれども、右二著に類する簡單なる中世の貨幣史の著述世に存するなく、之を果す能はざるは太だ遺憾とすべし、唯舊著に屬し、冊數多大にして購入の不便を顧みずば、我が邦二千五百有餘年の貨幣の變遷狀態を尤も詳細に論述せる、大日本貨幣史を見るに如ものなし、即ち左に揭ぐる著書是なり。

吉田賢輔編述
大日本貨幣史。　全四十六冊、大藏省版、定價古書にして不明

本書は、日本貨幣史の一大述作にして、本邦古來の實例を蒐集し、正確周密に其の變遷を說明す、實際に就て研究の考證を得んと欲せば、是非參考に資すべきの書たり。

貨幣制度調査會報告書

本書は十九世紀中半の前後より、現時に至る諸國諸都市の諸種の貨幣に關する事

業を統計表作せるものにして、假令、英佛獨米の物價の割合表、或はカルカッタ、孟買、及カラチ府輸出品價格割合表、或は、支那產物輸出品價格割合表、或は、金貨國、內至、銀貨國物價平均割合表、或は、世界金產出額表、或は、本邦と金貨國乃至銀貨國との輸出入增減割合表等、千種萬別經濟社會の貨幣に關する統計を表示す、其の結論としては、以上の調査に基き、其の要領を總括して之が斷案を加へ、又劃章としては、當時(明治廿八年前後)金銀價格の變動は、我が國現行貨幣制度を改正すべき必要ありや否や、若し必要ありとせば、新に採用すべき貨幣本位、並に施行方法は如何と、夫等解決に關する當時委員の職にありし諸名士の論說を錄し、以て反對の論據を照應せしむ、吾人實際に關する參考としては、太だ有益なる編纂なりと雖ども、本書公賣品にあらざるが故に、或は手に入るゝとの難かるべく、要は圖書館の便、又は諸官省の所藏に手便りて閲覽すべし、

第二節　銀行論

英語書の部

ウォールター、バヂオット銀行論

W. Bagehot; Lombard Street, with Notes by E. Johnston. 全一冊、菊百餘頁、定價壹圓七拾錢、

氏は純然たる經濟學者に非ずと雖ども、經濟に關する述作の見るべきもの尠なからず、殊に本書ロムバード、ストリートは、英國金融市場、即ちロムバード、ストリートの實際を觀察し、周密に英國金融の狀態、及政府と中央銀行との關係を說明し、其の英國銀行仕組の脆弱なる點を指摘し、之に論評を加へ、且つ自家の考案を述て之を救治するの策を立せしが如き、議論痛快、事理明晰と謂ふべし、實際に關する銀行論の研究書としては、實に得難き好著述にして、平明なる文章は、初學者の講讀に便すると蓋し尠少ならざるべし、今其內容の大略を示せば、先づロムバード、ストリートの成立、起原、由來、組織等の說明より、金融市場に於ける大藏大臣の地位、當市場に緩漫必迫の因て來たる狀況、イングランド銀行の業務、狀態、及其の支配、株式會社私立銀行の組織、手形、仲買人の性質、イングランド銀行の準備金額、及其の整理上の主義等を論ず。

本書は小池靖一氏に依りて本邦語に飜譯せらる、原語を解せざる諸氏は、本書に就て講讀すべし、該書は左に掲ぐるもの之なり。

小池靖一譯

英國金融事情。東京京橋區彌左衛門町經濟雜誌社全一冊定價七拾五錢、

譯文周到平易にして、原意を阻嚼すると正確明晰なり、唯本書舊譯に屬し購求稍不便を感ずべけんか。

ティー、ハンキー銀行論

T. Hankey; The Principles of Banking. (London: Effingham Willson.)全一冊、大判百二十四頁、定價貳圓參拾錢也、

本書は、イングランド銀行の實務を基礎とし、主として銀行の効用經理に關する理法を述說するものにして、氏は職を親しく同銀行の總裁として銀行事業に置き、自から其の事業の實地に經驗する處深きが故に、此の間に關する智識は太だ確實穩切にして、其の理論の方面に於ても專ら着實穩當ならんことを務めたり、文章平易、又以て實用的理法の好參考書たるべし、其の內容の題目を略擧すれば、銀行業と通貨との關係、銀行業の內容、其の効用と經濟、イングランド銀行の業役と經理上の特點、國債の性質、發行局の責任、銀行業者の本分等を主なるものとす。

シー、エフ、ダンバー銀行論

C. F. Dunbar; Theory and History of Banking. (London: G. P. Putnam's sons. 發兌)全一冊、大判百九拾九頁、定價貳圓五拾錢、

氏はハーバート大學の教授にして、銀行論に於て特に名あり、氏は學理上の議論に於て明晰なる頭腦を有するのみならず、實際の方面に於ける觀察又正確慧敏にして、當時氏の著書は世の一般愛重する所たり、本書は、一八八五年、同大學學生の爲めに單に教科用として原理に關し、歷史に關し、其の他二三銀行の實務に關する數章を印刷に附せしを、更に緒言、手形、交換所の組織、アムスターダムの銀行に關する論說等を加附し、以て世に公刊したるものなり、章々皆冗贅の文字なく、簡單にして要綮を捕へ、尤も初學者の講讀に適す、但し本書は、ヲー、エム、ダブリウ、スプラーグ氏に依りて補修せられ、新たに校正を加へて再版せられたるが故に、購讀者は心して再版の著書を求むべし。

本書は、堀江歸一氏に依りて本邦語に解説せらる、原語を解せざる諸氏は、同書に就て講究玩讀の便を有す、左に掲ぐるもの之なり。

堀江歸一解説

ダンバー銀行論。東京市神田區表神保町、同文館發兌全一冊、大判二百九十四頁、定價八十錢。

本書は、解説の名を以てすれども、多く原書の眞義を其の儘傳えんとを勗められ、原書第八章、アムスターダム銀行の一編を省略したる外、著しく原書に改訂を施さず、但し其の説明上不備不明を感ずる箇所には、適當に補註を加へたるが故に、原書の眞意を傳ふるに多く背く處なかるべし。

ゼー、ダブリユー、ギルバート銀行論

J. W. Gilbart; The History, Principles and Practice of Banking. (London: George Bell and Sons.) 全二冊、上卷小判四百四十餘頁、下卷小判四百六十頁、定價全部五圓參拾六錢、10s.

但し Philadelphia: Henry Carey Baird & Co. より出版したる一冊ものは定價十圓五十錢。

氏は職を銀行事業に置き、親しく業務の實際に精通するを以て、其の實際の經驗と觀察とより成れる本書は、銀行營業上の原則を説くと最も明白にして詳確恐らく此の間に關する著述は、其の整備統一の點に於て氏の著書に優るものなかるべし、本書紙數稍浩瀚なりと雖ども、文章平易にして難解の文字なく、少しく精力を費ばば決して倦厭を感ずるとなかるべし、今内容を畧述せば、先づ上卷に、銀行事業の起源由來を説きて諸銀行、即ち、ロンドン、地方、株式、支店、定期預金、爲替取組、融通、割引、信用取引、債券、貯蓄銀行等に於ける其の實際上の經理方法を説明し、又、銀行事業の性質、效用、銀行なる名辭の意義、出所、銀行の一般的管理方法、爲替手形に關する銀行の處理、イングランド銀行の事業管理法、株式銀行等の處理等を述べ、下卷には、銀行員の管理、銀行簿記、銀行書類、イングランド銀行、ロンドン銀行、私立銀行、地方私立銀行、地方株式銀行、スコットランドの銀行、アイルランドの銀行、銀行家の手形交換所、一八五七年及一八六六年の恐慌、一八七五年と一八七八年の危機、近世銀行法令等を論述す。

ダブリウ、エー、スコット貨幣及銀行論

W. A. Scott; Money and Banking. (New york: Henry Holt & Co. 發行)全一冊、大判參百五拾壹頁、定價七圓五拾錢。

氏はウイスコンシン大學の教授にして、夙に銀行論貨幣論に關し、精通卓出の名あり、本書は、氏の最近著にして、貨幣及銀行に關する原理を論述し、理義の統一、叙說の整備に尤も心を用ひたり、殊に、文章通俗平明にして、專ら一般の講讀に便するの方針を取れるが故に、初學者の研究書として新刊書中良好の一書たるを信ず、其の內容の題目を擧ぐれば、一、貨幣の性質と職分、二、交換の媒介、三、價格の本位、四、價格の分量上の原則、五、金屬貨幣、六、政府紙幣、七、銀行通貨の性質、流通、利便、八、銀行通貨の形體と發行制限、九、同じく其の法令と安全に就て十九世紀の主なる銀行制度、及、銀行業務の方法と機關、十二、外國貿易、十三、銀行稅、十四、複本位の原理及歷史等之なり。

マクレヲッド銀行原論

H. D. Macleod; The Elements of Banking. London. 全一冊、大判四百六拾頁、定價五圓七拾錢、

本書は銀行なるものゝ本質を、最も抽象的に論じたるものにして、銀行原論としては、猶一顧を拂ふの價値あるべきか、氏は銀行の原理を論ぜんが爲め、先づ經濟の何たるかを說き、其の原理の演繹より、經濟の最要機關として貨幣の原理に說き來たり、貨幣一切の理法を考究して後始めて銀行論に入れり、されば、本書は今日の所謂銀行論なるものとは大に其の趣を異にし、今日の研究方法を以て之に望めば、寧ろ繁冗迂遠にして、陳腐の感を免かれざるべし、然れども、單に其の銀行に關する論說を抄出して講讀するに、論述周到にして理義明晰、殊に銀行に關する諸法律の說明太だ詳密にして、此の一事を以てするも未だ翻閱講讀の價値敢て尠なしとせず、原論に關し以上予が擧げ來たりし著書を以て猶ほ餘裕を有する諸氏は、其の一閑を裂いて玩讀參考すべきなり、本書の本邦語譯は、金谷昭氏に依りて譯述せらる、即ち左に掲ぐるもの之なり

金谷昭譯　明治二十一年

マクレヲッド哲理銀行論。京橋區彌左衛門町七番地、經濟雜誌社、全一冊、小判七百十七頁、實價七十五錢。

譯文平明原意を傳ふると忠實なり、

マクレヲッド氏の銀行に關する著書は、更に之を詳論せし、銀行業の原理及實行(シーヲリー、アンド、プラクチース、ヲフ、バンキング)の著書を有すれども、氏が論說の一般を知らんには、以上の「エレメンツ」を以て十分なりとす。

ゼー、チー、モールス銀行と銀行業

J. T. Morse; Banks and Banking. (Boston. Little. Brown & Co. 出版)全一冊、參百壹十頁

定價四圓八拾錢、

銀行に關する諸法律の研究に於て、前掲のマクレヲッド氏の著書を以て猶ほ不足と感ずる諸氏は、宜しく本書に就て更に研究する處あるべく、本書の主要なる述說は、其の銀行に關する諸法律の說明乃至論講にありて、銀行事業の性質上、之に律則すべき條規の眞義を說くと最も平明にして要緊を得たり、唯初學者に取りては、往々述說の專門的考究に渉り、稍倦厭の感を惹起せざるやを虞るゝものあれど、若し讀者にして之をしも忍ぶを得ば、又以て一願を拂ふべき參考書たり。

エー、エス、ボールス銀行實論

A. S. Bolles; Practical Banking. (New york: Homans Publishing Company.) 全一冊、大判參百二十六頁、定價五圓五拾錢、

氏は、フィラデルフィヤ大學財政經濟の專門校たるホワートンスクールの敎授にして、本書銀行實論は、專ら銀行經營の實際に關する理法を講述し、觀察周匝にして說明細微に渉り、全體の上より事理を說くと通俗平易、又能く學理上の解說に乏しからざるを以て、初學者の研究書としては本だ好當なるを覺ゆ、內容の主なる題目を擧ぐれば、銀行業の起原、性質、效用、組織、職分、種類等の說明、貯蓄銀行の効用、性質、監督、經理に關する論講、手形交換所の起原、效用、組織、整理、及諸銀行との關係に於ける述說、ロムバード、ストリート、諸會社の歷史、營業範圍、及其の實行法に關する說明等なり。

本邦語書の部

法學博士田尻稻次郎著

銀行論。東京市神田區表神保町、同文館發賣、全壹冊、大判三百十頁、實價

九十錢。

本書は、本邦著書に於ける銀行論の優勝なる著述に屬し、銀行に關する一般の原理法則は、殆んど遺憾なく講明せられたり、氏の述説が、常に理論の操縦自由にして、實際の驗證該博に渉り、理は能く實を修め、實は能く理の保障を完ふせると、予が敢て爰に喋々を要せざるとなれども、就中本書銀行論に於ては、理義平明、評論正確なるの點に於て尤も推稱するに足るべきもの多きを見る、銀行政策の一事に至りては、理否曲直の論詮を以て尙ほ重んずべき緊要の準程となせども、銀行に關する一般理法に於ては、既に今日較著なる研究の進歩を以て、論より寧ろ述を重んずべく、而して本書銀行論は、特に此の點に於て初學者を裨益するもの太だ著大なるべし。

堀江歸一著

銀　行　論。東京神田區表神保町、同文館發行、全一冊、大判三百頁、定價壹圓

本書は、氏の貨幣論と恰も同時に刊行せられたる最新刊著書の一にして、銀行の一般原理、及其の法則に關し、殆んど貨幣論と同一程度の述説を以て其の全般を講論す、其の講論の評價も彼の貨幣論に於けるものと敢て軒輊なく、彼の書の推稱は、直ちに本書に移して謬るなく、理義平明、繁簡述説の中庸を得たる、又以て新刊良好の研究乃至參考書と謂つべきなり。

佐野善作著

銀　行　論。東京市神田區表神保町、同文館發行、全一冊、大判三百貳十六頁

定價壹圓貳十錢。

本書は、氏が高等商業學校及專修學校へ講述せしもの、或は定刊の雜誌中へ連載せる論説を土臺とし、之に改竄補修を加へて世に刊したるものなり、一著考究を重ねると篤く、徵證を求むると汎し、評論述説の範圍は、普通銀行論と稱するものと敢て大差なしと雖ども、議論説明の的確正明を期せんが爲めに、古來學者の表明せる論述を周匝に引用し、自己の立脚を尤も明確に標榜せり、而して本書の價値は、此等研究の引證該博にして、推究考覈の資料を豊かに賦與せるに多く存すべし、然るに、引證は研究上有益なる事項に屬すと雖ども、初學者に取りては思想統一の點に於て寧ろ一種の惑を免かれざると多し、此を以て、本書銀行論は、初等の研究書として

は聊か不適合の感を有し、既にある程度の素養を有する人士の研究書、乃至參考書

たるべきなり。

水島鐵也著

銀行及外國爲替。　東京市神田區表神保町、同文館、全一冊、參百數十頁、定價八十錢、

本書は、銀行原理、及び銀行業に關する方式上の說明を前半に講述し、更に章を分ちて後半に外國爲替の効用、性質、其の實際上の形式等を論述す、本書の特色は、理實の適宜なる調理にありて、徒らに理に走りて實用を蹂んじ、猥りに實を重んじて學理を輕んずるの陋習なく、尤も巧妙に其の論說の繁簡を計れり、蓋し、本書元來初學者に主題の一般方則を講明するを方針とせるが故に、其の實際的方面に於ける說明を以て直接實用の案內書となし、其の理論的方面に於ける論述を以て直ちに學究の滿足を得んと欲せば、其の希望を滿す能はざるもの或は尠からざるべし、然れども、這は本書の目的する處を目的とせざるの罪のみ、其の方針上綱領的述說を果すや否やの點に於ては、在來の著書中又以て整備統一の法度を得たるものと謂ふべし。

法學士田代猶著

銀行及外國爲替論。　東京市麴町區有樂町三丁目一番地、實業の日本社發兌、全一冊、大判三百九十四頁、定價上九十錢、並七十錢、

本書、銀行の原則、外國爲替の法則方式を說くと、前書水島氏の著書と畧ぼ相同じ、吾人が特に本書に就て紹介の價値を認むるものは、啻に其の述說の繁簡宜しきを得たるの點に於て秀づるのみならず、原理の說明に時々題目に觸れて犀利の評論、乃至有力の議論を交へ、就中銀行の弊害を論ずるに當りて我が邦二千有餘の族生銀行を引證し、以て其の時弊を摘發せるが如き、一讀轉た痛快を覺ゆ、更に又我が國人の誤信せる信托事業に正解を與へ、法理上の性質を熟知せざる荷爲替を說明せるが如き、前揭水島氏の著書と併せ參考すべきもの尠なからず、又以て恰當なる斯學の研究書たるべきなり。

土子金四郎著

銀行實務論。　東京市本郷區本郷六丁目、哲學書院、全一冊、大判參百拾三頁、定價五十錢、

本書は、著者が紐育第三國立銀行に實務を執りし實地經驗に基き、銀行業務の狀態より、銀行經營に關する事項を細大漏さず明細に詳述せるもの、啻に泰西に於ける銀行實務の一般方則、及其の業務の說明たるに止まらず、尤も能く銀行の實際に關する研究書として初學者に好當す、若し銀行實務の何たるかを知らんと欲する諸氏は、宜しく先づ本書に就て講讀する處あるべし。

更に本邦銀行業に關し、其の實務の方法に就て述ぶるものを擧ぐれば、

增井增次郎著

銀行實踐法。　東京市日本橋區本町三丁目、博文館發行、全一冊、定價六十錢。

本書は主として我が邦銀行業の實踐法に就て、其の方則、作用を講述し引證として、は日本銀行、正金銀行、國立銀行、私立銀行等の實務法を說明す、且つ卷頭に我が國銀行の略史を述べ、卷尾に銀行に關する法規を揭げ、專ら銀行の實際を示すに勵めたり、述說簡單なりと雖ども、銀行業務の一般は大略本書に就て首肯するを得、更に之を他に求むれば、

春日昇一吉松幸次共著

銀行實務。　東京市神田區裏神保町六、廣文堂書店、全一冊、凡そ四十錢。

本書は現時我が國銀行業者の實行に係る方法を說明せるものにして、先づ銀行業務の分類を明らかにし、其の分類各部の効用、性質より、實務上の職分、措置、經營に關する事項を平易通俗に說明す、著書の價値は、一の案內書たるに過ぎずと雖ども、銀行業務の實際の一般を知らんには、通俗に之を解するの便を有す。

岡野遠光著

銀行政策。　東京市日本橋區本町三丁目、博文館、全一冊、大判四百頁定價壹圓

本書は、銀行政策の理論、實際、歷史に就て論述す、其の理論の方面に於ては、銀行の本性、本質、其の職分の性質、効用等を論じ、其の實際の方面に關しては、銀行業務の方法、實則に就て說明し、其の歷史上の敍說に於ては、英、佛、獨、及合衆國の銀行政策の歷史上の發展を陳ぶ、本書の價値は、全體に於て理論の簡明なるにあり、其の論說の內容に於ては、敢て特に大書すべきものなしと雖ども、最後の歷史上の述說は、簡單にして要綮を把捉せる、以て初學者の一讀に値ひすべきを信ず。

第三節　交通論

運輸交通の原理に關しては、英書に之を覓むるも、本邦語書に之を尋ねるも、其一般理法に關するの書としては太だ稀少にして、從前の例規に準じ該科の一般書を取捨掲載せんと殆んど不可能に屬す、道は、運輸交通の一般原理に關する理法は、經濟各論中尤も單純なる性質を有し、其の論究の範圍僅かに一般的經濟原理を述說するを職とせる經濟原論中に包容せらるゝの量に止まるが故に、自然科學的單獨の研究主題としては、一般之に重を置くもの少なく、偶〻交通に關し、運輸に關する著述の稍詳細なるものありとするも、多く交通機關の說明、運輸方法の案內に止まり、未だ以て一著完全なる交通論として世に紹介すべきもの一もあるなし、されば、今運輸交通論の研究及參考書として英和書の二部門を分かち、之に恰當して一般的研究の書冊を列擧せんと、到底勞して益を見ざるが故に、爰には兩者中より比較的良善なる述作數種を選び、唯僅かに本論部門の責を充たすに止め置くべし、其の十分なる紹介に至りては、勞ひ之を後日に讓るの外なかるべし。

加藤晴比古講

交通論。 經濟叢書掲載分冊全一冊、三百八十頁（凡例參照）

本書は、尤も科學的に交通の原理原則を考究し、論述としては、國家と交通設備、交通設備に關する行政上並に財政上の原則、交通設備に關する物價、鐵道經濟上に於ける効用等、穩切妥當にして聽くべきもの多く、其の交通機關の說明に至りても、能く經濟學上の述說たる規綱を失はず、事理平明にして時々原理に接觸せる論綱祭に當り、先づ一般書としては尤も恰好の述作たるべく、唯惜むらくは、事情の爲め講述完終に至らず、郵便、電信、賃率論の三部門を暫く後日に遺せり、著者幸ひに續講其の述說の未完を收め、更に既成の編章にして往々疎忽せるもの、或は不均齊なる箇所へ校訂を加へ、以て本論の完結を整齊するに至らば、今や落莫寥々たる本論界に、嶄たる一道の光明を投ずるものと謂つべきなり。

下村房次郎著

交通汎論。 神田區裏神保町、三省堂發行、全一冊、小判二百七十五頁、定價七十六錢。

本書は、交通各般の理義關係より、國家交通の行政、及施設の方策、更に夫等交通機關に對する實際事務の方法に渉りて、其の要旨を簡單に論究す、原理に關する論述の價値は、往々簡叙に過ぎて眞に其の用を爲さゞるものありと雖ども、交通機關に關する說明は、實際を穿ちて眞相を傳へ、殊に郵便電信に關する記事は、尤も詳確を盡せるが故に、恰も前書加藤氏の講述を裨補せるにも伴しく本書に依りて前者の缺を補はんにゝは、先づ交通論の一般に通ぜんと左迄遠きにあらざるべし。

關一解說

交通政策。　神田區表神保町、同文館發行、全一冊、二百八十四頁、定價八十錢。

本書は佛蘭西コルソン氏著、ツランスポート、タリッフを解說せるもの、先づ原著の內容を畧述すれば、佛國の交通制度を法律上より觀察し、次て運賃概論に移り、道路、運送、內國水運、海運、鐵道運送、及通信を論究し、更に各交通方法の競爭、之等觀察の結果に出づる結論を以て全般の考究を終結す、其の尤も重要なるは、運賃概論、並に最後の二章にありて、詳細なる事實的觀察を以て佛國交通制度の長短得失に關する考究を確實ならしめ、交通方法に於ける技術と、經濟の相互關係を明白にし、以て一國交通の健全なる發達を促進すべき政策を知悉せしむ、交通制度の經濟上の觀察、其の國民經濟との關係、及運賃に關する原理の如きは、未だ本書を以て上乘に屬するものと謂ふを得ずと雖ども、交通經濟上の考究に關し、技術上討究の結果を精確にしたるは、在來の著書中有數の參考書たるに背かざるべし、能く我が國學生の要を計り、特に佛國に屬するものは可成之を省約し、其の一般的資質を有する方面に專ら筆を注ぎ、繁簡宜しきを得て巧妙に其の要旨を統一す。

英語書に至りては、其の一般原理を述說せるものは、殆んど之を擧ぐるに由なしと雖ども、僅かに其の一著を求むれば、クーレー氏の一著を有するのみ、本書は、運輸に關する原理原則を攷究し、其の經濟上に於ける地位効用より、交通原理との關係を詳述し、更に運輸機關の利害得失に關する事項を論究して、其の說く處、歷史に、實際に、考證忠實にして所論又明快なり、殊に氏の文章は、太だ平易にして健確なるが故に、初學者の思想を健明ならしむるの點に於て優るゝものと謂ふべし、書名は左の如し。

C. H. Cooley; The Theory of Transportation. 全一冊、小判四百頁定價凡そ五圓也、

第四節　貿易論

貿易論として一般的述説に成れるの書は、本邦語書、英米語書共に之れ又太だ荒凉たるものにして、特に秀拔大書すべきものあるを見ず、僅かに二三其の體を成せるものを採りて一般を代表せしめ、更に稍統一を整具せる講義錄に依りて之を補遺すれば、大略左の如き著書今日に於て尤も恰當良善なりとす。

英語書の部

シー、エフ、バステーブル國際貿易論。

C. F. Bastable; Theory of International trade. (London: Macmillan & Co.) 全一冊、分冊百九十二頁、定價一圓七十五錢、3s.6d

本書は、國際貿易の一般原理を論述したるものにして、博く諸大家の學説を參照し、尤も統一的に論旨の要綮を簡明に述説す、全體の方針より之を謂へば、英國學派の自由貿易主義の根蔕が、如何なる程度に迄眞理なるや、將た又事固劃切なるやを論究し、以て保護貿易主義の論據と相對照せしむ、國際貿易に關する論述は、殆んど全般に渉りて之を網羅し、其の原理に關する考究も、巧に之を統一整齊せるものと謂ふべく、特に學生用として太だ恰當なるを覺ゆ、今內容の題目を揭ぐれば、一、國際貿易の概説、二、國際價格の原理、三、國際貿易上の貨幣、四、貸借上の平均、五、外國爲替、五、富の內國分配上に及ぼす外國貿易の影響、七、收入を目的として外國貿易に課する租稅、八、自由貿易の論據、九、保護貿易に對する議論、十、勞働と資本の移轉、十一、貿易論の沿革、十二、外國貿易に於ける反對論に就て。

本書は本邦語の譯書を有す、即ち早稻田大學より經濟政策と合本になりて刊行せらるるもの之なり、

土子金四郎、田島錦治共譯

經濟政策附外國貿易論。　早稻田大學發行、全一冊、大判三百三十一頁、定價一圓四十錢。

即ち右譯書中、經濟政策はシヂヴキック氏の著述を譯し、貿易論は、バステーブル氏の著を飜譯す、譯述、所々意義散漫、所説晦澁に陷れるものあれども、熟讀翫味、靜かに原

著の旨意を推考せば、恐らく論旨の一般に通じて誤る所なかるべし。

フォーセット自由貿易と保護貿易。

H. Fawcett; Free trade and Protection. (London: Macmillan & Co.) 全一冊、大型七百十三頁、定價三圓九十錢、7s.5d.

〔本書は、主として外國貿易の一國商業の手段として其の自由乃至保護の推重すべき眞相を論究せんとを目的としたるものにして、廣く諸學者の所說を參酌し、先づ自由貿易と英國との關係より、保護主義より來たる輸出の限度、輸入に對する限制の程度、自由貿易と其の反動等を論究し、更に保護主義者の議論を討覈し、之等貿易手段の措置に因由する通商の衰頽、又之等に對する通商條約の眞價等を述說す、說く處總て實際と理論を咀嚼し、穩切なる議論に依りて兩主義の長短を辨別す、所說中時に早や陳腐に屬するものなきに非ずと雖ども、尙ほ以て參考すべきもの尠なしとせず、購求手に入るあらば宜しく就て學ぶ所あるべきなり。

本書には本邦語の譯書を有し、原語を解せざる諸氏は該書に就て一考するの便あり、即ち左に掲ぐるものの之なり。

駒井重格譯

自由保護貿易論。　全一冊、參百七十頁、定價不明、舊譯にして廣刊に屬する故古本屋を探す外求め難かるべし。

右は單に飜譯に止まらず、其の難解と思はれる箇所には適當の評釋を加へたれば恐らく何人も誤解を招くとなかるべし。

此の他、自由貿易保護貿易に就て論ずるの書敢て尠なしとせず、之等の內尤も大膽に其の缺點を披撥し、又論駁辨難し、以て好對照をなせるものは、バスチャの著述と、バイルスの論說とす、共に論鋒銳利、遺憾なく兩者の弱點を互に攻擊し、以て自說の主張を固持せり、素より今日に於て所說陳套、又偏執、一貫の著として見る能はざる箇所なきに非ずと雖ども、其の兩者の缺點に對する論詮は、就て參考すべきもの多く、殊に「バイルス」氏の著書の如き、單に一塲の論議にあらずして、徹頭徹尾科學的述說の原理に基かんとを期し、其の主張を確保せんが爲めには、種々實例を引用證擧し、其の理論を確的ならしめんが爲めには、深く論據の基く處を釋述し、論調總て痛快を極めたり、舊著に屬すれども、未だ廣刊に至らず、諸氏宜しく購ひ得て一考を拂

ふべきなり、書名定價即ち左の如し、

J. B. Byles; Sophisms of Free-trade. (Philadelphia: Henry Carey Baird 發行)全一冊、

外貨二百八十六頁、定價凡そ二圓、

F. Bastia. Sophisms of protection. (Newyork: G. P. Putnam's Sons 發行)全一冊、外貨二百

發十頁、定價二圓五十錢、　$1.

外國貿易論を考究するに當り、直接重要を感ずるものは外國爲替の理法とす、而して該理法に關する著書中、尤も推稱するに足るは、左のゴッチェン氏の著述之なり、

セー、ゴッチェン　外國爲替論。

J. Goschen; The theory of the foreign Exchanges. (London; Effingham Wilson, Royal exchanges)

全一冊、大判百五十二頁、定價三圓四十錢、　6s.

本書は外國爲替の原理を專ら理論上より述說せるものにして、其の理法を論究せる箇明にして正鵠を得たるものと謂ふべし、且つ理論の證據たる實際の方面に關しても、說明確的にして冗辯なく、尤も學生用として適切なるを覺ゆ、今其內容を示せば、先づ外國爲替と諸取引の關係に關する原理を通論し、次いて海外爲替の根礎たる國際貸借の關係、債務を包含せる外國爲替手形の種類、外國爲替手形の價格の變動を決定する價格の種々なる要素を論じ、更に外國爲替の解釋、方法、又社會が云爲せる外國爲替矯正策の何たるかを論究す。

本書には、本邦語の譯書を有し、大倉書店より發賣せり、左に掲ぐるもの即ち之なり

成瀨正恭譯

海外爲替通論。　東京日本橋區通一丁目、大倉書店、全一冊、大判百五十二頁、定價壹圓。

譯述、往々所謂飜譯臭味の散漫不正確に辭句遠曲せる箇所ありと雖ども、一般に原意を解して謬る處なし、唯本書に驚く處は、代價の高價なるにありて、恁ては眞に本書の本旨を果せるものと謂ふべからず、吾々を以て之を見れば、本書の賣價は半額强を以て十分足れりとすべきか。

此の他、貿易論爲替論の原理に關しては、經濟原論中に見るべきもの尠なからず、中にも、ゼ、エス、ミル著經濟原論貿易論部。エフ、ウォーカー著マニュアル、オブ、ポリチカル、エコノミーの同部。ゼ、イー、ケナネッス著、サム、リーディング、プリンシプルス、オブ、ポ

リチカル、エコノミー、第三編、ゼー、エス、ニッコルソン著、プリンシプル、オブ、ポリチカル、エコノミー貿易論及爲替論部等尤も參照すべし。

本邦語書の部

樋野體助著

國際貿易論。 東京日本橋區通三丁目、博文館、全一冊、大判二百七十五頁、定價四十五錢。

本書は國際貿易に關し、多く事實の方面より其の性質、內容、形式を說明せるものにして、原理に關する著書としては、究理慮淺未だ以て一貫の論著とすべからず、されど、一通り貿易に關する事項を最も普通に述說せるは又以て一顧を拂ふに足るべく、今斯界の著述甚だ寥々たるの際、宜しく就て其の一般を學ぶべきなり、著書內容の順序を略述せば、貿易の簡單なる歷史より、國際貿易の趨勢、帝國々際貿易の沿革趨勢、變遷、消長、國際貿易の形式、即ち國際賣買輸出輸入或は稅關等に要すべき手續、書式等を說明し、更に、國際貿易の機關、即ち海運、海上保險、外國爲換、世界各國の貨幣、度量衡等を簡單に論述す。

貿易論の原理に關しては、譯書ながら彼のバステーブル氏著貿易論、及、フォーセット氏著自由保護貿易論太だ有要なり、諸氏宜しく右二著に就て深く學ぶ所あるべし書名內容は之を英語書部に掲げたるを以て爰に省畧す。

井上辰九郎講

自由保護貿易論。 早稻田大學講義錄(凡例參照)

本講義錄は、自由貿易保護貿易の得失を論じ、外國貿易の一般原理を平易通俗に講述す、論綱フォーセット氏の著述に拘む處多きが故に、兩々對照講究せば、蓋し啓發する處鮮少ならざるべし、外國爲換論に於ては、其の原理に關しては既に之を英語書部に擧げたるゴッチェン氏著外國爲換原理を譯述せる成瀨氏の譯書に就て之を學ぶべく、其の原理內至實際に涉りて、尤も推稱するに足るの書は、土子氏の著述とす、即ち左に掲ぐるもの之なり。

土子金四郎著

外國爲替詳解。 東京本郷區本郷六丁目、哲學書院、全一冊、大判二百二十頁、定

價五十五錢。

本書は、外國爲替の原理、通則、及實行方法に關し、懇篤周密なる說明を論述せるものにして、學理と實際を圓滿に調和し、所說剴切、毫も難澁の箇所なし、其の稍複雜なる關係を有する箇所には、通俗平易なる說明と圖解を挾み、初學者の修得に便して遺憾なからしむ、今其の內容の題目を示せば、一、二、外國爲替の定義、及解釋、三、爲替相場四、爲替手形の需用供給を生ずる原因、五、爲替の順逆平準、六、爲替相場の趨方、七、兩國相互の爲替相場、八、手形の期限及信用より生ずる爲替相場、九、異例の爲替相場、十、爲替相場と金利との關係、十一、間接爲替、十二、爲替相場の變動及回復、十三、其の輸出入品の市價との關係、十四、爲替手形の種類及雜形、十五、爲替に關する銀行の實務。

此の他貿易論に關し、吾人の參考すべき著書は左の三著とす、

海外貿易擴張論。　東京日本橋區北島町一丁目三十六、中外商業新報社內日本經濟會發行、全一冊大判二百八十頁、定價凡そ四十錢。

本書は、日本經濟會が外國貿易の現狀、外國貿易擴張方法の二題に課したる懸賞論文の甲乙二種を收めたるもの、即ち、甲者は荻原利貞氏、乙者は中林千太郎氏にして、前者は、金融保險、運輸倉庫の完備を以て貿易擴張上樞要なる政策となし、其の貿易機關としての價値に就て簡明なる論究を與へ、更に領事制度の革新、商業教育の振興、臺灣商業の經營等を其の尤も緊急の事項として說論す、後者は、東洋貿易、殊に支那貿易に着眼し、盛んに工產物の輸出を奬勵すべきと、更に總ての方面に積極主義を把持せんとを呼稱せり、共に餘暇一讀を裂くの價ありと謂ふべし。

大藏省記錄局編輯

貿易備考　東京神田區裏神保町富山房發賣全一冊第一集二千百六十三頁價二圓五十錢

此の書は、貿易に關する事物を編輯解說し、以て其の業に志すものゝ參考に供す、貨物の品目は、概ね本邦海關輸出入價格一萬圓以上に拘るものを擧げ、其の或は一萬圓未滿のものと雖ども、外國貿易に緊要なる本邦特產のものは之を特に載錄せり、貨物以外、記錄になれる事項は、市場、問屋、爲替、電信等に關し、又內國並に締盟各國著明の都府、港津の如き貿易に關係して、重要なる地位を有するものは、其の大體の說明を附記加錄す、本書の吾人に取りて要用なるは、之等の實際的方面に關する事實

上の智識の啓發にして、苟も貿易に關して討究する處あらんと欲する諸氏は、常に實社會に於ける貿易の趨勢に着目留意し、自己の原理を事實の驗證に埃つと、其の最も肝要なるとに屬す。

横山耕一郎著

貿易指鍼　神田區表神保町東京堂全一冊百九十三頁定價二十五錢

本書は、外國貿易に要すべき書式を解明したるものにして、即ち、外國爲替、海上保險、傭船約定、及船積證書、送荷仕切書、及賣上仕切書、關稅及附屬上屋倉庫の手續、形式、性質を通俗平易に解明す、之等のとは、原理研究上素迂遠に屬するが如しと雖ども、其の實太だ理法釋讀の上に直接の關係を有す、本書の如く、簡單平明に、而かも實際に適切して其の書式を說明したる書は、一寛を拂ふに便利にして其の效果は却て比較的至大なるものなり、初學者と雖ども、便宜一讀を惜る書に拂ひ畫かんには、自己の研究上、智識を正確明瞭ならしむるの點に於て尠なからざる利益を享くべきなり。

第五章　經濟史

經濟史は、古來人類生存狀態の經濟的方面に於ける事實の連續的關係を研究するものにして、其の研究の結果は經濟原理の基礎となり、應用經濟の考證となり、吾人經濟學研究上、太だ緊要なる學科に屬す、然るに經濟事實の發達は、各國歷史を異にするに隨ひて其の發展の關係を異にし、其の大體の進化の狀態に於ては、發達自然の法則に契合する所ありと雖ども、尤も經濟事實の研究を必要とする理由の多くは、各國特殊の歷史上の經濟事實の發展關係に存す、之を以て廣く經濟史の研究と謂へば、古來經濟的發展の歷史を有する各國の進化に就て、其の特殊的研究を遂行するを以て目的とせざるべからず、然れども、斯くの如きと之れ太だ廣大なる事業に屬し、僅かに研究の一部を裂いて之に任ぜんとする一般的程度の研究を目的とするものゝ、到底能く成すべきに非ざるや論なし、されば、予が爰に經濟史研究の著書として掲ぐるものは、素よりしか各國特殊の經濟發展に涉りて研究するを目的とするものには非ずして、多く吾が帝國古來の經濟事實の發達關係を研究するを

以て直接の目的となし、餘は深く之を問はざらんとす、若し諸氏にして强て之を經濟史の題目に添はざるものとなし、進んで各國殊別の經濟史研究の著書を採擇せざるの罪を問はんか、そは諸氏が一般的研究の程度を無視し、專攻の關域を欲求するの過望に出づるものと謂はざるべからず、何者、經濟史の獨立科學として研究の必要を稱導せられたるは太だ近時のことに屬し、未だ經濟史の著書として世に存するものは幾何もなく、今若し其の殊別的研究を世界の各國に遂げんと欲せば、各國經濟上の發達に關する諸種の著書、例令、商業史、工業史、農業史、貨幣史、貿易史等、各々其の部門的著書の撰擇を計り、之に依りて其の各自の發展の狀態關係を該究し、其の研究の結果を綜合して始めて經濟史の研究に到達せざるべからず、即ち、其の研究程度や、全く之れ專門の範圍に屬せざるべからざればなり、然れども、元來我が國產業の發達は、近々三十有餘年の現代に屬し、史上に於ける經濟發展の理法に、經濟原理の考證を求めんとするの點より之を謂へば、左迄多く直接の裨益を有するなし、此の點よりすれば、寧ろ尤も其の一般の綱領に止むるも、尙ほ產業の先進國たる歐洲各國の經濟事實の發展に學ぶの利なるに苟かず、之を以てか、予は先づ日本經濟史の研究著書を掲ぐるに先立ち、歐洲經濟史の一般並に產業發達の尤も先進國たる英國の經濟史の一般を掲げ置くこととすべし。

原書の部

ゼームス、ローゼル、歷史上の經濟的說明

J. E. T. Rogers; The Economic Interpretation of History. (London: T. Fisher Unwin.) 參一

卷大型五百二十四頁、定價凡そ七圓五十錢。

本書は、氏がヲックスフォード大學に於ける講義を校訂改寫し、以て世に公にせしものなり、本書を以て、今經濟史と見做すが如きは素より不當のことたりと雖ども、要するに、本書は歐洲歷史上に現はれたる經濟現象を幾分時代に隨ふて捕捉し、之に經濟原理の理法を時々題目に觸れて述說するを目的とし、一面經濟思想史の觀を兼ねど、其の多く基く所又以て經濟事實史の觀を免かれず、されば、單に經濟史講究の目的を以てのみ之に望めば、其の事實の歷史的系統に不悉の箇所尠なからざるの一事は、本來本書の目的とする處に非ざれば當然の數として勿論のことたりと雖

ども、經濟史研究の應用的方面に於ける目的を以て之に望めば、吾人の經濟に關する歴史的討究の智識を啓發するもの敢て鮮少なりとせず、此の點より見て、本書は特に吾人の經濟史研究に甚だ有益の著述たるを信ず、但し、本書は斯くの如く、ある經濟現象を歴史上に說明するを以て目的とせるが故に、其の內容の題目を示すと太だ必要なり、故に今其の目次の大綱を示せば、

一、歴史の經濟的側面、二、勞働法令と其結果、三、土地と耕作者との關係、四、宗教的運動の社會に及ぼせし影響の結果、五、外交と商業、六、上代に於ける租稅の特質、七、英國に於ける諸時代の富の分配、八、英國の耕作地代の歴史、九、十、金屬貨幣と紙幣、十一、英國貧窮の起原と進步、十二、歴史の結果たる價値の高低に就て、十三、自宅製造、十四、組合と年期奉公組織、十五、殖民地貿易の勃興と進步、十六、無干涉主義の起原と歴史、十七、英國に於ける保護主義者運動の歴史、十八、輸入と輸入表の解說、十九、皇室の財產、其の回收の調査、二十、公債、二十一、近世租稅の原理、二十二、英國に於ける地方租稅の目的と特質、二十三、一般の需用供給に對する政府の政畧、

本書は本邦法學博士田尻稻次郎氏に依りて其大體を解說せらる、原語を解せざる諸氏は該書に就て講讀すべきなり、詳しくは、本邦語書の部に就て見られよ、

イー、ナイス經濟史

Ernest Nys. History of Economic. trans by N. F. and A. R. Dryhurst. (London: Adam and Charles Black.) 全一冊ナ倉三百十九頁、菊倉三圓七十錢、

本書は、歐洲に於ける重要なる經濟事項に關し、其の歴史的變遷を述說せるものにして、完全なる經濟史と稱呼するを得ずと雖ども、夫等の事項に關する記述、歴史の著明なる現象に觸れて、簡明に其の綱領を捉へ、毫も穿索的記述に涉らずして最も一般に又平明に梗概を述說せるが故に、初學者の講讀書として太だ恰當なりとす、但し、本書素小冊子に過ぎざるを以て、記事豫め普通歴史の素養を豫想す、全く普通歴史の素養を有せざる諸氏には、或は簡單に過ぎて要を得ざるの感あらん、然れども、猶は元より讀者の其の處を得ざるの罪にして、著書の缺點にはあらざるべし、今內容の大綱を略述せば、一、上代に於けるバイザンチンとムスルマンの經濟現象に及ぼせる影響、二、ノルマン社會とフレデリック大王二世の政治、三、中世に於ける都市の起原、成立、情態、四、歐洲に於ける商業及工業の發達、五、商業政策の起原、發展、六、中

世に於ける經濟思想、七、中世に於ける猶太の情態、八、商人と銀行業者の起原、發達、九、教會の租稅法院、十、貨幣の起原、發達、十一、租稅、貯金、公債等の起原、由來、十二、商法の制規、附、爲替組織の起原、由來、十三、近代の初期の狀態之なり。

カールブーチヤー　產業上の發達

Carl. Bücher: Industrial Evolution. trans from the German by S. Morley Wickett. (New york: Henry Holt and Co.) 全一冊大倉三百八拾五頁、定價五圓五拾錢、　$2.25

原著者は獨逸レープチック大學の經濟學の教授にして、本書は經濟史上の著述として夙に名あり、本書の述說する處、又以て直ちに經濟史と稱謂するを得ずと雖ども、內容の題目に對して、經濟上の事實を歷史上に說明したるの點は經濟史として太だ重んずべき述說多く、殊に初期時代に關する記事は、材料豐富、論說博達にして最も吾人の就て聽くべきもの多し、全體の上より之を經濟史と命名するを得ざるは勿論のとたりと雖ども、歐洲經濟史の研究上、太だ有要の著書たるは敢て明言するに不可なかるべし、譯文能く原著の意を體し、通俗にして而かも科學的述說たるに背かず、平明忠實に詳述す、著書の內容題目は即ち左の如し。

一、初期時代の經濟狀態、二、初期人民の經濟的生活、三、國民經濟の興起、四、產業組織の歷史的考査、五、手工藝の衰頽、六、新聞業の創始、七、勞働合同と普通勞働、八、勞働の分類、九、工業組織、及社會階級の形造、十、人口の內部の移遷と都府發達の歷史的考索、

此の種の著にして更に他の方面に於ける經濟史の研究書は、リチヤードイリー氏の產業社會の革命に關する研究之なり、今之を左に掲ぐれば、

R. T. Ely: Ltudies in the Evolution of Industrial Society. (New york: Macmillan & Co.) 全一冊大倉百八十九頁、定價四圓、　$1.25

本書は、古來產業社會の經過し來たれる發達の狀態を述說せるものにして、時に論說動念の推究に及び、結果の理法に係り、全く經濟史の述說に關係なき箇所尠なからずと雖ども、發達の關係を論じて時代の經濟事實に說明を與ふるもの、經濟史の研究に資して有益なる記述鮮少なりとせず、又以て經濟史研究の主として應用的方面に於ける有數の參考書たり、今其の內容を略述せば、

全卷を二篇に分かち、第一篇に、社會に於ける發達の一般的査察、產業社會と發達

の關係、經濟社會の古來經過し來たれる階段、即ち、獵漁時代、牧畜時代、農業時代、手工時代、產業時代の狀態、淵源、關聯、經濟界に於ける階級、近世產業上の開發の傾向、第二篇には、主として產業上較著なる革新問題に就て論詮す、即ち、競爭の性質、利害、經濟的生活の拮抗と成効、社會の進步と競爭の改良、獨占とトラスト、都市の自然的獨占者なる事に就て、富の集散、財產の世襲、公義的勞働の革新、產業上の平和、產業上の自由產業上に深大に貫通せる道義的義務心、ボールドウキン說を評論して社會及道義の說明に及ぶ、社會改良の可能的性質之なり。

ビー、ランド、經濟史

B. Rand; Economic History. (London: Macmillan & Co.) 全一冊、大型五百四十四頁、定價七圓、12s.6net.

本書は一千七百六十三年以來、現代に涉れる歐米に於ける經濟事實の變遷進化を論說或は記述せるものにして、事實上に於ける考證確實、亦諸學者の述作に參照する處該博にして尤も吾人の信憑を委ねるに足る、初學者に取りては稍專門に過ぎ、其の考察と記述の多方面に亘れる結果、或は綜覽統括に難ずるものあらんも、文章平明にして事理を說くに周到なる注意と用意を以てせるが故に、少しく豫備的素養を備ふるあらば、僅かに講讀の精を注いて左迄綜合統一の困難を感ずることなかるべけん、元來經濟事實の歷史的討究は、毫も青年の情的興趣を誘起すべき事象の變化なく、忠實なる智識上の研究を欲求するもの、外には多く乾燥無味なる維厭の情を惹起するのみ、然れども、苟くも經濟學の研究に志さんと欲する諸氏は、之等事實の討考最も必要にして、單に理論上の原理をのみ就修するを以て滿足せば、所謂机上空論を弄するの外何等の眞伎倆をも發揮する能はざる非實用的境涯に止まるものにして、之れ經濟學研究者として最も其の品價を減殺するものなり、諸氏は一度經濟學研究に志望を定むる曉は、常に此の間の事理を領悟し、理實並び究むるの思念を以て十分事實の觀察に討究の眼を注がざるべからず、而して本書の如きは、此の資料を豐富に提供するものにして、諸氏が熱心なる閱讀を傾注するの價値あるを信ず、今其の述說の內容を順序に隨ひ目次的に略述すれば即ち左に陳ぶるが如し、

一、歐洲に於ける殖民政畧の起原由來變遷、二、諸種の大發明に關する發展の事蹟、三、

佛蘭西革命の經濟的原因、四、スタイン及ハーデーンベルヒの布告、五、公會の順序、六、英倫の財政の變遷、七、商業政策の復興に就て、八、穀物條例の由來及其の結果、九、十、十一、十二、金の產出、運輸の法、生產狀態の變遷等に關する論說、十三、佛蘭西の敍の價金支拂の結果、十四、千八百七十三年より同じく七十六年に至る其の價金清算の事情十五、亞米利加合衆國に於ける製造所制度及鐵剛に關する產業の發達、並に同國に於ける綿製造の變遷進步上の記事論說等、十六、世界の商工業の進步、附錄として英米の航海業加奈太の發達等を說く。

キッビンス、十九紀世に於ける經濟及產業の進步

H. De B. Gibbins; Economic and Industrial progress of the Century. (London: The Linscott Publishing Company.) 全一冊、中判五百十五頁、定價二圓九十錢、 5.8.

本書は、十九世紀初頭より最近時に至る世界產業國の經濟的活動を、世界より之を謂へば歐洲を中心とし、歐洲より之を謂へば英國を中心として論評述說す、社會現象中尤も複雜なる經濟現象の發展を、尤も通俗平明にして而かも科學的述說たるの器を喪はず解說したる氏の技倆は、唯感服の外なく、其の英國に重を置き他國に

筆を略したる點は或は一般史として聊か不備の批難を享くるの動機となるとあらんも、其の省略約節の見解宜しきを得唯無謀に緊要なる主題を放擲せるにあらざるを以て、解說却て冗漫を省き、初學者の研究書としては、寧ろ好當の述作たるの稱譽をなせり、本書述說の時代は、經濟發展の最も旺盛なる時期に屬し、特に內容の題目を稍詳細に擧ぐるの必要を見るが故に、左に詳細の目次を掲ぐべし、

一、緒論、產業の革命と革改を歷史上或は現在事實に徵して論說す、二、十九世紀初頭に於ける英國の製造界、三、四、五、章に亘り、產業上、機械、石炭、交通機關等の發見、發明、施設等より來たる發展、六、舊世界と十九世紀初頭に於ける新世界の對照、七、十九世紀初頭に於ける英國と合衆國、八、九、十、十一、十二章の各章同じく該初頭に於ける佛蘭西、英殖民地中加奈太、印度、亞米利加、東洋、濠洲に於ける產業商業の經綸、十三、千八百十五年迄に至る大陸戰爭と其の商業上の氣運に及ぼせし影響、十四、ナポレオン主義の封鎖の結果、及其の影響、十五、英國と合衆國との戰爭、及大陸の封鎖の他の影響、十六、戰爭時代の財政上より來たる影響、十七、十九世紀初期に於ける佛蘭西の商業政策、十八、十九、獨逸、露西亞、合衆國の商業政策、二十、十九世紀初期の亞米利加商業の

進歩、二十一、新商業政策に於ける英國商業の發達、廿二、英國の穀物條令と人民の狀態、廿三、英國穀物條令の廢止、廿四、英國の商業政策と其の商業の進歩、廿五、政策の原理と商業進歩の關係、廿六、七、八、佛蘭西の進歩、鑛山製造所、商業政策、廿九、卅、卅一、獨逸商業進歩の事實史、卅三、濠洲の發展、卅三、四、伊太利の發達、卅五、六、露西亞、卅七、ポーランド、卅八、白耳義、各其の商業進歩の發達史、卅九、社會の進歩と諸各國の一般及經濟的狀態との關係、四十、勞働社會の發達、四十一、大陸利頓に於ける職工の悲慘狀態と其の發達、四十二、種々の產業に於ける兒童の使用、四十三、英國の貧窮と進歩、及其の勞働者の進歩と行動、四十五、十九世紀の農業、四十六章より五十二章に至る、亞米利加、英、佛、獨、濠洲、亞弗利加、魯西亞、其他歐洲各國に於ける農業の進歩、五十三、製造產業界の進歩、五十九、合衆國の商業政略、六十、國際貿易の發達、自六十一章至六十七章、帆船の發達より蒸汽船の航海、世界航路としての大洋、大英國と其の得意國、歐洲諸國の貿易關係、合衆國と南亞米利加、印度と支那、日本と東洋の關係を論ず。

以上掲ぐる處を以て歐洲經濟史の事實に關する研究書となすは、ギッビング氏の十九世紀史を除く外不當の箇所多くして不備不悉を敢てするものたるや言を俟たずと雖ども、未だ完全なる歐洲經濟史を見る能はざる今日に於て、一般的研究者の爲めに幾十卷の部門的事實史を掲げんよりも、少しく簡用の方面に重を置くも、全般を網羅して一著以て經濟史の觀を爲せるものを採るの優るを思ひ、不備不當を顧みず敢て暫く錄して其の研究の裨補となす。

英國經濟史の著書は漸く世に刊するもの多く、其の最も良善にして能く平明に英國古來の經濟的事實を述說するものは、左に掲ぐる數書之なり。

カンニングハム英國產業及商業の發達

W. Cunningham; The Growth of English Industry and Commerce. (London: Keg Paneul, Trench and Co.)全二冊第一卷上古中世の部大會六百四十九頁、定價入圓也、第二卷近世の部大判七百七十一頁、定價九圓也、(但し本書は第三版に於て增補訂正せるが故に第入の頁は第三版卷末に於て 1880.卷の出頁を讀む可し)

本書は、全部二冊を以て英國上代の產業及商業の狀態より、近代最近時に至る其の發達、變遷の跡を詳述し、說明懇到、材料豐富、曾に述說の經濟的現象に精しきのみならず、各時代に於ける社會の經濟以外の他の現象、例令戰爭の如き、政治上の制度の

如き、或は又當代の時代思潮、又は社會主義等との關係を明らかにし、更に又、一國地勢上の地位形勢より交通航路の發展に伴ふ關係をも論說するが故に、單に產業及商業の發達史に止まらず、優に一個恰好なる經濟史たるの價値を有す、殊に本書の初學者に取り尤も有益にして恰當なるの點は、行文の平易述說の平明なるにありて、元來本書は著者が僅かに英國史の素養を有せば、未だ經濟學の智識なくも能く英國產業の發達變遷を知悉し、其の原因の因て來たり、結果の由て興隆弛廢せる經程を知らしむるの目的を以て著述せるものなるを以て、書體の宏濶なるに拘はらず、太だ明瞭平易に讀了するの便利を有す、されば、研究の諸氏若し少しく本書に精を注がば、左迄の困難を見ずして英國經濟の發達發展の史籍を遺憾なく研究するを得べけん。

・アスリー英國經濟史及原理

W. J. Ashley; An Introduction to English Economic History and Theory. (London: Longmans, Green and Co.) 全二冊第一卷分冊二百二十二頁、定價參圓 5s. 第二卷分冊四百八十八頁、定價五圓六十錢、 10s. 6d.

本書は、英國經濟の發達發展を述說し、更に時々問題に觸れて其の原理を論講す、啻に事實史として研究の價値を有するのみならず、其の應用的方面に於ても參考すべきもの、太だ多し、前者カンニングハム氏の著書と駢讀該究せば、自から啓發するもの尠少ならざるべし、蓋し、本書は第十世紀より第十六世紀の終り迄に筆を擱し、主題の性質に依りては事實の說明より原理の孜究を重んじたる故に、前者カ氏の著述に比すれば、事實史としては遙かに簡單不悉の著書たるを免かれず、隨つて、經濟史研究の著書としては、寧ろカ氏の著述の參考書として有益なる價値を有す、本書は、年代を中世に止むるを以て、參考の爲め其の內容の主題を示せば、上卷、第一章貴族所有領地制度の起原、狀態、變遷より、貨幣經濟の出生に至る、第二章、商人組合、職業組合の起原、及、市長との關係、又、其の組織特質等より、內國貿易、「イングランド」に於ける外國商人、當時の狀態、關係等、第三章、經濟上の學說、論說、又經濟に關する立法、法令等、第二卷、都會、即ち商業中心地に於ける市長の至上權より、職業の性質、本分、發達、羊毛產業の起原、發展、田土平分法の革新、貧民の救治策問題、經典に基く經濟觀等を論究乃至講述す。